

2009

大正十三年一月二十九日(第三種郵便物認可)  
昭和六年四月一日發行(每月一回一日發行)

永樂町人 編輯



四月號

(第十四百六號)

東京書籍



何時も純粋で  
型の麗しのーモダンタイプの  
**マイゼアルカカラス**

京坂行前大門口三丁目二八  
マイゼアル朝野製靴部  
電話号 五九六二二番



## 銘酒 ツリルト

メートル法實施せられて  
早くも五週年

四月一日より我が商工奨  
勵館に於てこれに因める  
計量展覽會は開かれませ

銘酒「ツリルト」は同法實  
施と共に生れ同法普及の  
如く世に普及し而も芳醇  
天下第一との好評

謝恩の心持にて

四月一日より一週間

二ツトル瓶入

(貳圓參拾錢)

を壹圓八拾錢に大割引し尙何等か  
の記念品を贈呈致します、どうぞ  
下しく御用命を

町本城京

難波酒造場

金剛飴  
金剛六子  
金剛饅頭

絕崖喫茶部  
金剛山

電話本局  
四二四五



目丁二町本城京

屋 龜

五七四 七二局本話電





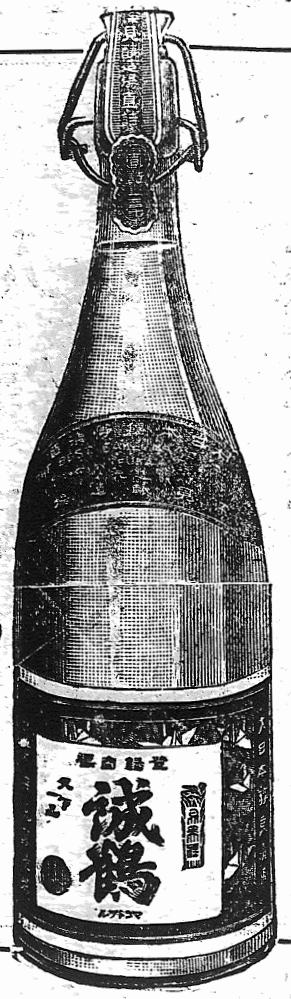
# 春日禮讚

西行法師

おしなべて花の盛りとなりにけり  
山の端ごとにかゝる白雲

花の朝、月の夕、よも

「誠鶴」のうま味を  
忘るゝ人あらじ



## 「誠鶴」

一萬千本 大賣出し

賣出期間 三月十日より  
五月十日まで

一升瓶詰一本毎に花王石鹼一個宛進呈

醸造元

深見醸造場  
深見京城支店

(南大門通五丁目)

歐米直輸入  
時計眼鏡  
貴金屬一式

京城本町二丁目

田中時計店

電話本局二一五七番  
振替京口座四三八七番

# 會場

京城東大門外  
新設里競馬場

# 會期

四月

三日 大祭日  
四日 土曜日  
五日 日曜日

各日共 午前九時半發馬(雨天順延)

# 春季競馬大會

十週年紀念競馬大會

# 會期

四月

十日 金曜日  
十一日 土曜日  
十二日 日曜日

社團法人 朝鮮競馬俱樂部

# サッポロビール

工場<sup>工場</sup>の完備<sup>完備</sup>と……  
多年<sup>多年</sup>の経験<sup>経験</sup>と……  
最新<sup>最新</sup>の科学<sup>科学</sup>と……  
優秀<sup>優秀</sup>の技術<sup>技術</sup>で……  
出来<sup>出来</sup>た最高級<sup>最高級</sup>品



サ  
ッ  
ポ  
ロ

# 春の レディメイド賣出と 20日

常に優秀な生地と獨特の高級仕立で  
定評ある丁子屋春のレディメイド賣出  
特に本春の勉強振りを御覽下さい！

セビロ三揃

(紺、黒セル) 二十二圓より……

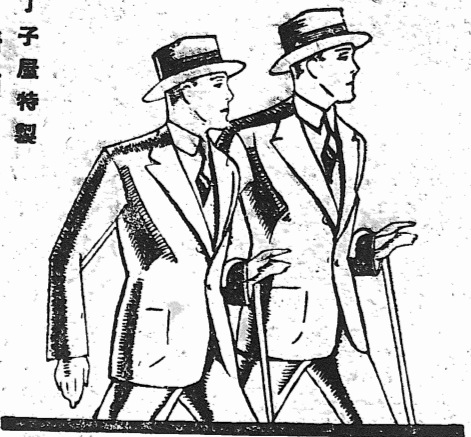
(縞 ヨリ糸セル) 二十五圓より……  
ツサイクイソニール等！

合オーバ

(カ ル ゼ) (實用向) 十三圓より……  
(高級品) 十八圓より……

合インバ

(霜降セル、ゼファ) 十八圓より……



## 丁子屋

丁子屋特製  
兼晴雨  
レインコート

最も理想的なレインコート賣出し  
十二圓……十九圓五十錢迄

内地への御土産  
お手近の御贈答品  
日常の御使用品には

鮮内産品使用御奨励の

御思召を以て

三和高麗焼  
漢陽高麗編  
三和焼

製造元

富田商會へ

御下命願上げます

京城南大門通三丁目

電本三三〇九

同本町二丁目

電本五五四



# キリンビール

最古の歴史  
最新の備備  
最上の品質

清涼飲料

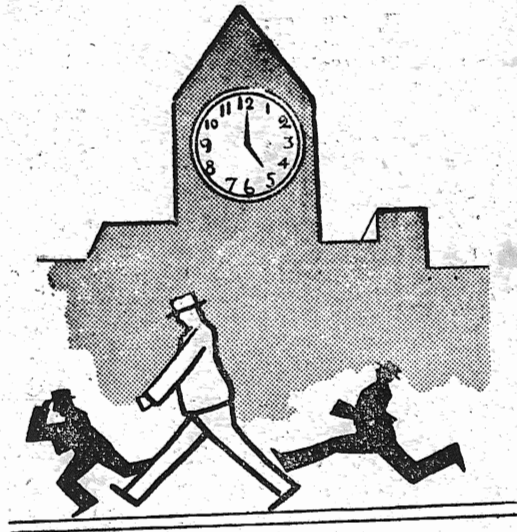
# キリンエール



絶對着色なし

達用御省内宮  
社會式株酒麥麟麒

# サクラビール



吾等の  
午後五時を

急げ！

家庭の

サクラへ

カフェーの

サクラへ



御家庭には **サクラ** 瓶詰 生ビール



株式 大澤商會京城支店

時金寫 計銀機 貴錫及 金器 屬 幻燈器

取締役頭取 森 悟 一  
專務取締役 木村 和水

京城本町壹丁目  
電話本局 俵二六二番  
電話局 俵三三九番  
電話 辰四八〇番  
搬替京城二三一番



株式 朝鮮貯蓄銀行

京城府南大門通二丁目

電話本局四五八〇番  
搬替京城四〇〇六番

營業種目

殖産積金 殖産貸付  
普通貯金 積金擔保貸付  
特約貯金 預金擔保貸付  
振置貯金 證券擔保貸付  
定期預金 不動産抵當貸付

取締役頭取 森 悟 一  
專務取締役 木村 和水

資本金 五百萬圓  
諸預金 貳千參百五拾余萬圓  
殖産積金 參千百拾余萬圓  
代理店 朝鮮殖産銀行鮮內支店及派出所

營業案内及  
住宅資金月  
賦貸パンフ  
レソト御申  
込次第贈呈  
致します。

春は都に  
野に山に

花のうたげに

天下の美酒

「金剛鶴」を

忘るゝ人ありや



山は金剛  
酒も金剛

君！

何を苦しんで

よそものに

悪酔せんとはする

元 販 精  
販 社 會 式 株 造 釀 日 朝

# 四月號目次

|   |        |           |             |
|---|--------|-----------|-------------|
| 新 | 春を待つ   | (總督府文書課)  | 萩原彦三氏(二)    |
| し | やなりく殿  | (殖産銀行)    | 柴山三郎氏(四)    |
| フ | アンノ思ひ出 | (總督府學務局)  | 矢鍋永三氏(五)    |
| 河 | 井繼之助の墓 | (倭城臺科學館)  | 神尾義泰氏(七)    |
| 送 | 田口耕平君  | (漢城銀行)    | 重村永義氏(八)    |
| 松 | 峴吟社句集  |           | 堤社同人諸氏(九)   |
| 離 | 春動偶感   | (京城地方法院)  | 加藤昇夫氏(一〇)   |
| 早 | 春動偶感   | (大學附屬醫院)  | 中村秀雄氏(一一)   |
| 原 | 春動偶感   | (城大法文學部)  | 松月秀隆氏(一二)   |
| 空 | 感謝の思ひ出 | (警察官講習所)  | 飯島滋次郎氏(一三)  |
| 淺 | 東京ナンセン | (京畿道刑事課)  | 佐木忠右門氏(一四)  |
| 女 | 邊境二題   | (第一高女)    | 野村憲真氏(一五)   |
| ラ | ヂウム閑話  | (新義州稅關)   | 岩淵貞旭氏(一六)   |
| ル | イゼ王后の像 | (京城婦人病院)  | 工藤武城氏(一七)   |
| 其 | 所に朝鮮人  | (總督府學務局)  | 方士未之助氏(一八)  |
| 新 | 開界展望   | (朝鮮書籍印刷)  | 野崎眞榮氏(一九)   |
| 彼 | のオフイス  | (大阪朝日新聞社) | 小田省吾氏(二〇)   |
| 朱 | 乙温泉の一夜 | (城大法文學部)  | 今村吾氏(二一)    |
| 老 | 人尊敬    |           | 岸村謙氏(二二)    |
| 世 | 界最古の本  | (京城電氣會社)  | 古賀國太郎氏(二三)  |
| 品 | 川雜記    | (中央朝鮮協會)  | 中島司氏(二四)    |
| 冥 | 土より忠告  | (東大門署)    | 奧永政輝氏(二五)   |
| ふ | るささと   | (朝鮮運送會社)  | 安藤啓助氏(二六)   |
| 物 | は思ひやう  | (大日本ビール)  | 廣江澤次郎氏(二七)  |
| 金 | 鐵のぞ記   | (大和町三丁目)  | 彌生會同人諸氏(二八) |
| 車 | 生會句集   |           | 長谷井市松氏(二九)  |
| 北 | 鮮とくろく  | (朝鮮銀行)    | 山田新一氏(三〇)   |
| 病 | 中一小語   | (洋畫家)     | 西山幸男氏(三一)   |
| 輸 | 入したき事  | (京城齒科醫專)  | 兼安麟太郎氏(三二)  |
| 婆 | 心一漫片   | (三巴酒造會社)  | 浦田多喜人氏(三三)  |
| 辛 | 未漫錄    | (朝鮮史編修會)  | 中村榮孝氏(三四)   |
| エ | ログロ生活難 | (日之出商業)   | 高橋米昇氏(三五)   |
| 蛇 | 穴を穿てる  | (三菱製鐵山)   | 土生橋米通氏(三六)  |
| 草 | 刈り童謡   | (於義洞普通)   | 高橋米通氏(三七)   |
| 劍 | 橋大學生活  | (總督府殖産局)  | 山崎俊胤氏(三八)   |
| 別 | 府のぼん玉  | (毎日申報社)   | 和泉健太郎氏(三九)  |
| 琉 | 球のひと自然 | (丁子屋洋服部)  | 澤村朝五郎氏(四〇)  |
| 獨 | 身生(短歌) | (大阪朝日支局)  | 小田朝造氏(四一)   |
| 籠 | 賣り(童謡) | (全南木浦)    | 佐田武雄氏(四二)   |
| K | に與ふる書  | (鐵道郵便所)   | 古田琢氏(四三)    |
| や | ま      | (京南鐵道會社)  | 國風會京支部      |

# 春を待つ

萩原彦三

(總督府文書課)

寒い寒い朝鮮の冬も立春を過ぎると、急に寒さがゆるむやうだ。殊に此の頃から、眼に見えて日毎に日が伸びて行く。

いつも役所から歸ると、やがて風呂に入るのだが、冬の頃は全く夜になつて、電燈の光が濃々たる湯氣の爲に薄暗くなつてゐたものである。立春の頃からだん／＼日が永くなつて来て、二月も末になると、浴室の西側の硝子窓に、あか／＼と夕陽が射すので、入浴も一層暗れやかに快くなる、三月になるとカン／＼に凍つて居た大地が、地中からとけ初める。地上は割合に乾いてゐるが、内部がとけて軟くなつてゐるから、大地を歩むと反動がまことに柔軟で、まるでユムの上を歩むやうな感じがする。尤も日陰になつてゐたところは、此の頃漸く外部の凍結が溶けて、ひどい泥濘になつてゐる。自動車

の轍の跡が一尺も深い溝になつて掘れてゐるところもある。地上の水がとけると共に、極めてかすかながら草の根に青いものが見え初める。樹々の梢も幾分青みがかつて来る。空を流れる雲のやうすも變つて来る。朝早く夢うつつに、遠くを走る汽車の音を聞いて、春の近づいたのを知つたこともある。朝な朝なの専賣局の工場の汽笛も、何となくのどかに聞えるやうに思はれる。早春の松林

を歩んで、涇流に衣を濯ぐ、オモニ一達の洗濯棒の響が、あたりの樹の間にこだまして如何にも春めいて聞えるのに驚いたこともある。まだまだ冬だと思つてゐるうちに到るところに春が近づき来るのをつくづくと感ぜしめられることがある。

日が永くなると、晩餐が明るいうちに済む。そして日没後の薄明が永いことから、自然街のそよ歩きもやつて見たくなる。夕ぐれの本町通りの賑ふのも此の頃からである。街では草花、苗木、球根種子などの露店が目につく。春物の賣出しも此の頃賑に初まる。

春の景物にも、朝鮮には朝鮮らしいものが多い。若菜は朝鮮では芹であらう。君子里への往き還りに、屢々芹田の眞白な厚い氷を割つて、浅みどり美しき芹を採つてゐるのを見たが、まことに早春の食膳にふさわしきものと思つたことである。花は連翹に始まり、つじが之に續く。これらの花は芽も葉も出ぬうちに、黄金色にうす紅に、到るところわびしき浅春の山村田舎を飾つて咲くのである。

なか／＼にあはれなおもむきである。此頃になれば樹々も芽ぐむ。特に楊柳が早い。日あたりよき水邊の楊柳は、随分早くから芽を出してゐるやうだ。草では土筆が早い。すこし遅れて翁草が咲く。花

【二】

びらから長く伸びた白い髪が、僅かにわたる春風にそよいでゐるのも、まことに可憐な姿である。清涼里のゴルフコースには、土筆や翁草が多かつた。南山の谷間の草蔭に咲く、白い花のかほり高い葎がある。誰がつけたか、南山すみれとはいふ名である。

春未だ到らず、星かげきらきりと寒き夜を家にこもりて、爐邊に來む春を思ひやれば、それからそれへと聯想極まりなく、興趣は盡きない。來ること遅き春を待ちわびつゝ、やがて來るべき日を思ひやる方が、春到つてから塵にまみれて行樂に耽るよりも、遙に興の深いことである。花は満開の全盛を誇れるよりも、希望を包んだ紅の蕾の方に、少からず心を牽かれる。蕾よりも木の芽草の芽を更に深く愛する。大地を割つて伸び出づる草の芽の美しさ、冬の間枯れたやうにしてゐた枝の先から湧き出づるやうな嫩黄の木の芽の美しさ。私にはそれが唯何故ともわかず美しくおもはれるのである。なべてこれから伸びゆかんとするものには、私の心を牽かずには措かない或るものが潜んでゐるのかも知れない。

## ◆黄金町閑話

三木一彦

○黄金町の本田病院長……苦學して醫となりまた博士となつた人だけに、思ひやりは深い。  
○どんな裏長屋にでも、氣持よく往診する。何年薬價がたまつても決して嫌な顔をしない。  
○界隈の男女、『いゝ先生だ！ オイ減多に死なすまいぞ！』

新

刺戟的『新』の最も素朴なる姿である。最初に刺戟を案める小兒は

えるやうに思はれる。早春の松林  
い。すこし遅れて翁草が咲く。花  
オイ滅多に死なすまいぞ

# 新

## 柴山昇

(京城 高商)

『尖端をゆく』『ウルトラ、モダン』『テンポ』『スピード』、等、『新』を誇示する文字が流行してゐる。事實『新』の洪水であつて、少しでもこの『新』に逆はうものなら、『時代精神の相異』として、何等の批判も辯駁もなく清算されてしまふ時代相である。私はこの『新』の一字に盛りれたる眞意味を諷解して、現代流行の『新』の意味のもつ意味を明瞭にして置きたいのである。大凡『新』の一字に盛りれたる意味には二種類ある。一つは生活の必要から來た『新』で他は刺戟から來る『新』である。生活の必要には道徳的な必要、宗教的な必要、經濟的な必要、法律的な必要、藝術的な必要、學問的な必要、等、等と色々な必要があるに違ひない、そしてその必要なり目的なりに最高度で適したるものがこの『新』の意味する意味を具體化することになるのである。つまり生活の必要から來た『新』は生活の必要といふ理想なり目的なりを以つてあるのであつて、そしてまた生活の必要といふ理想目的をもつてある

に、決して個人的な氣まぐれなものではなく恒に社會的なものである。またそれ丈にこの種の『新』は唐突偶然に發生するものでなく所謂の『發展』の文字に相應するものである。この意味で、人類の歴史は『新』の連鎖であり『新』

の歴史である。機械の發明や、制度組織の改良改善や、思想的方向轉換や、等、夫々の生活曠野の必要に適合して『新』である。合理化運動は經濟生活に於ける最適の機械、制度、組織の探究であれば、經濟生活に於ける『新』の追求である。一定不動の本質に眞理と美の世界を求めんとすること、流轉やむなき變移の境涯に人類の生活歸趨を探らんとすること、所詮は生活の必要よりして、

『新』でありまた非『新』であるこゝろした『新』が生活の必要より發生した『新』である。刺戟に出發した『新』は其本然の性質より頗る個人的な性質をもつてゐるものであり、しかもまた頗る不合理なものである。つまりは尖鋭なる刺戟を發散するところ『新』があり、またそれで足りうるのである。輕いユーモアとウキウキにあきたものは尖鋭なる『エロとグロ』に馳るといふ類である。これが刺戟的『新』である。で刺戟的『新』には發展といふことは問題であり否、合理的に跡つけ得られるやうな發展といふ事は、この刺戟的『新』には自殺である。氣まぐれであり、斷續的であり、不合理であり、偶然なる發生であるところこの刺戟的『新』の本然の性質が潜む。しかもこの刺戟的『新』の中に一脈の共通點を察むれば、『テンポ』と『スピード』である

刺戟的『新』の最も素朴なる姿である。最初に刺戟を索める小兒は機關車の馳驅を楽しむ。この『テンポ』と『スピード』を利用する商業主義は活動寫眞とレヴューとチャズに現代人をかり立てる。現代の『尖端』と『ウルトラ、モダン』と『テンポ』と『スピード』の『新』は所詮はこの刺戟的『新』である。ナンセンスであるこのナンセンスにセンスを見出すとき現代社會に關する關心者の關心がある。

### ◇さびしき心

三木一彦

○山口銀行の田口さんが、東京丸の内支店長に榮轉した。  
○御同業の人々は勿論、苟くも氏を知るほどの人は、いづれも別を惜しんでゐる。

○漢城銀行の堤さんは、公私とも氏と最も親しい人であつた。

○報を齎らして、『あんたもいよ〜お寂しくなりますネ』といふと、『イヤ……今がつかかりしてゐるところだ。弱つたネー君』

○その明るる日のことだ、『親友を送るに就いて、何か御即吟でも……』といふと、『さうだネ』と、一寸考へて、手帳のハシに

南に勇みてるつばくらめ  
汝が残したる巢は淋しかり

世に人は澤にあれども  
誠もて人照す人の渺かりける  
○ガツカリしてゐる堤さんの心持が、よく判る。



# しやなり しやなり殿

矢鍋永三郎

(殖産 銀行)

一、はしがき

僕を爆弾か山犬かの様に思つてゐる水井さんがシャナリ〜と僕の机の前によつて来る。又催促かなと思ふと特別に忙がしうにして見たくなる。併し水井さんは平氣なものだ、言ふだけの事は言つて原稿の催促をされる。書く氣がないのだけれどもさすが拒絶もし兼ねるがそれかと言つて引き受けましたと言ふ勇氣は出ません。自然あいまいな返事をして置く。考へて見ると別に厭な顔をする積りではないけれど恐らく水井さんの目には山犬の顔の様に僕の顔がうつるに違ひない。今日食堂から事務室に歸つて見ると名刺に書いた嚴重な命令がシャナリ〜様から下つてゐる。然らば断然名雑筆を作つて見ようと夕食後鉛筆を執つて見ましたが、さて感興のない時には一行も書けぬものです。

苦心慘愴の後應援を娘の學子に頼みました。すると心よく引受けて次の文章を書いて呉れました。

やれ嬉れしやと思つてゐると、お父様此の原稿はいくらに買つて下さいますかと来たのでハツとしたが、よし、一行一錢に買つてやると、これは明白に返事をした。いづれ此の原稿料は雑筆社に僕から請求する積りだ。

二、しゝま

全く静かな夜です。  
埋み火のピチピチといふかすかな音が

つろな中に響きます。

紅茶茶碗の中に砂糖を入れました。ジュ〜と言ふ音が洗黙の中へ消へて行きます。お皿にふれた音はチーンと細く尾を引いて動かない空氣の中へ流れ込みます。

私の聴覚から消えていつた音はみんな空氣の何所かに集まつてじつと凝つてゐる様にさへ思へます。凝つて一ツになつた音はシンシンと私のまはりに迫つて来る様な氣がして細いたつた一ツの音でも立てるのがおそろしい様な氣がします。

静かな空氣の中に、動かない空氣の中に私はとち込められてしまつてゐます。息をするのすらしづかな空氣へ波を打たせるのを思ふ時、それさへ出来ないのです。

何かすればその反應として皆私に迫つて来る様な氣がして……。

## 三、リスの死

『生あるものは死す』、誰れだつてみともない人はない、さう信じない人はない。今朝起きてフト籠を見ると常の様に丸くなつてゐる。でも一寸變な氣がしたのでトンと押して見たが、そのままで動かさない。

足音がすればきつと起上つて物ほし氣によつて来るのだつた。黒い大きな目で、人なつこい目で見るのだつた。そんなにきれは何かやらすにはあられなかつた。ドン栗を栗を松の實をと持つて来てやるのだつた。小さな手に持つて細いするとい齒で忙がしげにはむのだつた。小さな足を揃へて丸くなつて、それこそ一生懸命に食べるのだつた。栗の皮をクルクルまはしながらむく格好が目にもちらつく。でもと〜死んでしまつたのだ。

何か食べてしまへば手で顔をふくおしやれさんだつた。器用な手つきでふくののだつた。手の上で物を食べる程なつてゐるながら隙があれば逃げようとする哀れなものだつた。でもと〜死んでしまつたのだ。

# フアンの思出

ば後年の飛躍を暗示する麒麟兒の腕比べであつたのだつた。

しかし何としても忘れ得ぬ感激

埋み火のピチピチといふかすかな音が

つた。でもとうとう死んでしまったのだ。

# フアンの思出

神尾 戎 春

(總督府學務局)

思出は大正四年の秋に遡る、上京して間もない九月廿六日、おどしなから帝劇のしきいを跨いだのは東京フィルハーモニーの管絃樂を聴く爲であつた、指揮者は黄金時代の山田耕作氏で眞面目な熱の溢れた試演であつた、セロの多基永氏がフォルクマンのセレナーデで獨奏者に選ばれた、この會は月次の會であつたので、次會には若い頃の郁子夫人がオーケストラの伴奏の下に獨唱した筈であつた、が機會を逸して行けなかつたその後何時迄この試演が續いたかはつきり覺えない、こんなことを覺えて置くことはフアンの職能でもないのだ。

十月には神田の青年會館に行つたらしい、塞國救難會の企で永田錦心迄乗り出すといふいろいろの席みたいな音楽會であつた、若い頃の長阪好子さんのソプラノよりも樋口信平氏のエルナニが今もフアンの思出を領してゐる、正直な所その夜初めてバスを聞いたせいもあつたのだらう。それにも増して若き日の感傷をかなしましたのはエロシエンコ氏であつた、バラライカを取つて唄つたそのかすれ勝な哀調は今も尙フアンの耳にこびれついで消えない。

十一月六日、慶應義塾のワグネルソサイテの御大典紀念演奏會が

あつた、第一部はソリククラブとでも云ひたい學生の演奏で別に印象に残つて居ないが、唯、今頃のジャズ時代の想像も出来ないアカデミックなものであつた、第二部は大塚淳氏の指揮の下に學生がベートーエンのデイー、エーレ、ゴッテスを莊重に合唱した外は全部助演者の演奏で、六ツハの絃樂四部合奏で初めてのG線獨奏に聴き入つたフアンのしかめ面を思出して頂きたい、番外にザルコリー氏のテナーが二曲あつた、偉大な体格から溢れ出る豊富な聲量と派手な表情とは新築の大講堂をどよめかすアンコールとなりリゴレットに溜飲を下げたのは派手好きなき三田ツ子のみでなかつた。

この月二十一日の上野の特別演奏會はフアンの一生忘れがたいものであつた、神原直氏指揮のチャイネルレーベンの合唱に初まり、武岡鶴代さんや内田琴女史がファイガロの婚禮を唄つた、グノーのファウストを澤崎水野柴田のトリオが立派に唄ひのけたのは確かに瀧場のフアンを驚嘆させた、ここに面白いことは四番目のブイオリン獨奏に大場勇之助の名が有ることである——若しか第一高女の大場先生ではなかつたか？、ブイオリンでは峰谷龍又史も出て居る、中田章さんが大風琴でバツハをやる外山國彦氏がテナーを唄ふ、思へ

ば後年の飛躍を暗示する麒麟兒の腕比べであつたのだつた。

しかし何としても忘れ得ぬ感懐は番外として加えられたシヨルツエルクマイステル兩氏のピアノセロ二重奏であつた、暮れ易い晩秋の夕、薄暗い影を壇上に投げつつ愛器に魂をこめてゐるエルクマイステル氏、たしかかなテクニクの間にも軽い昂奮のほかに浮んだシヨルツ氏の顔が時々あがる、と秋日の名残がそれを照りかへすのであつた、曲は何か、プログラムを見るとジアン、ルイ、ニコデのピアノセロソナータ、ト長調、作品廿五とある、この感激、この感

都鳥  
鳥 水  
割 焚  
烹 焚

旭町一丁目  
電本三三六六

激が再現せられたことはその後フアンにはなかつた。

こんな具合でフアンは土曜演奏會には必ず上野を訪ふ様になつた去年から京城の人となつたM君といつも一所たつたと思ふ、フアンの生活はしかし三年で一きりきりをつけねばならなかつた、凡てを捨て、官人の生活に入る決心をした在りし日のフアンは形見分けの積りで手澤の本迄知己に分けてしまつて旅に出た——その内には今

では得かたい歌集もあつたし、忘れがたいリーデルの譜集もあつたのだつたが。

棄てても蘇り、また捨てても再生して来るフアンの生活の思出は綿々として盡きない、が大正七年以後の思出はまた他日の機会に譲ることと致したい、しかしあの冬の夜の感激、京城樂壇の至寶上野夫人の演奏會の與へた感激を頌しないでは措けない、ここに謹んで心からの感謝を捧げるのである。しかし何くれと奔走せられた朝鮮工藝會の各位には感謝ではない、怨がかずかず御座る——それは漸く初老に達せんとして灰身滅智の生活を只管欣求してゐるこのフアンのかたわれに新たな火をつけんとする人々だからである。

◆名刀風聞記

漢 江 漁 郎

○工藤武城氏は、大名道具たつたらしい一腰の大小を秘藏してゐる。

○どういふ方面から手に這人つたかは判らぬ。しかし五三の桐、十六の菊花の紋章を、その到るところに鏤ばめてあるなど、造りを一見しただけで、たゞの品物でないことは判る。

○大の方は、福岡一文字か。曾て土居さんこれを見して、『ウーシ』と、恰も熱病に罹られたやうな最大級の嘆聲を發せられたといふ。

○島田才涯君に至つては、人が悪い。出會するたびに、『先生! あんなものを手に入れて、たゞで濟ます氣ですか』——人のいゝ持主は、天に對して相濟まぬやうな

氣持がし、『あゝ島田君、京喜久へつき合ひ給へ、一緒に夕飯を食はう』、島田君何度夕飯を食つたか知れぬ。

○ところで、或る晩工藤家へ泥棒が押し入り、散々金品を失敬した上に、何と思つたか、例の一腰の中から、脇差だけを、一寸拜借して行つた。

○流石の持主も、これには悉く兵古たれて、『君、あかんバイ。泥棒ツて奴は、テンデ風流心がないで……』

○さうする中、永登浦警察から例の脇差が、漢江人道橋附近に、遺失されたあつたと知らせて來た

○『ウーム、やつぱり泥棒も、我輩の苦衷は判ると見へる……ナル程』

○人をやつて、だんく聞いて見ると、脇差を得た泥的、斬れるか、斬れぬか、一番ためして見る氣になつたのであらう。或る夜の闇に乗じ、田舎へ牛を曳いて歸る

人蔘劑では  
一も二もなく

總督府  
專賣局

精製の蔘精  
に限りませ

發賣元

貴生堂藥品店

京城本町二丁目

(電本二三八番  
振替七六一番)

牛飼ひの、油斷を見済まして後からバツサリ……。斬れも斬れたり、左の顚骨から下顎へ、ザツクリ一刀! 斬つて落した。『ウワ! ツ、人殺し……』、賊は兇器を棄て、韋駄天!

○使ひの者もどつて、『先生! さういふ次第です。ソコで、脇差ですが、これは貰つて歸りませうか、それとも……』、持主深い溜め息一つ、『君、いよゝあかんバイ……これが、安田善次郎でも斬つたといふなら、のう雅味がある。それを、人もあらうにコソ泥にとられて、そいつがまた、牛飼ひを斬つたんぢや、チト念が入り過ぎる。ウ、あきらめる』

○この脇差、今は警察官講習所に保管されてあるさうです。

就職希望

- 一、名古屋高商出身
- 一、本年二十二歳
- 一、銀行會社商店を希望す(姓名在社)

長岡 河井繼之助の墓 行き

つた政策が、十分理解されたならば、戦闘行為は豫防出來たと思はれる幕末の際、破産之助も、内小つて



あんなものを手に入れて、たゞで済ます氣ですか——人のいゝ持主は、天に對して相濟まぬやうな

か、斬れぬか、一番ためして見る氣になつたのであらう。或る夜の闇に乗じ、田舎へ牛を曳いて歸る

一、銀行會社商店を希望す(姓名在社)

## 長岡河井繼之助の墓

重村義一

(倭城臺科學館)

本年一月上野の驛を跡に、越後路の旅に上つた。長岡の科學博物館を視察するのが、中心の目的であつた。

本年は雪が珍らしく降らぬので雪の名所の長岡も、誠に手持ち不沙汰と云ふ姿であつた。途上には雪影もなきに、町の辻々には、雪除けの『トンネル』が出来、軒の突出したる歩道には、思ひ／＼の障子やらガラス戸やら、風の隙間なき様、圍み廻し、震災直後の慘狀と云つた様な光景は、車上より見れば、如何にも物々敷、赤いポストが火の番小屋に似た家根の下に構へあるも、旅の客には奇異の感したのである。宿舎の庭先には二重にも三重にも、兩戸、ガラス障子を地上より立て廻して、現在雪の降らぬ場合は、徒に室内が陰鬱になるばかりで、餘り感心したものとは思はれなかつた。

雪のないお陰で、高等工業や、博物館や、其の他の名所古蹟を見物するには都合がよかつたが、サテ歸京の矢先き、今迄無用視した厄介物は、夫れ見た事かと言はぬ許りの、忠義者となつたのであるラヂオの前觸れで、北滿洲の高氣壓、日本海上の低氣壓が、萬字巴と、暴威を逞うし始めた。鉛色の北越の空は、俄かに重苦敷なつた雪片の密集は、北より南に、東より西に、斜に天地を窺いだ、宇宙は吹雪の大活劇を演出した。交通

機關通信機關は凡て其の機能を停止した、巨大なる雪塊は、また、く間に長岡市を一大冷蔵庫と化し去つた。

永年の經驗に基く、歩道の圍い障子も、トンネルも、ポスト小屋も、今は亦た一刻も欠く可からざる装置と成つたのである。

長岡に着いた翌日の夕、寒風を肩して、悠久山に登つた、固より人影もない、小鳥の音も聞へず、荒涼たる冬枯立木の間を行けば、落葉は凍りて寒氣は靴底を透して冷たかつた、灰色の夕雲は低く鎮して、あたりは死した様であつた當年の烈天河井繼之助の墓詣にはふさはしき心地さへしたのである風雨多年沓蒸した、三尺に滿たぬ墓石は風化した儘、如何にも淋しく『總督河井繼之助之墓』と刻まれている。維新の際には幾多の國士が恨を呑んで双の露と消へたが就中河井繼之助は實に惜しき人物であつた。墓前に黙禱して、言ひ知れぬ思ひを懐いて山を下つたのである。

友人井上一次君は、其の著『北成辰戦争ト河井繼之助』と云ふ書に、次ぎの様な意味の結論を書いて居る。

『北越に於ける成辰戦争は、誤解の累積せる一つの慘劇である、戦争の目的より言へば、何にも其の必要はなかつたのである。若し長岡藩の家老首席河井繼之助の執

つた政策が、十分理解されたなら戰鬪行為は豫防出來たと思はれる幕末の際、彼繼之助は、内外の大勢を達観して、攘夷の愚論を排し兄弟隣に闘くを戒め、國力を充實して、對外準備を爲さねばならぬとの信念の下に、公武合體を要路に懸へ、會桑兩藩の壓迫に遇ふても、彼は毅然として、中立の態度を保持したのである。征討軍の國境に迫りても、極力恭順是れ努めて、其の行ふ所は一貫して戰禍を避けんとしたのである。當時薩藩は公武合體論なりしが討幕に與し長藩が主張容れられれば朝廷に矛を向け、意見の貫徹せば錦旗を擁して玉石分ちなく、彈壓を加へた如きは、到底同日の論ではないのである。西郷南洲勝海舟の江戸城引渡の談判には、幕臣中有力なる反對もあつたのであるが、兵力を以て臨んだとしたり、其慘狀計り知る事は出來なかつたのである。獨り南洲の膽識、海舟の遠謀以て事なきを得たのである。東北に向つた征討軍は諸藩恭順を表したのに拘らず、戦を強ひたる態度に出たのである。所謂騎鳥懐に入りて之を殺したのである。長岡の抗戦は、寔に止む事を得なかつたのである』……と云ふ風な結論である

維新の際國家興亡の議論、人心が鼎の沸くが如き様であつた事は想像に餘りがある、勝てば官軍負ければ賊、當時の國士の胸中、打つものも打たるものも、一點私心はなかつたのである。

旅窓の外では、吹雪は降り募つて歇みさうにもない。當年の天地もこんなであつたらう。旅客は昭和の聖代に、炬燵に寄つて次の東京行の時間表を調べて居る(六、二、一〇)

# 田口耕平君を送る

堤 永 市

(漢 城 銀 行)

【 八 】

田口君！、懺御別れしなければならぬことになりました。あなたにとつての京城は一番の永い歲月を親しんだ土地であります。幾多の友人知己を獲す土地であります。更に君の可愛い嬢ちゃん坊ちゃんとの出生地であります。ゴルフと謡曲を始めた記念の土地であります。君が此地を離るるに際して感慨無量であらうことは深く御察します。併し今回の御榮轉はあなたの將來の爲め、又奥さんや御子さん方の爲め喜びに堪へません。あなたとしても一面に於て『震に紛れて失せて行く』羽衣の天人のやうな、氣持がするでせう。だが田口君！、同時に僕のやうな職でも罷めなければ（罷めてもどうか知れぬが）都の住ひなど思ひも寄らぬ田舎銀行屋の境遇にも同情して下さい。

田口君！、御別れに當つて私をして少しくあなたを語ることを許して下さい。私は第一にあなたの姓名が好きであります。『田口耕平！』何といふハーモニカルな、平和な、寛容な、謙遜な、そして野趣に富んだ姓名でせう。私はこの名前の持主たるあなたに敬意を表すると同時に、この立派な名前をあなたにつけられたあなたの御父さんの人格を非常に奥床かしく思ひます。さて多年あなたに親交を願つて敬服に堪へないことは、あなたはよく人を讀めるが決して

人の悪口を言はれないといふ點であります。あなたと話して居るといつも平和で愉快で所謂春風に坐する感があります。あなたは常にニコ／＼した何とも言へぬチャーミングな顔をして居られます。ゴルフの當らぬ時でも、碁の形勢の悪し時でも、あなたの顔からこのチャームを見失ふことありません。これ等は畢竟あなたが中心より寛容であり謙遜であり平和であるが爲めであつて、言はば人格の表現に外ならぬと私は考へます。この外あなたは聲樂に美術に、屋外屋内の遊戯に、廣い趣味を持つて居られます。少し廣過ぎて深みを缺く感はありますが、その方が愛嬌があつて宜しいと思ひます。あなたは『東京に行つたら趣味の合理化をやる』と言はれましたが私はその必要を認めません。

田口君！、以上はあなたの私に與へたる印象の概要であります。これ等をあなたの姓名の表現する感じに比較する時、『名は實の實なり』といふ詞を私は大變愉快に思ふのであります。田口君！最後に笑話をしませう。何といつてもあなたと私の交際を親密ならしめた大なる出来事は、あの上着取替事件であります。私が俱樂部で球を撞いた後で訓練院の招魂祭に行き、受附で名刺を出さうとして名刺を取り出すと物が違つてをる。ハテナと思つて名刺を見る

と、平和な、謙遜な、寛容な『田口耕平』といふ名前が刷られてある。私は恐縮しました。式もそこ／＼に、あなたのオフェイスに行きますと、あなたは例のニコ／＼顔で待つて居られました。川長の天ブラは私の疎忽料でありました。それから一ヶ月ばかりして私は再び疎忽を働きました。これも同じく俱樂部で撞球をやつて後、總督府にタクシーを飛ばし車を降りて金を拂はふとすると、二三圓しかはいつてない筈の私の財布に無慮數百圓の大金があります。私は驚きました。ヒョット上着を見ますと紛ふ方なき先日あなたのそれでありました。『又やつたな』と非常に恐縮して直にあなたのオフィスにとつて返へしますと、あなたは大いに笑ひました。併し『今君の疎忽を責むる一文を草してゐた所だ』といつて書きかけの手紙を示されました。これは寛容なるあなたにしては變だと思ひましたが、それが心長からぬ(?)飯泉大先輩の指金であつたことを聞きまして、あなたの寛容を信する私は安心しました。二度目の疎忽料は約束し乍ら不履行の懺御別れすることになりましたが私が上京した時に決済しませう。多少の延滞利息は無論覺悟して居ります。

次の大なる出来事は二人で謡曲を始めたこととせう。私が松原先輩の強制によつて、『鶴龜』を半分習つた時あなたが始めることになりました。即ち私が二回の先藏である所からあなたに對して檀古の感想を語りました。それは初めの聲を上げる時自分の聲が他人の聲のやうに聞え酸の下から冷たい汗がダラ／＼と落ちるといふことでした。さてあなたが第一回の稽

古を濟ました後で頻りに笑つてをられるから譯を訊きますと、『全然君の感想の通りであるから、そ

ので先生も時々愛想をつかされて稽古を打ちられました。執拗なる二つ笑ふよ一ヶ月半星買ま

器晩成の素質十分ださうですから益々斯道に精進しようではありません。

思ひます。さて多年あなたに親交を願つて敬服に堪へないことは、あなたはよく人を讀めるが決して

に行き、受附で名刺を出さうとして名刺入を取り出すと物が違つて来る。ハテナと思つて名刺を見る

聲のやうに聞え服の下から冷たい汗がダラ／＼と落ちるといふことでした。さてあなたが第一回の稽

古を済ました後で頻りに笑つてをられるから譯を訊きますと、『全然君の感想の通りであるから、それが可笑しい』と言はれました。『鶴龜』は冷汗で終り第二冊目の『橋辨慶』に移るに及んで冷汗は笑ひに代はりました。二人で聲を上げると直ぐ笑ひ出す。蓋し私の耳にはあなたの聲がはいりあなたの耳には私の聲がはいるので。どちらか旨ければ一方は笑はぬ筈でしたが、どちらも劣らず笑つたものでしたねえ。何しろ稽古が一時間なら其中笑ひが四十分を占めた

ので先生も時々愛想をつかさされて稽古を打切られました。執拗なるこの笑ひは一ヶ月半程続きました。が第四冊目の『羅生門』頃からさすがに薄らぎ、同時に謠の方に自信が芽ぐみました。この芽は『神變不思議』なる發育を遂げて周囲の人々を煩はした事多大であります。ゴルフ行の自動車の中の合唱で富野さんの毒舌を沈黙せしめたり宴席で古田君をして耳を掩うて席を替らしめたことなど数ふれば限りないでせう。併し師匠や先輩の言ふが如くんば御互の謠曲は大

器晚成の素質十分ださうですから益々斯道に精進しようではありませんか。田口君！、だいぶ長くなりましたからこれで擱筆します。今度は檜舞臺に上ることですから十分に各方面の御勉強をなさい。そして私の好きな『田口耕平』といふ名を高く々々揚げて下さい。陰ながら祈つて居ります。鳥さへも古集に歸る春の日に友は行くなり霞殘して霞立つ淀の大野の菜の花にことは見ずと傳へてよ君

### 松峴吟社句集

(水温む 爐寒、白魚)

#### 安達緑童選

|                |       |
|----------------|-------|
| 一人釣る沼の日向や水温む   | 渡邊 黎明 |
| 釣り上げし鮎のぬめりや水温む | 堺谷 嵐影 |
| 溝にある芹の青みや水温む   | 黎 明   |
| 溝杭にかかる芥や水温む    | 矢鍋 如是 |
| 水温む小川に下駄を濯ぎけり  | 牧牛 人  |
| 枯真孤ゆらゆらとして水温む  | 牧田 奇正 |
| 鍋洗ふ舟の女や水温む     | 同     |
| とつおいつ涉りし堰の水温む  | 平野井江崖 |
| 二つ三つ泡立つ溝や水温む   | 能登 行藻 |
| 壁を塗る赤土ねるや水温む   | 黎 明   |
| 砂ほれば温める水の湧きにけり | 江 崖   |
| 温む水道を横ぎりて流れけり  | 同     |
| 川邊の土のほぐれや水温む   | 宮館 宏雨 |
| 浮きしまま芥動かす水温む   | 奇 正   |
| 浮草の沈みて黒じ水温む    | 如 是   |
| 枕を打つ山彦牙へて水温む   | 同     |

田の土手のまた崩れけり水温む 野田 神郷  
水温む漏り田の土手のにじみ哉 同

|                |        |
|----------------|--------|
| 爐寒きてたみぬ敷を算へけり  | 清水 三青  |
| 爐寒きて居間の替りし翁かな  | 佐々木たけを |
| 爐寒くも疊はたくも庵主かな  | 大藤 波天  |
| 爐塞いで仰山の灰ありにけり  | 同      |
| 爐塞きて廣々と敷く蒲團かな  | 黎 明    |
| 爐塞や夕日さしたる古壘    | 如 是    |
| 爐塞いで暖雨に灰を捨てにけり | 牛 人    |
| 爐塞や行李一つの飯婢部屋   | 宏 雨    |
| 爐塞いで八疊の間となりにけり | 奇 正    |
| 爐塞いでいよ上疊の古き哉   | 同      |
| 爐塞いで水屋の所かへにけり  | 嵐 影    |
| 爐塞きの灰を畑に入れにけり  | 大 童    |
| 爐塞きて脱ぎ捨ててある耕衣哉 | 神 郷    |
| 白魚は凍れりとこそ見えにけれ | 如 是    |
| 汲み上げし白魚水の垂れりけり | 波 天    |
| 碗の蓋に移して見たる白魚哉  | 宏 雨    |
| 水に入れて白魚に交る鰻生きぬ | 牛 人    |
| 白魚泣む古き小舟でありにけり | 波 天    |
| 白魚網曳くかたわらの克菟哉  | た け    |
| 白魚を篋に投げこむ荒男    | 如 是    |
| 曳網のあとの藻草の白魚哉   | た け    |

# 離婚

加藤昇夫

(京城地方法院)

1101

間に何等かの救済の手段を講じ度  
い。夫れに依つて最後の決裂を極  
度に回避し度い。

思想善導といふことが流行語で  
もあるかのように叫ばれて居る。

然し夫れは青少年に限られた話で  
はない。青少年に軌を呈示する成  
年者に於て寧ろ必要ではなからう  
か。カフエーの女給の上客は頭  
の禿けた親爺だといふではないか。

夫婦間の出来事は夫婦に委せて  
おけばよいといつて、其の間に發  
展して行く間隙に目を蓋ふことは

大きく考へれば國家の單位である  
べき家の破滅を看過することでは  
なければならぬ。婚姻中の男女の思  
想を善導することは青少年の夫れ  
以上に緊急ではなからうか。

内地は民法の親族相續篇の改正  
に伴つて、家事審判所を設くべく  
企圖せられて居るようだ。家事審  
判に關し如何なる程度まで叙上の  
間隙を救済し得るか、規定の公布  
を見ない以上豫斷を許さぬが、自  
分の今日までに察知した所では更  
に一步踏出して、法律を離れ、裁  
判所とは別個に、眞の意味に於ける  
家事相談所が、街頭に顯はれる  
日が待たれる。

夫れこそ眞に夫婦間の間隙を最  
少限度に於て救済し得る唯一の方  
法である。

世は離婚時代だといふ。

見合結婚より自由結婚に、自由  
結婚より友愛結婚に、友愛結婚よ  
り更に試験結婚にと、冒險的に試  
みられんとする結婚方式は、單に  
夫れが機械的結婚より眞愛結婚へ  
と志す新しい企であるばかりでな  
く、あまりに夥しく、あまりに早  
急に起る婚姻の終末——離婚を避  
けんとする企圖である點に於ては  
深い關心を持たなければならぬ。  
誇にもならぬ世界一の離婚國た  
る日本の内、更に裁判上の離婚數  
に於て斷然他を壓する朝鮮の離婚  
は、日常斯る事件を取扱ふ吾々か  
ら見れば、婚姻方式に餘りに無關  
心であることに主要の原因を存す  
るものであると思はれる。

然し私は茲で婚姻方式の改訂—  
一試みられる各種の婚姻前提に付  
て云々しようとは思はぬ。それには  
相當有識なる指導者がある筈で  
あるから、その方に委せておき度  
い。只私は訴訟を通して見た朝鮮  
の離婚を事前に防止する一の社會  
的施設の必要であることに言及し  
て見度い。

民法第八百十三條には離婚原因  
を制限して、此の外の事由に依つ  
ては離婚は出来ぬことになつて居  
る。其列擧せられた離婚原因があ  
るかないか、夫れに依つて離婚し  
得るか如何かに依つてのみ、夫婦  
間の鬭争が解決せられるものとは  
考へられぬ。成程法律上の解決は

民法所定の離婚原因の存否に依つ  
て決せられるが、夫れが夫婦間の  
鬭争を解決する唯一の方策でない  
筈だ。夫婦間に生ずる間隙は、そ  
れが離婚事由を形成し、法廷に其  
の存否の判斷を求むる迄には、幾  
多の曲折を経て來て居る筈だ。妻  
が姦通する徑路を觀察しても、そ  
の罪を以て直に妻にのみ嫁する事  
の出来ぬ場合が多い。夫が放蕩を  
する。妻に對する夫の愛情がない  
その更に前には妻の愛嬌がない。

性的の感戦がない……E.T.C.、種  
々の間隙があり、而も其の間隙た  
るや始から大きな間隙ではない筈  
だ。僅かの感情上の間隙が、漸次  
擴げられて大きな、救済すること  
の出来ぬ間隙になつてしまふのだ  
其の最終の間隙を、最後の事故が  
法律上離婚事由として列擧してあ  
る事由の一に該當するや否やに依  
つてのみ解決せられるからといつ  
て、吾々は満足はして居られぬ。  
天然痘が流行し始めたら、其患者  
を順化院に入院させたら足りるぢ  
かないかといつて、豫防方法を講  
じないといふわけにはゆくまい。

夫婦間の間隙を發展するが儘に  
委せて、其の最後に於て法律上の  
解決せられるといつて、これが事  
前の解決策を閉却する譯には行か  
ぬ。最後の間隙よりも最前の間隙  
の方が救済するに容易である筈だ  
其の最前の間隙を、少くとも最後  
のものに至らぬ程度の間隙である

西洋料理  
支那料理

**泰明軒**

東京芝新櫻田町  
衆議院スグそば

自働車  
係がないんださうな。それにしても、停車場や劇場等で自動車を呼



るかたし。夫れに依つて難題し  
得るか如何かに依つてのみ、夫婦  
間の鬭争が解決せられるものとは  
考へられぬ。成程法律上の解決は

最後の間隙よりも、其の間の  
の方が救済するに容易である筈だ  
其の最前の間隙を、少くとも最後  
のものに至らぬ程度の間隙である

# 自動車

中村 兩造

(大 學 病 院)

久振りに東京に行つたら、流し  
の圓タタの澤山がばかに目につい  
た。車道に向いて街路樹の下に突  
立つてゐると、たちまち圓タタの  
二三臺が寄つて来て、運轉臺の助  
手が顔を出して『いかいです?』  
と勧誘する。成程話に聞いた通り  
安く乗れる、圓タタでなく鏡タタ  
だ。自分で扉を開けて『駿河臺ま  
で?』、片足はもう中に入れ乍ら  
『いゝね?』と云つて、掌を開い  
た片手を見せると、『OK』とか  
何とか云ひ乍ら、もう車は銀座通  
を北をさして走つてゐる。

こいつが西洋だと然うはいかぬ  
街の名がどうも一度では通じない  
事がある、すらつと行先を通じて  
ひらりと乗るといゝが、一寸こた  
ごたした乗り方をする、遠まは  
りをされて、二三十銭がとこタタ  
サメーターが餘計に廻轉させられ  
るかも知れない。

私の知人が伯林の西の停車場に  
夜着いて、ホテルの名をやつと向  
ふに通じさせて可成の道を揺られ  
て行つて、目的の宿に着いて、ほ  
つとしたさうだが、翌朝窓から見  
たら、昨夜の停車場が街一つ隔て  
ゝ目の前に在つたと云ふ話。こん  
か怪しがる運轉手はめつたにもあ  
るまいが、乗る時の調子でちよつ  
とやられるかも知れぬ。

私が旅先から北の停車場に着い  
て出口に出た時、運轉手らしい格  
好をした男が『自動車にお乗りで

すか?』と寄つて来た『然うだ』  
と云つたら、『どうぞ』と車に連  
れてつた、そして手を出して金を  
請求する形、見ると運轉手は別  
ちやんと居て、その男はその車と  
は別個の男である、成程運轉手が  
車から離れて客を物色する筈もな  
い筈だ、しまつたと思つたが、も  
う遅かつたので斯う云つた、『一  
体君は何だね?僕は君を運轉手と  
見たんだ、誰が見たつて然うだ。  
この小さな鞆を十米突ばかり運ん  
で呉れたのに對しては若干拂つて  
もいゝが、それも人を買つた遣り  
方を考へると僕はイヤだ。』

こゝに高調子の口論が續いて、  
人も大部集つて来たが、斯うなる  
ところにも意地となつて頑張らざ  
るを得ない。かゝる場合、言葉は  
自然にすらすらと出るものなり。  
『僕は日本人のドクトアナカムラ  
と云ふ者だ、ウィルメルズドルフ  
區にもう數年居て、おのほりさん  
ではないつもりだ、失禮だが君の  
名を聞かせて欲しい』、數年と云  
つたのは、その場合が然う私を云  
はせてしまつたのである。

この時今迄どつしりと黙りこく  
つてゐた運轉臺の運轉手が仲裁と  
きて、結局私の云ひ分が通つてう  
やむやになつて、自動車は動き出  
した。

運轉手の話によると、その男は  
あの邊の然うした商賣なのださう  
だ、そして運轉手とは何等取引關

係がないんださうな。それにして

も、停車場や劇場等で自動車を呼  
んで呉れたり扉を忝しく開けて呉  
れたりする制服の男には金をやる  
私が、ごまかされたと云ふ先入感  
から、とうとこつちが結局は鞆を  
一つ運んで貰つた努力への報酬を  
ごまかした形になつた事が、興奮  
が消え、口論の勝利感がうすらい  
で来ると、不快だつた。そして自  
動車がとまつた時、『あとであの  
男にやつて呉れ』と運轉手に若干  
を渡してやつた。そしてその時ち  
よつと、どんなもんだい、と云つ  
た様な一種の得意さを、第三者の  
運轉手に對して感じたけれど、自  
動車が向ふへ行つちやつたら、日  
本人の正直さとの氣の弱さと思つ  
て、何だかつまらない味氣なあ  
い氣持になつた。

畢竟するに、おのほりさんでは  
ないと分つて引きさがつた所から  
すると、矢張りおのほりさんだと  
見てのごまかしたつたんだ、そし  
ておのほりさんと見られた事が、  
へん、然う見くびるな、と云ふ方  
へ私を連れてつた事になる。

それから十日ばかり経つた或る  
日知人を見送つて停車場を出て來  
たら、一人の男が挨拶をする、見  
るといつぞやの男だ。『今日もア  
ウトを二つ世話して貰ふかな』と  
云つたら、肩をつきあげて首をし  
かつめらしく傾け乍ら、『どうい  
たしまして』、運轉手にこつつけ  
た一件の金の御禮も云ひ添へて、  
『急に暑くなりましたね、私は  
その男が嬉しくなつた。そこから  
私は乗合自動車で歸つた様に覺え  
てゐる。』

これでこの話はおしまひである  
が、本文はまだ完了ではない。が  
頁の都合で打切りとする。

# 早春偶感

松月秀雄

(城大法文學部)

(一三)

てはと卒業生は我儘を言ふ。否當  
然の主張であるかも知れない。氣  
の毒な事情もある。かうなると人  
的態度の中にもまた惱みがある。  
惱みを解決しつゝ勇敢に進むの  
が春らしい人生であるのかも知れ  
ない。

三月十日を過ぎたらめつきり  
暖くなり始めた。冬の間中古い藁  
をかぶせて置いた葎がどうなつて  
居るかと氣遣ひながら覆ひを取つ

て見ると下ではもう春の準備が始  
まつて居た。加之、覆ひをかける  
以前の青葉までが残つて居るのは  
嬉しいことである。素人の中でも  
最も素人の園藝家たる彼は昨秋最  
初に訪れた寒さでシシギクや朝鮮  
白菜をすつかり駄目にしてしまつ  
て、カナリヤを寒さのために失つ  
た二三年前の氣持と同じ氣持を味  
つた。素人に育てられる小鳥や野  
菜ほど氣の毒なものはない。此の  
氣の毒な感じを繰返すまいと昨冬  
から心を盡した甲斐があつて今古  
藁の下に嫩を見出したことは、彼  
にとつて何より幸福である。彼の  
葎畑にもお蔭様で一陽來復の歡ひ  
が訪れて來た。

○  
數年前倫敦で夏を迎へた時、獨  
逸ハムブルグのものとの下宿の主婦  
から手紙を受取つた。その中には  
『今春の盛りです。貴方が居たら  
と残念に思ふ。春の頃私達と一緒  
に畑に出て葎の手入れをして下さ  
つた貴方が』と認めてあつた。下  
宿の長男の大學生も彼と一緒に荷  
車をひいてハムブルグの町はつれ  
の畑に出て土いぢりをする事を樂  
んだ。その妹は自分の家で畑を有  
つて居ること、それから家族が畑

で勞働すること、それを心から恥  
ぢ且つ嫌つた。もつと高貴に見え  
度いと希つた。こゝに大きな思想  
上の相違がある。

○  
研究者であると同時に教育者で  
なくてはならぬ彼の職業にも一つ  
の惱みがある。物に對する關心と  
人に對するそれを兩立させるこ  
とはいかなる種類の教育者にも與  
へられた課題である。純粹の學術  
研究所に働く研究者には物的關心  
丈で充分であるかも知れぬが、  
苟も人材を養成することを目的  
とするところでは人的關心もまた  
五分の要諦權を有つて居る。孔子  
は『學んで厭はず』といひ、また  
『教へて倦まず』といつた。前者  
は物的關心で、後者は人的關心で  
ある。『聖は則ち吾能はず』と謙  
遜した孔子もこの二大契機を生涯  
自己の天職として厭ふことを知ら  
ず、倦むことを忘れた。動もすれ  
ばピツクになりやすい自分の心構  
へを本格的にひきなほして呉れる  
ものはいつてもこの聖人の心構へで  
ある。  
だが然し、試験も濟み、採點も  
濟み、及落會談も濟んで、今から  
一つ物的態度でゆつくり研究を始  
めようとするところ『七級にてよいか  
?』などといふ電報が來る。卒業  
生の就職に就いて書いた多くの手  
紙の一つに對する返電である。や  
れ六級でなくては、否五級でなく

## ◇學校風聞記

漢江漁郎

○舟橋普通學校に、一人の盜癖  
ある子供があつた。

○家庭を調べて見ると、父親は  
技師で、高等官で、相當知名の士  
である。しかし家には、妻妾が同  
居し、殊に若い妾が權威を揮つて  
ゐるため、本妻に何の力もなく、  
そのため子供は、玩具一つ與へら  
れず、ツイ／＼惡癖にそむで行つ  
たことが判つた。

○受持の教師は、涙を流した。  
一方には、義憤の熱情にも燃えた  
そして彼は、進んでその父親を訪  
ひ、言々肺腑より出づる熱誠もて  
これを極諫し、誠告した。父親は  
『私が悪うございました。先生ど  
うぞ御勘辨下さい』と泣いた。本  
妻も泣いた。妾も泣いた。その結  
果妻妾は別居し、本妻は普通りに  
主婦として、母として全責任を以  
つて、鞠育に當ることになつた。

○子供は、以來何一ツ他の兒童  
の物を盗まなくなつた。

○父親は、『あゝ先生!、これ  
も全く先生のお蔭です』と、教員  
室の床の上に、両手をついた。

○受持教師の名前……それは、  
徳丸健太郎氏と聞いてゐます。

の畑に出て土いぢりをする事を樂んだ。その妹は自分の家で畑を有つて居ること、それから家族が畑

生の就職に就いて書いた多くの手紙の一つに對する返電である。やれ六級でなくては、否五級でなく

室の床の上に、兩手をついた。○受持教師の名前……それは、徳丸健太郎氏と聞いてみます。

# 原始人

秋葉 隆

(城大法文學部)

『原始人とは大人の肉體に小兒の心を盛つた存在である』といふ比喩があるが、文明人の子供の心は早くから其文化的環境の下に變形せしめられるから、必ずしもそれは原始人の心と同じではない。それにも拘はらず兩者の間には可なり似た點も無いではない。

嘗つてスペンサーは野蠻人は感情的である、又従つて争鬪的でもあると云つたが、近代の研究によると彼等は必ずしも争鬪的ではない。否寧ろ平和的な善き野蠻であるのを原則とする。併し矢張り感情的といはうか、氣分的といはうか、文明人の所謂理智的ではないやうに見られる。従つて子供の様に飽きつぱく機嫌直である。

原始人は仲々記憶がよく模倣がうまい。彼等が個々の傳統に關する具體的事實の知識を有つことの豊富さには、現地研究者の屢々驚かされる所である。又歌謠に巧みに言葉をおほえる才能に勝れて居る點も子供の様である。而も豊富な知識を組織立てる力が無く、言葉を記録する文字を持たないことも子供と一般である。

文明人が論理的であり、分析的であるのに對して、原始人は一般に直覺的である。此點も小兒の心に似て居る。従つて彼等は往々優れた鑑定眼の様な敏感の持主である。レヴィ・ブリュールは彼等の思考の特性を以て前論理的である

といつて居る

従つて彼等は吾々の如く深く省察するといふことが出来ない。殊に抽象的な思考、自我の考察といふ様な發達した心の働きの甚だ鈍い。だから自分の責任といふ様なものを深く感ずることが出来ないと同時に、自己の過失を指摘されることを極端に嫌ひ反對に己の行動を賞められることを子供の様に喜ぶ。殊に酋長の様な己よりも上位の者に賞められることを病的に喜ぶ。此點に於て彼等は甚だ事大的であり、又虚榮的である。原始人の虚榮に就ては可成り興味ある問題もあるが今は述べない。

鬼に角原始人といふ者は、前論理的な思考形式の持主であるが故に、其優れた記憶力も單に斷片的な無組織な知識を形成するに留まり、統一的人格を背景とする責任觀念といふやうなものは、之を理解することが困難であり、たとへ若干合點したかの如く見えても直ぐに忘れてしまふのが常である。だから吾々は原始人に對して責任を問ふことは出来ない。従つて責任を有する立場に彼等を置くことも出来ない。彼等は謂はゞ無責任的存在である。此點も全く子供と同様である。

従つて吾々文明社會に生れ合せた文明人の中にも、時として數萬年前の吾等の祖先の時代錯誤遺傳として原始人的人格の殘存物を見

ることがある。否凡べての文明人は皆何程かの原始的なるものを有つて居るとも考へられる。而も之を反省し考察することは文明人の特權であり、興味でもある(昭和六、二、二三夜)

## ◆雲隠れの記

北漢山人

○向ふの宴會場では、脇判事が紛失した。

○たつた今まで、杯を擧げて、犬に氣を吐いてゐたのに——『雲隠れとは怪しからぬ』

○それと同じ時刻に、こつちの宴會場では、長谷井秘書役が失踪した——『どうも無斷で逃げるとは卑怯千萬の話。オイ、長谷井君のところは、奥さんが嚴格かネ』  
(或る夜の京喜久での出来事であつた。

× ×

○ところが、逃げたと見えた御兩所は、偶然廊下で顔を合せたのが百年目!。『一ツ行かうか』、『ウーム、この間の仇討!』、兩人うなづき合ふと、奥の奥の、そのまた奥の、女中さへ氣付かぬ部屋に忍び入り、將棋盤に拭ひを懸けると、さアもう一切夢中。

○餘程時経て、家中の女中がやつて来て、『今晚のところは、どうぞこの邊にて、お引取りが願ひたう存じます』、『コレ、いやに拙者共を嫌ふぢやないか』といふと、『決して左様では……でももう四時半(朝の)でございませう』、御兩所飛び上つて、『さうか……何分にも相手がいつこい男でせう』

# 空想

飯島滋次郎

(京城醫專)

ある夕方であつた、私は東洋史を専攻してゐる人と一緒に皇福宮の外壁に沿つて歩いてゐた。その邊の閑寂はよくドイツ語で形容する死滅したやう——Wie Ausgestorben——でもあるし、死灰の冷めたやうにも似てゐた。もつとも遠くから朝鮮音楽のチラメルなどが聞えたり、等房の前には煙管を持つた爺さんが立つてゐたりしたが、永い年月開かれたこともなさうな樓門の額の迎秋門と脱落しかつた金文字があたりに冷氣を吐いてゐるやうだつた。チラメルも爺さんの挽歌であつた。歴史家は云つた。

私は向ふに見える朝鮮家を改造した家があるでせう、あれが私の務めてゐる役所です、裏に菲畑があるなんて變でせう、あすこで私は舊い朝鮮本を調べて歴史の資料を蒐めてゐるんですが大きな本がありますよ、壘半分ぐらいで鐵の環が付いたりしてゐるんですが……  
薄紫の空はあせて、日は暮れはじめた、幾十とない鳥の群が冷めた熱心さで空を横ぎつて行くと、馬夫の紙燭は廣い道におぼつかなく明滅してゐた。

——それで資料を蒐めていざ劃期的な事件を描こうと思ふと主要な人物の言葉なり行動が傳説と違つてくるので困ります、板垣さんの遭難の時の激言もどうやら當時の新聞の記事の一節らしかつたり、ルツテルもウォルムスの宗教會議では『われ此處に立てり、又すべき道なしアーメン』とも何んとも云はなかつたりが其一例ですがもつとも歴史的記述とはあるらしく又好ましい事柄は空想を交せて描くべきだと云ふ人もありますがね……

そう空想を交せて眺めると薄闇に景福宮の弓形門も龍宮のやうだし、風になびく柳の木は海草のやうだつた、白い衣服を着てふらふら歩いてゐる朝鮮人が海月なら歴史家は海の底に沈吟する鮫みたいだと云つて笑つた。

今村柄氏著

朝鮮漫談

(二冊三六〇錢)

お取次致し候

## ◆金の延べ棒

北漢山人

○平北の北鎮金鑛は、米人が經營してゐる。

○或る時その米人の家族が病んで、京城の池田病院長に、往診をたのんだ。

○ソコで、院長行つてそれの治療を加へた。

○さて、京城へ歸ることになつて、『モン先生！、アノ御謝禮の儀いかゞ仕りませう』と來た。

○院長、外人から小切手など貰ふと、面倒だと思つた。で、『その儀なら、決して御心配なく……拙者は、唯だこれを二三本頂戴して參る』、さういつて、院長がヌツクと立つて、兩手に駕籠みにしたのは……ナント皆さんあの金色サンランたる金の延べ棒……その中の三本——。

○米人アツといつて、椅子と一緒に引ツくり返らうとした。『あゝモン先生！、それア實に御難題……この儀ばかりは、平に……先方半分泣いてゐる。』

○よく聞いて見ると、この延べ棒一本二萬圓、三本なら先づ六萬圓——。

○院長曰く、『ほんにのう……同じ二三本でも、葉巻とは譯が違ふ……』

# 寢言

彼女は妙にくつと突かれた様に感じました。しかし其時ふと彼女は或る外國の滑稽な斷を思入出し



# 寢言

## 土生喜代子

(大和町二丁目)

二人は狭い臺所の板の間でせつせとフラシを使つてゐました。かたわらの瓦斯は盛んに青い火をふいて、釜の中ではぐつぐつと米の煮える音がしてゐました。

水ッ！と彼は例の命令的な句調でコップを彼女の前に突出しました。

ハイ。彼は受取ると湯殿に向いて忙らしい喉を初めました。今朝ね。と妙に低い聲で話しかけました。そして取つてつけた様に一寸こつち向いてごらん。と言つて、妙にじろく彼女顔を見

るのです。何？

何でもない、手拭を取つてくれはい、手拭。

彼はそれを濡れた顔にもつてゆきながら、

君のは新しいのと取り替へなさい。と言ひました。

彼女は嬉しくなりました。君のは新しいのと取替へなさい——なんて全く彼にしては出来来です。實際彼には今までそんな事に氣のついたためしがありませんでした。そして彼女の頭はそんな事でいつもいつばいでした。氣がつかない——で通つてゐる彼からこんな事を注意された事は初めてでした。何だか今朝の彼はひどくいつもの彼とは違ふ様な氣さへしま

した。

さつき何か話しかけてゐらしたでせう。

うん、今朝ね、又變な事を言ふんだ。

あら、又笑つた？……

笑ひやしないよ。變なことを言つたのさ。

きつと思ひ出すよ。

彼女は實によく夢を見ます。そしてその話を長々と喋つて、彼を『參らす』のです。近頃では彼女の夢物語には少々嫌氣さへも感じてる彼です。だのに今朝は彼の方から夢の話を始めました。

今朝の夢だけは何にも覺えがないわ、どんなことを言つたでせうよく考へてごらん、眞實は大變な事を言つたんだよ。

あらッ

それは實に彼女自身驚く程不用意に飛び出したうわすつた言葉でした。

そうれ、やつぱり思ひ出した。

思ひ當る事があるだらう。

ところが彼女には何にも思ひ出せなかつたのです。

眞實に知らないと言つたら知らないの、どんな事を一体言つたんでせう、ね、どんな事を——

彼女はひどくせき込んでゐた。

何もそんなにあわてる事はないよ、それとも何か、寢言に言はないやうに用心しなければならぬ事でもおありですか。

彼女は妙にぐつと突かれた様に感じました。しかし其時ふと彼女は或る外國の滑稽な斬を思ひ出してゐました。それは

夫がよく寢言を言ひます。その妻が或る朝貴方は昨夜中ブリアンブリアンと仰つしやいました。あれは何處の何方ですとたづねます。夫は澄まして

あれは自分の賭けてゐる競馬の名馬の名だと答へます。その夕方夫が歸ると妻はいきなり

お電話がかゝりました。と告げる。夫が誰から？とたづねると貴方の馬からです。と妻は言つたといふのです。

ひどく氣にかゝると見えるね。かうだよ。先程目が覺めて、起きやうかなと思つてゐると、ひよいと君が、『一緒に使ふから出来るのよ、だから出来るのよ』と例のを言ふんだ。で、何の事だらうと思つてたがさつきから君の顔を見てたら、こなひだから氣にしてゐたたいがまだ治らないのであるんだ。それで、あゝやつぱり女だなあ、口にはそんなには言はなくても顔の事は餘程氣になつてると見える。と大いに同情したわけさ。そこで、考へて見ると、僕は何時も人の手拭を使つては叱られるが、この頃もよく君のを失敬して、水虫のひどいこの足を拭くんだ。君はそれとは知らないで、そのまゝ顔に使ふ。だからたむしが出来るんだなとひよいと氣がついたわけさ。ね、だからさつき——手拭を新しくし給へと言つたんだよ、それにしても——一緒に使ふから出来るのよ——には恐れ入つた、ハハ、ハ、ハ。

そして彼はさもおかしさうに腰をまげて笑ひました。

# 感謝に堪へぬ思出

佐々木忠右工門

(警察官講習所)

自分が東京帝大在学中、たしか大正六年と記憶するが、其三月から四月にかけての休暇に學友三人と共に勉強するため千葉縣君津郡

笹毛の海岸へ行つたことがあつた學友の一人が君津郡選出の或る縣會議員を紹介されて參つたのであるが、其家の座敷が狭かつたから自分は同級で日同科(獨法)のK君と他の家に紹介された。其家は相當資産のある農家らしく召使の若者も多數居たやうだつた。自分

達は其奥座敷二間を借り各一間づつを占めたのであるが、其處の奥さんは四十二才の身体の丈夫な方であつた。農家のことであるから屋敷も相當廣い自分等の勉強してゐる部屋から其の所有の田圃も見える。勉強に疲れた折に戸外を眺めると奥さんの田を耕して居られる様が見えた。農家のこととて四月にもなれば田植の準備もしなければならぬ爲め相當忙しいやうだつた。日中は奥さんと女中位

が家敷に居て他は全部耕作の爲め外へ出てゐるやうであつた。ところが、午后四時頃になると、御八(晝食と夕餉の中間食)と云ふ習慣があるらしく三時半頃になると奥さんの姿が見えなくなる。餅とか蒸した甘薯とか自製の菓子などを吾々部屋を持ち來り御馳走してくれたのである。又或時は吾々學生が頭を使つてゐることに同情して特に若者達を海岸へ漁りに行か

せ、生々した魚を食膳に上せてくれるといふ風に親切にしてくれた吾々は約二十日間其處に滞在して勉強し、やがて東京歸ることになつた。吾々は相當謝禮をしなければならぬので、若干の金を包み謝意を表すると、『私は金なんかを戴く爲に皆さんを世話したのではないから、御心遣ひに及びませんとて斷られた。それでは吾々として氣が濟まぬので強いてほんの心ばかりの謝儀を置いて歸つたのであつた。それから約一ヶ月を経て自分が大學の圖書館で讀書に耽つてゐると學友の某が田舎のおかみさんらしい人が君に會ひたいと云つて正門で待つてゐると知らしてくれた。自分に心當りもなかつたけれど折角のことであるから一應會つて見ようと正門へ出てみたら自分に面會を求めたおかみさんと自分約一ヶ月前笹毛の海岸に行つた時お世話になつた或農家の奥さんであつた。そこで自分はお世話になつた際の禮を述べたら先方の云ふには『お禮など述べていたゞいはは痛み入る、實は先般謝禮を戴いて困つたので何なりと貴郎様方の爲になるやうな物でも差上げたいと思つてゐたが好い考もないので自分の家で鶏を澤山飼つてゐるので、鶏の卵でも差上げやうと思ひつき持參致しました』とて鶏卵一箱を手渡しされた。禮には多忙な際に吾々の爲に御八

の馳走して吾々の勉強に疲れたのを慰めてくれたことや、今又吾々の勉強の最中自家飼養の鶏の生み立ての卵を態々持參して贈られたと云ふやうな真心の籠つた親切は今に至るも忘れることは出来ないのである。爾來星霜十數年絶えて御無沙汰致してゐるが彼の親切な奥さんは今頃如何致して居らるる事やら、一度其の家を尋ね當時の厚意を謝したいと思ひ續けてゐる。そして只管健康を祈つてゐる。

【一六】

○旭町の物持五味安太郎氏の娘さんが、ツイこの間第一銀行本店の、さる法學士と結婚した。

## ◆安心料の話

漢江漁郎

○京城中では、朝鮮ホテルで――また東京では、帝國ホテルで、盛大な披露宴を行ふた。

○ところで、東京で招待したのは、一銀重役、幹部、婚殿の恩人先輩といふワケで、粗末なこととは出来ぬ。『顔觸れは、斯ういふとこちやが、一人前とれ位でよからう』と、東京通の人に聞くと『ハ、ハ、この顔觸れなら、先づ一人前五十圓!。それとも奮發して、八十圓と行きますか』、五味さんアツとお魂消けたが、やつこのことで、心をとり鎮め、先づ五十圓に決めた(この夜來客二百名)。

○歸來五味さん曰く、『ワシも養子をもらつて、これでヤット安心した……だが、東京の安心料は皆さん早や……』

○首を縮めてのおん物語。

# 淺間しい慾

(旅の日の偶感)

野 村 薫

(京畿道刑事課)

を吾々部屋に持ち來り御馳走して  
くれたのである。又或時は吾々學  
生が頭を使つてゐることに同情し  
て特に若者達を海岸へ漁りに行か

山飼つてゐるので、鶏の卵を  
上げやうと思ひつき持參致しまし  
た」とて鶏卵一箱を手渡しされた  
曇には多忙な際に吾々の爲に御入

心した……だが、東京の安心料は  
皆さん早や……」  
○首を縮めてのおん物語。

### 三

發覺されれば周章狼狽、三拜九  
拜する醜態を演ぜねばならぬこと  
は、既に百も承知の人でありなが  
ら、何故僅少なる税を呑むで密輸  
入を企てるのであらふか。而も相  
當の肩書を持つ人、知名の士にし  
てこの行爲を取て爲すのであらふ  
か。

人間の慾は、人間味の一半を背  
負ふてゐるであらふ。  
眞の人間味の慾は、道を踏み外  
さない節度ある慾でなければなら  
ぬ。

節度は、守り難く、兎角、凡人  
の踏み外し易いものである。  
凡人なるか故に淺間しい慾も起  
るのであらふ。

淺間しい慾が、はからざる身の  
破滅を醸した例は決して尠くない  
身の破滅の最大なるものに犯罪  
がある。

犯罪を恐れるもの、獨り善人の  
みでない、犯罪者自身亦大にこれ  
を恐れてゐる。  
恐れて犯すところに、淺間しい  
慾を慰むる犯罪性の快感味がある  
のである。

犯罪性の快感味は、人類の總て  
が持つ潜在的犯罪本能である。  
從て顯官顯才、智者と雖、この  
本能の萌芽は心裡深く潜在するこ  
とは學者の認めるところである。

唯その萌芽を理性と環境とが支  
配して、發露を抑制してゐるに過  
ぎない。

二  
去る日安東に旅行した折に、税  
關官吏の密輸入に關する物語を聞  
いた。  
即ち密輸入が職業的に、而も大

袈裟に行はるゝ場合も、決して尠  
くないが、所謂目家用として許さ  
れてゐる範圍を超過して、僅少の  
物を密輸入する數も亦、驚く程で  
あつて、而もそれ等の人々の中  
に、相當の肩書を持つ人、知名の  
士が多いとのことである。  
そして彼等密輸入する者の心理  
を考察するとき、實に人間の淺間  
しい慾、意地きたない行爲の半面  
を窺ふことが出来る。

### ◆人のうわさ

北 漢 山 人

○鐵道局の林原憲貞氏、會計檢  
査か何かのために、京南鐵道へ行  
つた。

○所用果てたので、向ふの井上  
支配人が、『今夜は飯でも一緒に  
食べませう』といふと、『飯なら  
宿で頂戴いたします。それより井  
上さん將棋を一ツどうです』、井  
上支配人元來勝負事は嫌ひだ。殊  
に將棋に至つては、行き道も知ら  
ぬ。『イヤ、將棋は、いかん。そ  
の儀は助けてもらいたい』といふ  
と、『何、この時勢に、それアほ  
んどのことか。さてもお堅い——  
然らば、唯今より致へて、今夜中  
に勝負の出来るやうに致す。何、  
少しも懸念は入らぬ』、林原さん

矢張り節度なき人間の淺間しい  
慾の發露であると同時に、人類の  
總てが持つ犯罪本能の表現であり  
犯罪性の快感味が含有されてゐる  
と解釋すべきでなからうか。  
吾々は常にこの本能と快感味を  
抑制する理性と、環境に左右され  
ない心懸けを持ちたいものである  
(六、三、五日)

兩手で盤を持つて追ひかける。井  
上支配人頭を抱えて逃げる。

○宿の小婢大に喜んで、『早く  
く、皆お出で……面白、いよッ』

○北米倉町の支那料理『蓬萊閣  
が焼ける。

○それは、工藤婦人病院の、ツ  
イ鼻の先に當る。

○工藤夫人雨戸を繰れば、火焔  
天に沖し、火の子雨の如く降る。

○『まア大變たわ。早くお起き  
なさい』——主人公を揺り起す。

○されど、豪傑は物に驚かず、  
『ウムム々』と、夢うつゝの境。

○『うちの隣りですよ。蓬萊閣  
ですよ』と、セキ立つれば、『あ  
ゝさうか。心得た！。近火の第一  
印象は、キレイだと申す。ところ  
で現實はどうかネ』

○夫人、遂に果れ果てて去る。

# 東京ナン

林原憲貞

(鐵道局)

東京——銀座——カフェー、東京を代表的に聯想する銀座、其の銀座風景を飾るべきカフェーは、モボ、不良老年、非不良老年の差別なく、吾れも吾れもと現代的享樂に浸たる人々がカクテルを飲み、女給のサービスにエロ氣分を味ひ、照明の紫外線の感觸に興奮的慰安を覺ゆる場所である。今やカフェーを語り得ない者は現代人でないかの如く見られる。

カフェーは一種の共同便所である。僕は平素惡口を言つてゐるが、東京に行けば這の共同便所の御厄介になる機會が多い、カフェーを西洋料理を食ひに行く場所を利用する者は野暮視せられるかも知れないが、晝食も夕食も此處で済ませば寔に便利である、午後三時迄はノーチツプタイムで絶體にテツプを受けぬカフェーもある、頂いては叱られますとの女給の話。

銀座裏の某カフェーの如きは淫蕩の氣分満々たるものもあるが、能く警察が黙つてゐると思つた。

× 新橋邊の或る二流階級のカフェーで夕食を済ませたときの女給の話に、女給の一ヶ月の収入は平均五、六十圓、一日お客さんにあり附くのが平均一人半の見當、其れで家を持つて親を養つていかなければならないから苦しいとの述懐、『着物はどうして作る？副業で稼いでせう』と訊ぬれば肯定したや

うな女給の笑聲。

× 或る日の正午サロン春に行かんとする時、圓タクに乗つた、自動車運轉手は、サロン春を知らなかつたから、交詢社のビルヂングではないかと教へて遣つた、『交詢社は知つてゐますがサロン春は知らない』と云つた。『交詢社を知つてゐて其の階下に在るカフェーサロン春を知らないつて變ではないか、君は若い男に似合はない感心男だな』と褒めてやつたが、運轉手は『サロン春を能く知る貴下方のやうな境遇になつて見たい』と羨望的遺囑。

× 或る夜の出來事であつた、銀座より麹町の方に歸らんとするとき、圓タクを待受けてゐたが生憎一寸見當らなかつた。雖て通り懸つた一臺の自動車を呼び止めて、五十錢でよからうと云つて乗車した、克く觀れば普通の圓タクより立派な車、運轉手は圓タクではありませんが、今新橋に旦那を送つての歸り道、實は煙草錢を稼ぐんですよと言つた、一つたい旦那は誰だ、何處迄歸るのかとシテコク訊ねたがなかつた言はない。唯目白迄歸るとのみ。

僕は自分の知つてゐる目白邊の豪ら相な人々を想像して見た、目白なら安藤又三郎氏が居る、代議士では山耕儀重氏、山道襄一氏等を想ひ起して見たとらう、自動車の主人が民政黨總務、前鐵道政務次官山道襄一氏であつた事が判つた。

山道氏は校友の關係で知つてゐると言つたら、運轉手は『どうぞ頼みますから内密にして置いて下さい』と云つた。五十錢の約束を少々奮發して金を渡したら、彼は非常に喜んで目白に向つた。



で稼いでせう」と訊ぬれば肯定したや

つた。

# 女性

## 岩淵旭

(第一 高女)

女は造化の尤も麗しきものと詩人ミルトンは謳つた、實に天の星地上の花、そして人間に婦人がある。女性の美は容色の美に非ずしてその母らしさに存する。美服を纏ひ粉色を施した附加的の美は人形の美である。さればこそ『女の尤も美しい時は其の子を抱いてゐる時だ』とも言はれてゐる。

由來女子に就いてはその觀方に褒貶の兩様があつて透徹したる觀察を見ない程神秘に屬するのであらうが、よくも言はれ悪しくも觀られてゐる。聖書に見えてゐる所によると天地創造の六日に神はアダムを造り而してその補助者なるエブを與へられた。そしてエブはアダムより肋骨一本少い丈である。彼等はエデンの園に睦ましく暮してゐたが蛇の誘惑によつて禁斷の木の實を食つたため人間は極樂から追放されたと云ふのである。そこで罪の源は女である、『女子よ、汝は常に喪服をつけ、涙を浮べて歩くべきである。人間を墮落せしめたからである』と或僧も難詰してゐる。又印度の昔話にもある如く神は時の始めに世界と母とを造られた。女を造る時に材料が無いため月の圓さ、蛇のうねり樹の枝の撓さと草の戦ぎ若草のしなやかさと花の觸り葉の輕さと牝鹿の睨み陽炎と雲の涙、風の浮氣と兎の臆病、孔雀の誇りと雀の胸毛の柔さ、ダイヤモンドの堅さと蜜

の甘さ虎の殘酷と火の暖さ、雪の冷さと椋鳥の饒舌と鳩の鳴聲とを混せて女を造られた。それを男に與へると間もなく女はよく饒舌つて不快だからと返上に來た。所が暫らくたつて又男が來つて淋しくて堪らないから女をかへして頂きたいと願つた。神は之を許して女をかへしてやつた。數日してその男は亦神様の所へ來て女は樂しみを與へるよりも苦しみを與へる事が多いから引戻して貰ひたいと申上げた。ところが神は怒つて勝手にするがよい。『御前は女なしには生活は出来まいぞ』と言はれたといふ事がある。

又一方に於いて支那では『女の髪は大象を撃く』と云ひ、ゲーテは『永遠の女性なるもの我等を導きて彼方に往かしむ』と歌ひ、日本でも日の本は岩戸神樂の昔より女ならではの云々と言ひ古してゐる。舌存して常に齒の亡ぶるを見るとき剛は終に柔弱に勝たずとか言ふのも女子の弱さの強みを言つたのであらう。其の他女性に關しては色々評されてゐるが、要するに女は永遠にとけ難い謎の存在であり造化の妙である。

さる女性觀はともかくとして人類の半ばを占むる女子をして身體に於いて且精神に於いて活ける菩薩たらしめ現世に樂土を建設せんとするのが女性の關心であり同時に吾人の努力でもある。

女子の本質的の美はその母らしさにありとすれば人の子を産み之を育くむ尊き使命を荷へる女子の任は聖くも又重大であると言はねばならぬ。女權擴張、男女同權等女子の形式的活動範圍の擴張もさる事ながら女子究極の使命を無視しての狂奔はむしろ誠しむべきである。『賢明にして美しき母』、之ぞ大自然が女子にのみ與へたる特權でなければならぬ。洗練された趣味、微妙なる感情、暖い同情燃える意氣、不撓の努力、而して貴重なる經驗、豊富なる教養優秀なる技能、夫等が縦に纏りなされた生活こそ錦繡のライフであり生き甲斐ある生活である。

母たる事に存在の意義を有する婦人に『生め殖えよ』の神意は女性につかはされた無上命令である。人間を世に送る母、偉大なる藝術家、文藝家、哲人、宗教家、科學者、偉人、傑士、英雄豪傑、皆母性が社會への贈りものたるを見れば女子の任の重大思ひしるべきである。

果して然らば女子たるの自覺はその母らしさにありと斷ずるも決して過言ではないと思惟する、世には子を持つ事を己が足手纏ひなりとして之を避くるの徒なきにも非ずであるがそれは大自然が女性に與へたる聖なる使命に逆らひ、而も自らは尙空虚寂寞に懊惱する矛盾にさいなまれてゐる愚かしき者である。

女子の自覺が母性たるにありとすれば、それは必然的に子女の教育に思ひを致さねばならない。何となればカントの言へる如く『人は教育なしには入たり得ない』からである。

# 邊境一題

堂本貞一

(新義州税關)

1101

馬の性情として彼の馬群も競争心を發られ、首を揚げ、たてがみを起て、疾驅逸走せむとする態度を示した。

馭者は、極力、馬群の沈靜に努めながら、我をさし招いて速かに行き過ぎよと合圖した。

相い、距ること數町、後方を顧みれば、彼は長鞭悠揚、緩歩安閑たるが如くに漫々の前進を續けて居る。

これが、自分等であるならば、長鞭一振、馬群の競争心を満足させると共に、自らも一時の快味を味ふのだが、實によく經濟に徹したる民族なるよと、つくづく感服した。

事務ありて政治なしとは、世人から私共の仕事ぶりに對して加へられた誇りの一つであるが、私は此の光景に直面して政治ありて經濟なしとの評を、我が國民生活は受けはせぬかと感じた。

## ◆健康の洋杖

三木一彦

○朝鮮火災の甲本氏は、ドコか悟りを開いたといふやうな人で、言々句々飄逸味がある。

○曾社の机の上に、薬瓶を置いてあるから、『ドコかお悪いのですか』と訊くと、『イヤ、この通り丈夫ですよ』、『でも、そこにあるのは、薬瓶ぢやありませんか』といふと、『あ、これですか。これは、私のステッキですよ』、妙な洋杖もあるものだと思つてゐると、『ネ……これが、私の健康の杖、英語でステッキ……年寄の獨り歩きは危険ですからネ』

○  
二月二十一日、平安北道として鴨綠江の最上流、威鏡道の界に近い東興(厚州古邑)を發して浦三に向ふ。

橈旅行と覺悟して居たのが、幸いにも、試験的に氷上に運轉して來た自動車があつたので、其の便利を籍りることとした。

『二十一日と云へば、月給日ではないか、家であれば小煩い日だが、旅にしなければ長閑なるかな』等と、戯言を弄しながら出發。

氷上の自動車旅行、また頗る妙到底、アスファルト路を滑る比ではない。但し、雪の吹き溜りや、氷の凹凸に出遭つては、これ頗る不妙。

瀧を早やみ、水流急轉して氷結に違ない箇所は、碧流滾々、鴨が數羽群れ遊んで居る。氷上、穴を穿つて水を汲む、恰かも井戸と異ならぬ。行き交ふ馬橈、牛橈、たまには人力を以て曳いて行くものもある。兩岸、相い迫るところ、犬牙錯綜、斷崖絶壁、奇岩怪石、つちの頃、紅葉の秋、其の景は如何になどと偲びながらに行く。

途中、羅竹の駐在所に敬意を表すべく、自動車を河面から邑内に乗り入れた。

何がさて、自動車と云ふ物を見た事がない處とて、大變な騒ぎ。其處で、私共一行が駐在所に御邪魔して居る時間を利用して、普通

學校の生徒に實物教授として自動車を見學させることになつた。

先づ、自動車を校庭に入れ、運轉手から一通りの説明を與へた後生徒を幾組かに區分し、順次乗車せしめ、校庭を8の字形に運轉しては次の組を乗せると云ふ工合。駐在所からも巡查さん二名、現場に御出張、生徒に怪我人の出ぬやう整理していたとく事にした。

暫くの間に、之を聞き傳えて部落中の老幼男女が、自動車見物に集つて來たので、一時はお祭りか市日の様な賑はしさを呈した。

校長先生から懇ろなる御禮の言葉を辱ふして、自動車は、羅竹を後に、再び河面氷上に降り西行した。

○  
三月六日、滿浦鎮から氷上を橈で、對岸、東邊道海安縣通溝の東北方に在る俗に將軍塚と呼ばれて居る高句麗王朝の古蹟を訪ねむと出發。

私共の橈は、白衣の馬夫が挽馬を叱咤鞭撻するので、鈴の音も勇ましく疾驅馳走する。

前方には、先頭に二頭、中に三頭、其の後にまた二頭、都合七頭を聯ねて牽引して行く支那橈が、馭者の長鞭も悠揚として寛々緩々漫々の進んで行く。

やがて私共の橈は、前方の支那橈に追及し、將に追い越そうとして兩者併進の狀を呈した。すると

# ラヂウム閑話

すると云ふのも、科學的に蓋を開けて見れば、他愛も無い譯なのだ。何でも物の發見とか發明とか

た事がない處とて、大變な騒ぎ。  
其處で、私共一行が駐在所に御邪  
魔して居る時間を利用して、普通

やがて私共の糧は、前方の支那  
糧に追及し、將に追い越そうとし  
て兩者併進の状を呈した。すると

ると、『ネ……これが、私の健康  
の杖、英語でステッキ……年寄の  
獨り歩きは危険ですからネ』

# ラヂウム閑話

工藤 武城

(京城婦人病院)

ラヂウムを買つて何年になるか  
と聞かれると、即座に十年と答へ  
る。物忘れの名人であつて、親の  
年忌さへ忘れがちな自分が、どう  
して此れだけ記憶して居るかと言  
ふと面白い因縁がある。

聊か家庭の内緒事に涉つて、公  
開したら北堂から叱られる、かも知  
れぬが、此細君甚しく多産の遺傳  
があると見へて、結婚翌年から産  
出事業を始めて、殆んど年子の産  
み續けで、八年間に六人と云ふ能  
率成績を擧げた。定めし太平洋の  
彼方で、サンガー夫人が自團歌を  
踏んだ事であらふ。

然るに、ラヂウムを購入した年  
から、ぱつたり此國家事業經營が  
息んで仕舞つた。故に末の子供の  
年齢がラヂウムを買入れた年にな  
る。

此現象は自分計りでは無い。嘗  
て此京城雜筆誌上で、金澤庄三郎  
から雪搔人夫と間違へられ、宮中  
御陪食で隣席に此人夫を見出して  
始めて分つたと云ふ逸話が素ッ抜  
かれた、自分の母の弟に當る東京  
帝大理科のラヂウム講坐を受持つ  
てる李吉と云ふのゝ家庭も此と同  
様の現象を呈して居る。

東京にラヂウムを貸す會社があ  
る。其會社のラヂウムを持つて廻  
る番頭が皆小供が無い。故に若い  
番頭が得られないで困ると云ふ話  
を聞いた。

長い間ラヂウムをひねくつて居

る内に、此は偶然の符合では無く  
て、恐らく生殖細胞の中に含有さ  
れてるレチ、ソの關係であらうと  
云ふことが分つて來た。

人間の身體の中で、生理的に最  
もレチ、ソの含有の多いのは生殖  
細胞である。男子の精虫にしても  
女子の卵子にしても同様である。  
病理的には癌の細胞が超多量に  
含む。

ラヂウム光線が最も好物として  
作用するのは、此レチ、ソ含有の  
細胞である。レチ、ソを含まない  
細胞には殆んど作用しない。此レ  
ラヂウムが癌治療に使用せらるゝ  
と同時に避妊法に應用せらるゝ所  
以である。

お膳の上に餅、饅頭や菓子類と  
鹽辛や海菜等の酒の下物にふさは  
しい物を雜然と並べて下戸の前に  
差出すと、一番先きに菓子類を平  
げると同様に、種々な細胞からな  
る身體にラヂウムを作用させると、  
レチ、ソを含む細胞を眞先にやつ  
いて仕舞ふ。此れがラヂウム光  
線の選擇作用と云つて興味ある現  
象の一つである。

癌の治療を始から終り迄、一定  
の期間を隔て、顕微鏡の検査を  
やると、中々面白い。生理的生活  
に、必要な細胞は平然としているの  
に癌細胞のみはへどく、にやつい  
けられて、敵ながらも哀れ果敢な  
い最後を遂げて居るのが分る。  
ラヂウムが癌に對して神効を奏

すると云ふのも、科學的に蓋を開  
けて見れば、他愛も無い譯なのだ  
何でも物の發見とか發明とかい  
ふも偶然に起る如く、例へばニュ  
ートンが林檎の落ちるのを見て重  
力の原則を發見し、ワットが鐵瓶  
の蓋の動くのから蒸氣機關を發明  
した様に。

ペクレルと云ふ人が、ズボンの  
ポケットにラヂウムを入れて居た  
らば、股の外側に火傷の様なもの  
が出来た。此れを一つ人間の敵  
たる癌に作用せしめたらばと云ふの  
が始まりであつた。  
此人はキューリー夫妻の先生な  
り同僚なりの間柄であつた。ラヂ  
ウムの發見を完成したキューリー夫  
人は、自分が遇つたのは其四十九  
歳の頃で、年よりも遙かに若々し  
く、尙孜々として研究を續けて居  
られた。本来ポーランドの生れで  
巴里ソルボン大學を卒業したのは  
二十五歳と云ふことであるから、  
餘程の才媛であつたと見へる。

ラヂウムは一ヶ年どの位産出さ  
れるか。他の鑛物が何百、何千噸  
と云ふのに、世界中の産出額總計  
驚く勿れタタター一匁、四グラムそ  
こゝに過ぎない。現在全世界に  
あるものを悉く合して約十匁計り  
日本中にあるのが總計四分、朝鮮  
中には、大學にあるのと自分に持  
つて居ると合して千分の二百グ  
ラム。

然かし輕蔑してはいけない。其  
一匁の價格が時價三百萬圓、一グ  
ラムの十分の一で二萬圓。  
なぜこんなに高價なのか。金剛  
石の様に産出を手控へて價格を釣  
上げるのでは無い。實際は手間賃  
作業費である。假りにラヂウム鑛  
石を一里の長さ並べたとする。ラ  
ヂウムが其中に含まれるのは一

匣の長さに過ぎない。  
餘程良好の鑽石であつても、其ラヂウム含有量は三百萬分の一をこゝである。斯くも微量の含有量を、種々の化學的作業をして製出するのであるから、値段の高いのも無理はない。

ラヂウムが斯くも痛に對して靈妙不可思議の効驗があるから、賣めてイリヂウム鑛位の産出があつて、天下の醫師盡く其藥籠中に幾

分づゝ貯ふる理想境が現出せぬものかナヤ。

それから世間で種々の藥品にラヂウム云々と此を冠らして市場に賣出したが、先年内務省から、罷りならぬと御禁止が出たと記憶する。又た鑛泉にラヂウムを混入すると信じてる人もある様であるが、本来ラヂウムは、放射性金屬元素であつて、此れが刻々に分裂して非常な速力で射出され、此作用を

【三二】

受けた水が世に云ふラヂウム鑛泉であつて、ラヂウム自身が溶解してゐるのでは無い。故に正しくはラヂウムエマナチオンと云ふべきである。

夜光時計の表時板や電氣、呼鈴の夜光ボタンの如きもラヂウムの作用を受けさせたもので、ラヂウムを含む譯では無い。  
値段も高いが、然かし不思議なものが現はれたものではある。

### ◆學界ノ一ト

それかし

## 科 學 百 話 春 雨 の 話

佐 藤 順

○木々の若葉に降りそぐ春雨は宛ら鼓打つやうな西詩にあつた事を記憶

して居るが、東京地方の春雨などは随分荒ツぽい場合が多い。但し關東地方でも群馬邊に行くとな靜かな溢々降るやうな春雨が見られる。しかし春雨の唄にあるやうな『しッぽりぬれる』といふやうな趣のある、粒のそろつた小さい雨がボツ／＼降るいはゆる春雨は、どうしてても京都のやうな山にかまされて谷になつたやうな地形の所へ局部的に降る地形性の雨に多いのであつて、その溢々降つて居る所へ地形性でない一般的な嵐が吹いて來れば、春雨は荒降りに變つて雨はそれで晴れ上るのである。  
○春雨は地形性でない一般の氣流で出來る雨に較べると、降る速度も鈍く雨滴の大きさも小さい。また夏の雷雨の速さや雨滴の大きさなどよりも小さい。雷雨の雨滴の大きさは、大きいのは直径一センチ位の物さへあるが、春雨の雨滴

の大きさは直径約・〇二乃至〇・八ミリ位のもので、降つて來る速度も一秒時間に約六メートル位の速さしかないから、極めて穩やかな音を出して木々の若葉を打つのである。

○春雨はかくボツ／＼降つて逃げて流れないから、地中に降つた全部がしみ込むといつてもよい。夏の夕立などの如くいはゆる車軸を流すやうにドン／＼地面に走つて流れ去るのは違ふから、作物その他の植物に影響を及ぼす力が強いのは無論である。春雨の中に如何なる物が含まれて降つて來て地中のどの位までしみ込んで行くかは、森林測候所や農事試験場また氣象臺等で調べて居るが、中々むづかしい調査です。

○春雨を降らす雨雲の高さは割合に低く、大抵地上五、六百メートルの所にあるやうである。多雪を降らす雲はモツと低く、冬から夏にかけて段々雨雲は高くなり、夏は二千メートル位の高さに及ぶ事もある。但し春雨は降る力も弱く音も優しい割合にその持つて來る栄養分は相當深くまで地中に入り作物を喜ばすものである。

○大學教授といつても、燻ぶつた支那の古本のやうな人ばかりとは限らない。

○近ごろは、風采堂々……若しくは容姿端嚴……乃至は尖端味滴々なモボ連も少くはない。

○物故された兒島獻吉郎先生一流の人は、實はもう少いのである  
○松月秀雄先生、田花爲雄先生……等々は、ドコかの銀行の重役室で見ても、少しも不調和は、見出さないであらう。

○醫學部に廻つて、大澤、小川大塚先生などもさうである。

○阿部能成先生が、風貌的に或る一種の信者をもつてゐられる如く、佐藤清先生も、『よくお目にかゝつてゐると、だん／＼お立派な方ネー』などといはれてゐる。

○しかしこの型も、昔の東洋型とは、譯が違ふ。

○もつとお若いところ、助手、助教の方々になると、ホントに水の垂れるやうな、三十一年型の尖端子も居られる。

# ルイゼ王后の臥像

屈辱は、ブルシヤに對して殆ど完全な致命傷となつたのでしたが、この間にあつて、ルイゼ王后は、



などよりも小さい。雷雨の雨滴の大きさは、大きいのは直径一センチ位の物さへあるが、春雨の雨滴

く音も優しい具合にその持つて来る栄養分は相當深くまで地中に入り作物を喜ばすものである。

水の垂れるやうな、三十一年度の尖端子も居られる。

# ルイゼ王后の臥像

## 福士末之助

(總督府學務局)

伯林に接續する、シヤールロッテンブルグといふ町に、獨逸はプロシヤ時代からの離宮があります。世界大戦前には、武威と榮華とを誇つたこの宮殿も、今は敗殘の情けなさに、全く公衆の爲めに解放せられ、その周圍の廣大な庭園も公開せられて居るのです。

私は眞夏の某日、この宮殿を觀覽し、庭内をも散策したのでしたが、殿内の裝飾様式はロココ式と申され、天井壁面は白地に金色の模様を浮彫りにし、尙且つ澤山の繪畫をしつらひなどして華麗に過ぐるの嫌はありまするが、如何にも明るい感じを起させるのでした。又その各室には、數多の大石像銅像、支那の陶器などを飾り付け由緒深き遺物も其のまゝに保存せられて居つて、歴史上からも非常に參考になるのですが、就中那翁がプロシヤに攻め入つて、散々に之を蹂躪し、やがて伯林に滯留の時、彼が使用したと傳ふる調度もあり、中にも萬里遠征の旅情を慰める爲に、次室に置いて奏せしめたと傳へらるゝ自動軍樂、即ち笛や大鼓や喇叭などを一組とした樂器が、ネヂの仕掛けに依つて嘯と鳴り出したのを聞いたときには、彼の體軀倭小、眼光炯々、大鼓のやうな腹を突き出した、滿身冷智と膽との那翁が、この金殿の中に相將を鷹き、得意滿々の場面を想起せざるを得ぬのでした。成

程那翁がライン同盟を結んでプロシヤの脊を打ち、次いで之にチルジットの講和を強いてその喉を扼し、更にウエストハリアに自分の末弟を封じて之に熱湯を飲ましめ、遂にプロシヤをして愈最後の悲鳴を擧げさせ、尙且つ自分は傲然伯林に留まつて西歐の諸國を睥睨し、更に鼻眼をドーバー海峡の

かなたに注いで、かの有名な大陸條例を勅令し、以て英國を戰慄せしめた當時は、眞に那翁一生の花でしたらう。私は是等の事を想ひつつ、この殿中の各室を巡つて居つた時、巴里はエトワールの凱旋門、倫敦は右就館の、那翁がセントヘレナに於て使つたといふ極めて粗末な木製の椅子や机、さてはアンワルトに於ける彼の靈廟、次いでウエルサイユに於ける鏡の間など、それからそれへの聯想に、感懐甚だ深かつたのでしたが、しかしながら、この近世史に於ける史變の旋律に對する私の感興は、この宮殿の後庭に於ける遙かかなたの林間のブリデリックウイヘルム三世の後、ルイゼの靈廟を弔ふた時に於て、寧ろそのクライマツクスに達し、尙且つ戰敗の獨逸興國の氣は、今尙此廟内にも鬱屈して居るのではないかと思はしめたのでした。御承知の通り、才色兼備なるこのルイゼの、夫王ウイヘルム三世は必ずしも賢王ではなかつた。そうしてチルジットの

屈辱は、ブルシヤに對して殆ど完全な致命傷となつたのでしたが、この間にあつて、ルイゼ王后は、祖國とホーヘンツォルレン家との興隆の爲めに、婦人としての凜然たる志操を屈せず、誠を盡して夫王を輔けたことは申す迄もなく、婦人の身ながら、自ら閱兵式を行ふて三軍の志氣を鼓舞し、或は德義會の設立を助けて國民の愛國心を勵まし、特に心血をその二王子の教育に注いで、賢母の範を示した如きは、今尙世の人々の欽仰措かざる所せう。その楚々として涙ながらに彼の傲然たる倭僞便腹の那翁に會見した時の事などは、悲壯にして而かも崇高の場面であつたこと、思はるゝのです。斯くて、この賢夫人ルイゼの耿々の氣が、スタイン、シヤルンホルスト、ファイヒテなどの熱血と共に、プロシヤをして、その隆々たる國勢を挽回せしめ、やがて獨逸聯邦の大業をも完うせしむることとなり、一劍磨き來れる十年の仇敵たる彼れ佛國の宮殿ウエルサイユに於て聯邦獨逸皇帝の花々しき戴冠式を行ふたるは、實にこのルイゼの一人、ウイリヤム一世であつたのでしたが、この露々たる婦徳の高きルイゼ王后の廟は、今丁度私の出でた宮殿の後庭、一帶の密樹鬱蒼として、晝猶暗き林間を、遙に分け行く切右敷の道を四五丁ばかりにして行きつゝのです。廟は美しき石造の靈堂であつて、その中に

入れば正面の中央に白大理石の女神の立像があり、その前方にフレデリックウイアム一世、同二世、同三世の、是亦大理石造の靈櫃が各王后のそれと一對をなしつゝ相並んで安置せられてゐるのですがルイゼ王后のは、夫王ウイリヤム

三世のと相並び、女神像の方より見て右方にあるのです。而してその何れの靈柩にも、その上には故人の是れ亦白大理石の記念臥像を安置して居るのであります。ルイゼの臥像は、長衣を着けて仰向けになつて居り、頗る氣品の高い、恰も女神のその如き容顏が少しく左方に傾き、兩腕は、之を心もとなげに曲げて胸上に置き、兩手の指を少しく屈めて、之を心臟の邊に置いた有様は、如何にもいたゞしく、さながら祖國の興廢に、やるせなき懊惱の情に堪へ難くて、長へに之を後人に訴へて居るやうな感じを起させるのでした。而してこの臥像が、電光の作用に依つて、淡紫色に見ゆるとき一層の神韻を加へ、こゝを未來の人々をして、全く低徊去る能はざらしむるものがあるのです。さても人の正しき行と、その中に存する眞平たる志操ほど、後人を感孚せしむるものはない。私はこの王后の英靈をこゝに弔ふたとき、

ゆくりなくも普佛戰爭以後に於ける獨佛の關係やら世界大戰後に於ける獨逸の悲運やらを思ひ浮べ、更に益々剛健なる身心の鍛鍊に勵みつゝある獨逸青年の志氣に、再び興國の元氣を振ひつゝあることなどを考へ、尙更にこの史上の物變き旋律には、少なくとも賢后ルイゼの至純の心臓の鼓動が今尙之に和してゐるのではないかと考へたのでした。獨逸が誤つたクルートルの誇負に、世界の怨恨を招いて敗られ、遂にその昔我が子ツイルヘルム一世が、戴冠の盛儀を行ふた敵國ウエルサイユの鏡の間に於て、今は屈辱の條約文にサインせしめられた時、地下のルイゼの悲痛の情はどうであつたか。そ

うして今の獨逸は、再び興隆の氣運に趨きつゝあるに對して、けなげなるルイゼの衷情は又果してどうであらうかなどと、私も御多分に漏れず、感慨轉た無量であつたのでした。斯くして國には必ず氣がある、而して時窮するも、この氣は賢人に依りて滅びないと思ひつゝ、去りがてにも、この意義の甚だ深き靈堂を出でたのでしたが、時恰かも、清冷な林間よりマンドリンの曲調の、如何にも悲哀なのが、しきるもまたたゆみ、たゆむもまたしきるといつたやうに流れ来るのを聞いて、私は我れ知らずその方に歩を運んだのでしたが、とある樹陰の小花園のベンチに、班白の老翁が腰打ち掛けて居り、その側にこの翁の愛嬢とも見えし齡十七八才の、窈窕たる少女が今しもそのマンドリンの彈奏に至妙の境に入つて居るといつたや

◆本町風聞記

漢江漁郎

○ツイこの頃の話―本町五丁目難波酒造場に、一人の老人が來て、『福迎』を五升注文する。  
○全く初めての客人なので、主人も出て來て、だん／＼その人の話を聞くと  
○『拙者は、これまで、七人の女房を迎へ、七人の女房を離別した。元來酒飲みであるが、これまでに用ひた酒は、皆正宗といふものである。ソコで、よく考へると、正宗は、切れるものである。イヤ御主人！さう笑つては困る。ソコで、拙者これある鼓／＼と悟り、

【二四】

うなのを見たのでした。花園には紅白の薔薇がかり、葵なども咲きみだれて居つて、こゝに全く云ひ知れぬ情趣をも味ふたので、私はしばし歩を止めて、この曲調の清き流れに聞きとれてゐたのでしたが、やがてそこを去つたあとにも、このマンドリンの妙韻は、林間曲長くして、なほも絶え／＼に聞こゆるのでした。斯くして此の私の所感が非常に多かつたので、宿に歸るや否や、ルイゼ王后の臥像の紫色の繪葉書に、マンドリンの事なども添へて、此の日見聞したことを細々と書き入れ、之を在京の女の子に送つたのでしたが、數日後、倫敦への返信に西洋史で丁度ルイゼ王后のことを教へられて居つたので、あの繪葉書は、二三の親しい友だちにも、見せましたと、書いてあつたのでした。

今度八人目を迎へたを導機として全く宗旨を改め、爾今『福迎』を用ひやうと思ふ。何分御懇親に願ふ』  
○それが、全く思ひ入つた話なので、主人公も聊か動かされ、別に瓶入『福迎』一升を、その人に贈つた。と、その人恐縮して『ヤ、これは／＼、御主人公！どういふ譯で御座る？』、ソコで難波さん『イヤ、別に譯といふほどでもないが、今度の八人目は、どうぞ一升（一生）切れないさならぬやうにといふ寸志で御座る』  
○その人トント飛び上つて『エライ……その一言拙者悉く氣に入り申したぞ』  
○老人、大和町に住んでゐる。

其處に朝鮮人が居る

臺である。動もすれば日本人は何々とか朝鮮人は何々とか、相互に其短所缺點を諷き出す弊がある。

に於て、今は屈辱の條約文にサインせしめられた時、地下のルイゼの悲痛の情はどうであつたか。そ

正宗は、切れるものである。イヤ御主人！さう笑つては困る。ソコで、拙者これある哉〜と悟り、

ライ……その一言拙者悉く氣に入ら申したぞ』  
〔老人、大和町に住んでゐる。〕

# 其處に朝鮮人が居る

方 台 榮

(朝鮮書籍印刷會社)

客月下旬、新義州まで所用があつて往つた。少しばかり閑ができたので、五龍背温泉に行つて、旅塵を洗ふべく出發した。

尋ねた。

當夜は附近に將校の演習があつて旅館が其宿舎にあてられ、室がないので通り一べんの客である余は、離れの保養館に收容される事になつた。

この老婢は余が朝鮮人である事を氣付かぬらしく、色を改めて『旦那！そいらに、朝鮮人が澤山あります。盗られてはいけませんから私が預りませう』

が、保養館とは名ばかり、長い廊下つづきの、その廊下に添つてくぎられた薄汚い室であつた。

『何、朝鮮人がゐるから危険だつて……』

一晩望代金五十圓也、保養館と申すより不景氣時代に相應した緊縮館であつた。望代の手前もあるから不平もいへないが、炊事場を通り女中部屋の前を抜けて湯に通はなければならぬのは閉口したその上泊り客の九割九分までは病人で皆青い顔をしてゐる妙くも保養を要する部類に屬してゐる。元氣激減たる余も旅館の御都合で忽ちに其御仲間入をさせられなければならない。これには全く悲觀した。

と訊く、老婢は『エ、朝鮮人はとかく手癖が悪う御座います……』

然し、安東縣に歸るには、もはや汽車もなし、いくら腕いても駄目だ。まして旅館は一軒しかないのだから餘儀なく辛抱せざるを得ない。

この一言聞き捨てにならぬ。余は頗る不快を感じた。だが、物のわからぬ老婢を叱責して見ても致し方がない。ともかく風呂に行く事とした。

觀念のほぞを固めて一浴して來る事にした。この室の受持らしい老女中に——女中といふより皺苦茶の婆さんに——持つてゐるものをそのままそこに置いていいかと

さて、つくづく考へて見るに、吾が白衣の同胞は盗心を有するものがそんなに多いか。

無智低級のお婢の專斷を意に介する譯ではないが無關心ではゐられない言葉だ。現に兒童教育に携はる普通學校の先生達の口からもしばしば聞かされる言葉である。

心理學者の言によれば好奇心の旺盛な兒童時代には盜癖があり易いと聞いてゐる。或時期の自分等の経験に徴してもそれは言ひ得るのだ。まして自然のまま、ありのままである兒童に於いてをやである。各學校の先生が輕々しく朝鮮人兒童にのみ盜癖があるやうに斷ずるのは當を得た話ではない。

吾が半島は内鮮人共同の生活舞臺である。動もすれば日本人は何々とか朝鮮人は何々とか、相互に其短所缺點を諷き出す弊がある。これは相互の遠い將來を思ふ時にその圓滿な發展を遂げる大いなる障礙となる。

折角旅塵を洗ふべき計畫も、こんな不快な出來事の爲めに、却つて心を暗うしてしまつた。

## ◆學界風聞記

それかし

○大學の安倍能成先生は、敢て美男子といふ譯でもなく、また好男子といふ譯でもないが、ドユカ哲人的な、高遠な、深味のあるいゝ相貌をしてゐられる。

○これは、中年の、多少書物を讀んだ女性達にはよく判つて『あたし……あゝいふのがピツタリ趣味に合ふのよ。アラ、オホツ』

○ところで、いつであつたか、川上喜久子さんが、ニヤ／＼笑ひながら、『先生！先生は東京にゐられた時分、女子英學塾などでもお講義なさいましたでせう。少しその時分のローマンスでも御聞かせなさいまし……』、ズバツとやつて見た。

○と、阿倍先生满面困惑の色、『それは、實に困りましたネー。どういふワケか、以前から私共のところへ來る人達は、妙に女性で女性味を持たない人ばかりでしてネー。皆様に何の御報告も出來ないのは、實に慚愧の至りに堪へません……』

○喜久子さんたまり兼ねて『アラ……まア先生！』

# 新聞界展望

野崎 眞三

(朝鮮新聞社)

【二六】

ては寧ろ舊型に屬するので此際の際の勇退は寧ろ横瀬君の爲に慶賀したい。奈良新社長は釜日の社會部長から支配人迄勤め上げた人なので同紙も近く釜山進出其他に濟々として躍進の跡を示すに違いない。

## 開城新聞

久しく井上君に委任して極東時報と改稱してゐた岡本君の開城新聞も開城が府制施行となつたので近々井上君から返して貰ひ岡本君が歸り咲いて開城新聞の昔に戻るゝと云ふ噂がある。之も無理ならぬ噂で或は急轉直下的に實現するかも知れぬ。其他朝鮮日報の社長異動等々、昨多から今春へかけての半島新聞界は展望すべき珍風景が多かつた。一九三二年の新聞界は今やグロの時代を迎へたのであるまい。

## 日々買収

京日を退社した齊藤君が經濟雜誌を出すに云ふ噂を耳にしてゐた矢先。鮫島君の退社、鳥栖、山岸濱村等々の諸君の連袂退社、然かも京城日日を譲受け朝鮮日日と改題し大々的に朝鮮の新聞界に雄飛すると云ふ噂に展開し、二箇月近い憂鬱な月日が流れたが、之も圓滿に解決し十八日から所謂新幹部の手に移り鮫島社長以下の新陣容で京城日々新聞が新装を整へて来た。更に近く改題と共に花々しいスタートを切る相で同紙の洋々たる前途を祝福する。

此の二箇月間、京城日々を纏る所謂流言蜚語、誣言臆測の類は實に物凄いほどで新聞界を賑はせたが、何にしても朝鮮としては未曾有の風景だったので我々の視聽を集めたのも無理からぬ事である。我々圏外から遠く望んでゐるものために中心の誰かが真相を發表して呉れたらと希つてゐる。兎もこれ此風景は種々な意味で我々新聞人に尊い教訓を與へて呉れた。失業した前幹部以下の人達に心から同情を表す。

## 大陸通信

三十四年前漢城の風雲急な當時の菊池謙謙氏は新聞人として、ななく志士政客として名があつた、その菊池老が主宰經營する大陸通

信が突如として菊池社長を追出し北川君が中心となり井上君を新社長に迎へたと聲明はしたが依然菊池君は社長で北川君は叛逆者と對抗し目下大陸通信は二人の社長が居る。昭和の聖代ながら誠に奇怪極まる沙汰である。然かも此渦中には京城では聲望のある山口太兵衛、大村百藏等の諸老も介する相で、我々は平素其人格を仰いで来ただけ、如何なる理由にもしろ、有識具能の老人達が大陸通信を圍んで醜い争を續けてゐることは誠に苦々しい沙汰だと思ふ。

## 南鮮日報

河谷靜雄君から譲受けた横瀬君は南鮮日報に籠つて茲四五年健康を揮つてゐたが、最近愈々經營を知らぬ新聞人の放漫から經營難に陥り二萬數千圓とかで元釜山日報の奈良君に譲渡し横瀬君は郷里長崎縣に引込む相である。酒徒としての横瀬君は眞に愛すべき人間で私も十年以上の昵懇を續けてゐるが横瀬君の如きは結局新聞人の舊型だ。株大の筆を揮つて一世を指導すると云つた型は新聞社長とし

## 聲の印刷機

漢江漁郎

○東京の京華中學の一生徒——今年十八になる青年が、世界を驚倒するやうな大發明をした。  
○それは、『聲の印刷機』——機械の前に立つて、聲を出すと、スル／＼と廻轉して、立派な印刷の出来る機械である。  
○全國の新聞は、争うてこれを報導した。  
○ところで、この青年は、權藤平三といひ、朝鮮新聞副社長權藤氏の令甥に當る。  
○密かに資を給して、これを助けつゝあつた權藤氏、流石に喜悅禁せず、『ヤ、これも皆様のお蔭で……』

# 彼のオフィス

鑛業會で働いてゐる彼が文章や和歌を通して理解し得るが如く



の菊池謙譚氏は新聞人として有名な志士政客として令名があつた、その菊池老が主宰經營する大陸通

が横瀨君の如きは結局新聞人の舊型だ。株大の筆を揮つて一世を指導すると云つた型は新聞社長とし

けつゝあつた權藤氏、流石に喜悅禁せず、「ヤ、これも皆様のお蔭で……」

# 彼のオフィス

新田唯一

(大阪朝日新聞社)

× 京城俱樂部を少し下つた所に南大門通の方から見ると恰も道を塞いだやうに聳え立つた教會堂がある、その塙き過ぎの煉瓦がいかにも印象を強めて目を射る。

その前に古風な朝鮮式の低い門が『朝鮮鑛業會』といふ不釣り合ひに大きい横額をのぞかせてゐる。一門をくゞると彫刻された石の羊が二つ並んで居り、風化しかけた一大石炭塊が置いてある。

× 建物に恐らくは京城初期の洋風建築の好標本とでもいつた平家の煉瓦建であるが、薄汚くしてお世辭にも立派なオフィスですネとは申上げ兼ねるしるゝものだ。

× バルコニーといつても辭書の中でバルコニーといふ文字が泣き出しさうな、所々が禿になつてゐるバルコニーの片隅に、小さな鑛石が轉がつてゐるのも氣になる。

× ドアを開けると部屋の中央には玉突臺があり、正面には相撲の奉納額を型とした鮮内の鑛産額を掲げてゐる。

横綱 雲山バーネス

大關 三成崔昌學

といつた風に一目して鑛業界の趨勢を知るに足る様な統計を示してユーモラスな味ひを出してゐるのが鑛業のものだけに注意を惹く。

× 應接室、圖書室、談話室、等々

こまかく室を別けてはゐるが、平素は餘り使用されるらしい形跡もないけれども、應接室だけは時々理事會位を開いて『朝鮮の鑛業を振興せしむる方策如何』てなことを協議する模様である。尤も近頃では實際に即した産金増加案について頻りに額を集めて練りに練つてゐるといふことだ。

× 標本棚も幾つかあつて各道から出たいろ／＼の鑛石もあり一寸した研究資料にはならうが、未だ纏つたものとはいへない。鑛業會では大体に於て營業津にある燃料選鑛研究所や中央試験所と連絡を密にして營業者のために最も眞面目な顧問となつてゐる。執務してゐる室はゴチャ／＼と狭苦しい程に机やら書類やらが置かれてある。

× そこは主として會誌の編輯をする所らしい。

× その室で近代式の禪僧とでもいふべき風格の持主である徳野眞士氏が物靜かに椅子によつてゐる。彼は雜筆誌上に毎號の如くに文章を寄せ和歌をものしてゐる人であり、雜筆社社長本木正氏と無二の親友であると同時に筆者とも親しい彼である。雜筆の寄稿家の多くは彼を知つてゐるではあらうが、事務室に於ける彼には暗いであらうから、此一文を提供した所以である。

× 鑛業會で働いてゐる彼が文章や和歌を通して理解し得るが如く冷靜な公平な脱俗した彼であることは——言葉は妥當でないかも知れぬが——一つの奇蹟であるといつてもよいと信ずる私である。口の悪い私が彼を罵倒しても、彼は別に怒るでもなく、悠揚としてその事柄を、即詠して私に示しながら微笑する彼である。

## ◇お相撲物語

北漢山人

○總督府の種積さんのお宅は、お子さんは、殆んど御男子ばかり……。

○殊に御長男は、もうたしか中學の、三年か、四年に御在學……。○ソコへ持つて来て、御主人があゝ見えて、大のお相撲好きとあるので、毎日夕食後一家お揃ひの時間となると、實にお賑やかなものださうだ。

○先づ一番お小さいのが、いきなりお父様の首ツ玉に噛ちりついで、エイ／＼と引き倒さうとなさるのを手始めに、上へ／＼と、順々に、お父様に向つて行かれる。

○もう中學三四年となると、それへ稽古をつけるのは、容易でない。どうかすると、アヘコベにお父様が、ズドンと板の間へ叩きつけられる。スルト御令息一同無上のお喜び、『ヤ、お梅も、お竹も、スグお出で……』

○そして御令息達の結論、『ネお父様……あなたは、要するに一箇の理論家です……』



# 朱乙温泉の一夜

小田 省 吾

(城大法文學部)

【二八】

私は曾て黄海道の白川温泉について書いたことがあるから、又一つ温泉について書いて見よう。

「昨冬閑を得て豫てから行つて見たいと思つて居た威鏡北道鏡城郡の朱乙温泉に一浴することが出来た。此の温泉は鏡城の南西約三里朱乙温川の沿岸に迫つて錐峰の麓に位置して居る。今は鏡城からも威鏡線の朱乙驛からも、自動車の便があり、何れも約三十分位で容易に達することが出来るが誠に幽静な一佳處である。其の温泉は清澄豊富にして温度も相當に高く申

分がないようである。旅館も相當に立派なものがあるには驚いた。

古書には此の郡に温泉が四箇所擧げられてあるが、朱乙温泉は『郡の西四十里錐峰下に在り』とあるのがそれであらう。然し昔は此處は温泉としてよりも關防として大切な箇所であつた。即ち鏡城郡の西部には半島の脊梁山脈が連亘し、明川から輪城に至る間には海岸と山手とに脊梁山脈に並行して二條の道路が南北に縦貫し、脊梁山脈が山脈が日本海に注ぐ數多の河川をば直角に横切るのである。

此の山手の道路が重なる河川を横切る所には必ず城堡が設けられてあつた。森々波、實化、甫老知、朱乙温、吾村、魚遊瀨等がそれであつて、此處は此の關所の一なる朱乙温堡の設けられてあつた所である。古書には『石築城周一千六十八尺、高七尺、土兵一百八十名』とあり、其の長には兵馬萬戸の軍官一員を置くところある。又其の西峰並に南峰には烽火臺が設けられてあつた。私か此の温泉に立寄つたのは眞に一夜であるから詳しく其の地を探検する暇がなかつたが旅館の二階から展望すると、河を隔て、向ふに石築城址らしいものゝ存在するのを見受けた。多分之が朱乙温堡の址ではなからうかと考へる。日程の都合上實地の調査を再遊の時に残して辭し歸つたのは聊か心残りである。

## 叱るな

城戸幡太郎

親の利己主義から子供をやたらに叱るのは考へ物である。神經質なヒステリックな子供はその爲めに自分は劣等なものだと思ふやうになつて、段々縮んでしまふのである。

例へば學校の成績にしても、いつでも『お前は算術が出来ないぢやないか』と叱りつゞけると、子供は段々自分は到底算術は出来ないものだと思ひ込んで了つて、そ

れが原因となつます。算術が出来なくなり、その結果として學校へ行くのがいやになり、先生もいやになり、凡てに對して興味を失ふから、凡てに於て低脳だと云はれるやうになつて了ふものである。實際は低脳でもないのに、劣等感情から、さういふ風になつて了ふのである。

かういふ子供はその原因を除いて、段々感情を矯止して行けば、例へば算術が出来なかつたものでも、それに興味を持つて出来るやうになつて来るのである。

さういふ子供に算術をやらせれば無論出来ないものもあるが、しかしまた出来るものもあるから、出来た場合に、『君は出来ない事はな

いぢやないか。その通り算術は出来るぢやないか、出来ないのは先生の云ふことを聞いて居なかつたから出来ないのだ。君は出来るのだから、先生の云ふ事を能く聞いて居るのですよ』と云ふ風に段々指導して行けば、自分は始めから算術は出来ないのだと思つてゐた運命的の考へが次第になくなり、遂には普通の子供と同じやうな成績にもなつて来るものである。

性質によつて、抑へられると、却つて反抗心を起す子があるが、さう云ふのは叱つて抑へても差向へはない。しかし神經質な子供は餘り抑へると、劣等感情を起して縮んで了ふから、のび／＼育てなければならぬ。

# 斷然老人を尊敬せよ

其美人の保姆と云ふのが少々氣がかりだ』

『其の心配は無用である、善良

供は段々自分は到底算術は出来な  
いものだと思ひ込んで了つて、そ

しまた出来るのもあるから、出来  
た場合に、「君は出来ない事はな

縮んで了ふから、のびく育てな  
ければならない。

# 断然老人を尊敬せよ

今 村 柄

「君ナランダ、今更に陳腐な事

を書き出すでは無いか、一體老人  
は一家に於てのみ尊むべき者  
である、敬老ナンドと是を社会的  
に擴げて尊むのは、毫も意義を  
なさぬよ、凡そ人の尊敬すべきは  
其人格に在つて、年齢とは毫も  
關係が無い、何の尊い所がある？  
安達原の婆さんや、やりて婆々や  
高師直や、三莊大夫や、關西の應  
から開放された……」

「さて、君はそふ早まるか  
ら困る、僕の謂ふ所の尊敬なるも  
のは、大分と意義が違ふ……」

「敬して遠ざけると云ふの？」  
「先づ左様なものだ、凡そ尊敬  
と云ふものは皆そふなんだが、神  
様を山のヘッペンに奉つたり、長  
官や重役の室を二階の隅に持つて  
いたり……するのは皆夫れを近  
くに置いては都合が悪いからで……」

「判つたく、大昔の部落鬭争  
時代には、老人を置いては部落の  
生存に故障するから、尊敬の最上  
の天國に、次が嵯拾山、次が隱居  
……」

「君は中々頭が善い、則ち其隱  
居の事だ、日本のやうな人が多く  
て仕事の少い國柄では、昔は隱居  
と云ふまことに善き制度があつて  
……」

「夫れを西洋かぶれをして、人  
は死ぬ迄働くものだナンテ、民法  
でも例外として隱居を僅かに認め

て……老人をノサ張らして……」

「君のよふにそふ先き廻りをし  
て、僕の言ふ事迄齟舌つては困る  
マ、靜かに聴き玉へ、凡そ新陳代  
謝のない所には、腐敗と死滅ある  
計りだ、今日の青年の活氣の無い  
のは、畢竟老人が場ヲサギを仕て  
居る爲であるのである、今の儘で  
移り行けば、日本は遂に滅亡する  
ぞよ、今が世の建直しをする時で  
あるぞよと、神様が仰つしやる」

「イヤに聲色を遣うな……乃こ  
で其具體的の案と云ふのは」  
「年齢六十歳に達した者は、  
働かねば自活の出来ぬ例外を除ひ  
て——皆公權私權を停止して、大  
平の逸民に仕上げて仕舞ふ、而し  
て老人學校と云ふものをつくり三  
ヶ年間の尊敬教育を施す」  
「面白い！」體其學校ではどん  
な事を教へるのだ」

「碁、將某、麻雀、撞球、ピン  
ボン、詩、歌、俳句、川柳、書畫  
小鳥飼養、花卉栽培、魚釣、活花  
茶の湯、音楽、謠曲、等等等、有  
りと有らゆる、餘生を安穩に樂み  
閑雅高尚なる日本老國民たるべき  
素質を養成するのである」

「夫れから、ワールド、ボノイ  
ス、カウトを作つて、眞赤な制服  
を着せて、訓練をやる、未だある  
年齢七十年に達したる者は國立老  
稱園に入れて、若い美人の保姆を  
付けて毎日愉快に遊ばして置く」  
「待つて呉れ大變な事になつた

其美人の保姆と云ふのが少々氣が  
かりだな」

「其の心配は無用である、善良  
なる無能力者計りを集めてあるか  
ら」

「でも君、年齢の割合にカクシ  
クヤたる老人が世間には随分居る  
ぞ、色氣が出ツ齒つたり、怒の皮  
が突ツ張つたりして……」

「エログロ味の勝つた、社會の  
風紀を紊る者等は、別に不良老年  
感化院と云ふのへ收容して仕舞ふ  
筈であるから毫も心配は無い、  
安心し玉へ」

「所で君自身はどふする？」

「俺ッ俺は進んで老人學校へも  
老稱園へも這入る、凡そ人は自か  
らを尊敬せずして、人から尊敬を  
受ける譯が無い、昔の人が自から  
進んで隱居したのは、自からを尊  
敬し、併せて人から尊敬を買つた  
所以であつたのだ、判つた？君」  
「少々陽氣の加減のよふだ……」

## ◆出世を祈る

三 木 一 彦

○上内警察部長は、四五年前全  
南に在動してゐた。

○京城に榮轉することになると  
部下の人達別れを惜しみ、金を出  
し合せて、立派な紀念品を贈つた

○コ、までは、例のあることだ  
が、さて上内さん京城に着くと、  
その何手といふ人達へ、禮狀と一  
緒に一人々々書物を送つて來た。  
それも大體、その人に向くやうな  
選擇までして……

○で、あつちでは、「實に例外  
的人ですよ。出世して貰ひたい  
ですナー」

# 世界最古の本

岸 謙

(京城電氣會社)

【三〇】

文藝は文字が出来たよりも前からあつたものださうであります。ダンスは文藝の始まりなんださうです。私はシェーマンの『流浪の民』と云ふ曲を聞くとき、なるほどさうだつたかも知れんナーと思ふことです。

ぶなの森のはがくれに

うたげほがひにぎはしや

たいまつあかくてらしつつ

めぐし少女舞ひ出でつ

たいまつあかく照りわたる

管絃のひびき賑はしく

つれ立ちて舞ひ遊ぶ

……

原始人は敵を屠つた勝利の祝ひに、よもすがら焚火をかこんで舞ひ躍つたものです。其のわめき聲に大したリズムのなかつた事もうなづかれます。けれども調子よく躍るには調子よくわめく方がよさうです。そこにリズムが生れ、そこに最初の『勝鬨』の歌が出来ました。労働者が力仕事をするのにも『よい』『よい』と調子をとると仕事がかどる。そこで筒井清山が野狐三次か

ヨイヤレーヤレー

江戸で高尾か小紫

ヨイヤレーヤレー

と云ふ様な蛸搦きの女達の歌が出来、

朝から晩迄レールの虫だよ

ヤントン コラセー

これは鐵道工夫の歌です、又

オイト巻いた 巻いて取るのは

本町は二丁目 絲屋の娘さん

姉が二十一 妹が二十

姉はいらぬ、妹がほし、

妹が欲しさにお伊勢に七度

熊野へ三度

村の氏神 コイツは日參

オイト 巻け巻け

と云ふのが大きな木材を高い所へ上げる歌です。彼等は之を歌つて労働の苦痛を忘れ鼻歌のユーマーに浮世を茶化すだけのしやれ氣もあるのです。

それはさておき、焚火をかこんだ原始人のダンスは過日大正館に上映された『インガキ』でアフリカのコンゴ自由國の奥地の土人のダンスを見たときよくも今日あの様な風俗が残つてゐて呉れたものだと感謝したくなつた位です。ほんとうにプリミチブなダンスでありました。

この様なダンスで歌われた歌は口づてに幾世紀も後迄傳へられたことせう。歌の数が多くなるに連れ何等かの符號を以て物に刻して残したいと云ふ欲望も起り象形文字が出来たことも想像に難くないのであります。堅い岩に刻みつけて置けば比較的永久にこれを残すことも出来ます。古代は皆これをやつたらしいのであります。それから粘土板にもきざみつけたものであります。これは支那にもあ

ります。サー、ヘンリー、レーヤードはチャルデアで粘土の本を發見したさうであります。これは大英博物館にあるさうでありましてその本は大洪水のことを説明したもので紀元前四千年頃の作ですから恐らく現在残つてゐる世界最古の本かも知れません。チャルデア王が戦争に行くときは、必ず王室直屬の歴史家がこれに従軍して、征服した國の數と敵軍を殺した人數や損害高、我軍の死傷、其他勇敢なる行動ありし將卒に關する録事等を書き残したものであります。またチャルデアの僧侶は同じく王室直屬で、宗教文學をもやつてゐたさうであります。その外、この時代の粘土の本には農業の事や、占星學、政治外交の本もあるさうでこれはニネベのセネキエリブと云ふアツシリヤ研究家の文庫から發見されたのです。セネキエリブは紀元前七百年頃の人です。

次に古い本はエジプトのものでこれはパピラス(紙の古語)に書いてあり、今日分つてゐる最も古いものは彼の大ピラミッドの築かれた當時出来た『死に就て』と題するものらしく、その寫しはやはり大英博物館にあるさうであります。

これらは外國人の説なれば、彼等のあまり詳しくない印度や支那にも、もつと古い本があつたかも知れません。

細井肇氏主宰

月刊「人の噂」

(二冊定價五十錢)

來、  
朝から晩迄レールの虫だよ  
ヤントン コラセー

をやつたらしいのであります。それから粘土板にもきざみつけたものであります。これは支那にもあ

(一冊定價五十錢)

# 品川雜記

中島 司

(中央朝鮮協會)

## 微苦笑

朝鮮方面から上京する多數の人々の中には、チオイマ々々獵奇心の強い人もあつて、此の丸ビルにこそ居れ一向に世間知らずの私を捉えて、『何處ぞ面白い變つた所はないか』と御下問あらせられること一再ならず、その度毎に何と御返辭致してよいやら、少からずまごつかせられる。

『何處ぞ面白い變つた所』とはつまりエロのパアセンテーチの多分な所といふ意味であらう。淺見寡聞な小生にはエロ氣分の多い所といふと、カフェかダンスホールか淺草のカジノフオリーズ式の所位しか思ひ出せない。なるほど銀座たありのカフェやパアに行くところが所謂エロの典型かとも思はれるが、併し女共の風姿態度は格別感心するほどのエロ味もなく、寧ろグロの方が勝つてゐるやうに感じられて、大した興味もそゝられぬ。ダンスホールだつてさうだ人形町や溜池などへ行つて見ても餘り感心した風姿も見當らないしカジノフオリーズにしたところ、別段濃厚なエロ氣分に酔ふこともない。一體自分といふ人間かものは現代人でなくなつて居るせいもあらうが、併し又考へて見るとエロといふことは必ずしも露骨でなくてはならぬとか濃厚でなくてはならぬといふものではあるまい。

見る眼にケバケバしい俗悪な感じを興へるものは、寧ろグロの部に屬するのではないか、と思ふ。

理屈は理屈としておいて、朝鮮から見える方々の中には随分はしつこい人もあるのに時々度膽を抜かれる。艶聞、珍聞、奇聞、エログロとりませのゴシツプはいろいろ私の手もとに持ち合せて居るけれど、但だ花の開落を見て人の是非を言はずといふのを自分のモツトとして行きたいので、我れと我が胸底深く藏して自から微苦笑の種にするに止めてゐる。或る男が野中の石地蔵に向つて『地蔵さん地蔵さん、あなたは今此處で私のしたことを見て居なすつたが、どうぞひとに言はないで下さいよ』と頼んだ。此男は追刺ぎか人殺しをやつたのだ。するとお地蔵さんの仰しやるには、『わしが何で言ふものか、お前こそしやべるまいぞ』と。私も地蔵さんと同じく東京へ来てエロ氣分を満喫した人達の珍談は敢て吹聴しないつもりだが、追々御當人達自身の口から洩れるであらうことを豫想して實はニヤリニヤリのていである。

## 氣の毒な首相

此の五月にやつと満三歳になる四男坊が、新聞の寫眞や漫畫ですつかり濱口首相の顔を覚えてしまつて、どんな肖像やカリケチュアを見て『ハマゲチヤンがあつ

た』と言はないことはないほど、我が濱口さんは三歳の兒童にさへ其の偉大な存在を印象つけて居られるのだ。

その率ゆる民政黨が絶對多數黨であらうともあるまいとも、濱口さんは何と云つても立派な政治家であり、ポリチシャンではなくてステーツマンであることを否定はできないであらう。私は民政黨のいきでもない又政友會反對でもない純眞の日本國民であるが、今日多數の政治家を見渡した所で、本當に自分の心から尊敬に堪えないといふ人は幾らも居ないやうな氣がする。もとより程度問題であつて、それぞれ個人的に見て立派な人はいくらかもあるが、政治家として國家社會民衆のたよりになる豪い人といふものは案外少ないやうである。濱口さんの如きは欠點も短所もあるかは知らないが、政黨のリーダーとして一國の宰相として、何となく鈍重味があり、慎重で正直で公平で、頼りになる人として、今日の時世には珍重すべき人であらうと思はれる。或は少々其人を高く買ひ過ぎると言はれるかも知れないが、如何に割引きしても此の人が個人的にも政治的にも絶對に悪い事をしない人であることは、躊躇なく正札を付けることができる。今の政界にはスマートな人が多過ぎるから、寧ろ鈍重な正直な人を歓迎したい。才智や機略も政治家には必要かも知れぬが、それにも増して正義觀念が緊要だ。正義に強い人であることが今日の日本の政治家に何より大切な資格条件でなければならぬ。兇徒の彈丸に重大な創傷を負うて、危く生命を取り留めた濱口さんが、此の頃は議會出席の準備と



して演壇の昇降の練習を官邸でやつて居るといふ新聞の記事を見て何とも言ひ知れぬ氣の毒な感じに私は打たれた。瀧口首相の登壇は首相のためにも邦家のためにも望ましい事であるが、若しそれが登壇のための登壇であつたとしたら實に瀧口さんのために氣の毒に堪えない。それは人間の虐待だ。何とかもう少し此人を大切に保護して、其の健康の本復を待つて、徐ろに未長く國事に盡瘁させるやうな方法はないものか。此の人のやうな政治家は大いに珍重して大事にしたいものだ。武士は相ひ見互ひといふこともある。本来ならばこれから二三ヶ月位は伊豆あたり温泉へでも行つて、みつちり養生させねばならぬ人を、無理に引つ張り出して、難題を吹きかけねば納まらぬやうなハメにしたのは誰れの責任かは、知らないが、瀧口さんが議會に出る以上は、當人として素より非常の決心と覺悟の

◆財界ノート

それかし

○この間東京支店長に榮轉された山口銀行の田口さんは、自ら公然『愛妻家』を以つて標榜して居られた。

○御出發の十日ほど前にも『十年間の京城生活は、いかがでした？』と訊くと、『大變氣持がようござんした。それに第一、家内が京城に満足してゐましてネ。これまで、何處へ轉任しても、キツト不満が出たんですが——そのために、いつもハラ／＼させられたんですが、京城だけは、全く氣に入

石油私考

小林久平

石油はどうして出来たといふ事については、いろいろの説があるが私はかういふ風に考へてよいと思ふ。

海に、兎に角魚が澤山居つた、古く／＼昔の事であるが、その當時には非常に海底の火山が多かつたので、魚が浮いて居る所へ海底の火山が噴火する。さらすると一度に魚が死んでしまふ、魚の骨も蛋白質などもめちやく／＼になつて

しまふが、魚の脂肪だけは軽いからどこまでも海上に浮く、その海上へ浮いた脂肪だけが、風に流されて海岸に漂ひ着く。

この場合にまた噴火山が爆發して灰などが降つて、陸地がそれに蔽はれる。その降つた灰はいはゆる酸性白土のやうな物やその他いろいろの物になつて居るのであるが、その物が絶えず岸に寄せて来る波の爲にさらはれていつて、その中の酸性白土のやうな物だけが浮いて、魚の脂肪でべ／＼になり、他の粗い物は下へ沈む。その中に陸地が下り海岸線の方が上つて浮いて居た魚の脂肪でべ／＼になつた酸性白土のやうな物が陸

つてゐたやうです。従つて私も、この生活は、實に眼合がありましたよ。恐らく一生の思ひ出になりませう——」

○だん／＼承つてみると、田口さんの京城愛は、究極のところ、奥縁愛に還元して行くんです。いさ、かたぢ／＼……。尤もあの人のお話だけに、チツトも嫌味はない。

○心ひそかに、このよき銀行家の、未來の御多祥を祈つたことであつた。



地の上へかぶつて層をつくる。

かういふ事がしばしば繰り返されたものと思はれるのであつて、さういふ層の上へまた他の玄武岩とかその他いろいろの岩石などの風化したのが段々重なり、酸性白土の層から、乾餾された脂肪が、それらの上の層にも含まれる事になる。かういふ風に石油は太古の魚油から出来たものと思はれるのである。

石油はすべて海岸の灘になつて居る所に、海岸線に沿つて黒色頁岩といふ黒い岩層の上にあつて、その黒色頁岩の下には酸性白土の層があるが、この層の順序から考へて、私は石油の成因をかくの如くに考へるのである。



度に魚が死んでしまふ。魚の骨も  
蛋白質などもめちやくになつて

て浮いて居た魚の脂肪でペトペト  
になつた酸性白土のやうな物が陸

へて、私は石油の成因をかくの如  
くに考へるのである。

うなぎ蒲焼  
お座敷金婦羅

川  
長

旭町一丁目

最先端を行く  
明るく静かな  
カフエー

**アルプス**

京城本町二丁目  
(山本旅館前)

外科 皮膚科

**瀬戸 醫院**

院長 瀬戸 潔

京城旭町二ノ八  
電話本局二四九八番

茶いろいろ  
茶器いろいろ

**青々園茶舗**

京城本町二丁目  
(電話本局二二二番)

お二人で一つの保険に  
はいれる際も保険料は二人保険  
普通の一人分餘ですむ

**東洋生命京城支店**

一萬圓契約で八千五百  
圓の現金定期配當の外 不老保険  
に普通配當がつきます

M式巻上り覆  
ホロ形日覆  
各種テント  
諸車用雨覆  
非常用袋  
非帆布製品  
其他帆布製品  
製作販賣

京城西  
前 驛 中  
會商 トンテ  
八四八二本電

京城永樂町二

酒井婦人病院

院長 酒井一郎

(電話本局一八番)

金物類

近藤商店

京城本町三ノ三三

電話本局三六二番

内・科  
小兒科

占部醫院

院長 占部寛海

京城黃金町三丁目

(電話本局三四六四番)

京城本町二丁目

一番瀨醫院

院長 一番瀨慶次郎

(電話本局四〇五番)

明治町二ノ七五

利根川齒科

院長 利根川清治郎

(電話本局二八六七番)

# 冥土よりの忠告

古賀國太郎

(東 大 門 署)

【三六】  
ならむことを切に希望致し候。

一、香奠に就て  
往時は冥土への旅費として三文を要したる趣なるも現今は必ずしも之を必要と致さず候、従つて香奠は相互扶助的意味を含ましむる必要ある場合は格別然らざる限り極めて親交ある人々の誠心を表現せらるゝ程度にて十分に有之候處 娑婆の實状は可なり正反對の擧に出でらるゝ者多きはげんに堪へざる所に御座候。

以上は冥土に於ける輿論の大要にして若し幸に容れられ候は、所謂『死に金』なる準備の苦勞も必要なきに至るべく又元費の節約は勿論亡者を利用して行はるゝ諸弊も一掃せられ裨益する所多大なるもの有之べく確信致し候。

孰れ委細は盆會御面晤の節に譲り先は不取敢安着御挨拶芳々概要申述度如斯御座候 亡言多謝

### ◆つわさ雑記

三木 一 意

○總督府農林課の大園技師は、鹿兒島出身だだけた、大々的の南洲崇拜者で、いつもクリ／＼の坊主頭……そして「ヤッ／＼の木綿の紺紺を一着に及び、『どうも當節の青年は、儒弱で成ツちよらん』」  
○大園さんのお宅へ行つて見ると、右の南洲を始め、世界の有名な偉人傑士の寫眞を、ツラツと掲げてあつて、書架には同じく英雄傳・烈士傳がギッシリ。  
○それだけに、御子息達、そろひも揃つて成績がよく、いづれも京中で首席を占めてゐらるゝと、はお目出たい。

するものの如く考ふる結果は本人の迷惑難避は毫も之を顧みざるが如き没識者も往々有之様被存、冥土在住者間に於ても不平の聲耳に致し候間今後には本人の意思を尊重せられ希望する場合の外は玄關先又は病室外に容態書を貼付して病狀を告知し名刺の授受位にて濟す様希望するものに御座候。

一、見舞品に就て

心からなる御見舞品は其の種類如何に拘らず感謝に堪へず候も何等か爲にせむとする底意ある御見舞品は本人に取り一種の債務を負はしめられたるが如き感致し安心して鹿島立もなし難く迷惑なるものに御座候、又一方不心得の家族中には見舞品を枕頭に山積し社交の廣汎なることを誇示し一面見舞客をして之が贈呈慾望の具に供するが如き言語同断の者も皆無にもあらず如斯陋習は是非共改むる必要有之べく候。

一、葬儀に就て

冥土への鹿島立最後の永訣に際しては格別縁も因りも深からぬ導師の而かも不可解なる引導は俗人の思はるゝ程有難き感致さず寧ろ親戚知己より寄せらるゝ惜別の情冥福祈念の心が何より嬉しく喜ばしきものに御座候、従つて義理一片の會葬や臂を回けたる花輪や知名紳士の名を連れたる廣告等には何等の關心も持つものに御座なく要は重より質、華麗なるより森嚴

拜啓

娑婆は不相變不景氣風吹きまくり居る由、御一同定めし御難澁の御事と遙かに御同情申上候、降而小生儀御永訣以來以御陰道中恙なく冥土へ到着極めて安樂なる生活相營み居候間乍憚御安慮被下度候 陳者小生娑婆在生中は一方ならぬ御高配を忝ふし殊に辭世前後は格外の御懇情に預り恐縮至極に奉存候、就ては切角の御芳情に對し或は不平釜敷き申分にて失禮とは存じ候へ共既に當時より娑婆にては生活改善の聲相當高かりしやに承知致居り、且は何人も免れ難き人生の一大行事として最苦痛視する事案なる辭世前後の慣習改善に關し経験者たる小生が腹藏なき意見を開陳するは強ち無駄事にもあらざるべく寧ろ義務かと思考致され候へば禿筆を呵し氣付の儘申述候間御參考被下度候。

一、見舞に就て

冥土へ鹿島立つ日の未だ確定致さざる頃の御訪問は歡迎仕候へ共恣々日取も略確定し出發準備に肉體も精神も共に多忙を極め疲勞と苦悶とに悩まされつゝある場合御面會を求めらるる事は迷惑至極に御座候。然るに俗界にては面會謝絶の場合も尙且直接面接せざれば何となく病者に對する親切心十分發露せられざるもの如く誤信致し居り家族共も亦見舞客の多寡を以て平素社交の廣狹を世間に曝露

ふるむ

たかつたに違ひなからうに、母はそれについてはまた一言も口になかつた。

# ふるさと

奥 永 政 輝

(朝鮮運送會社)

愛護せられざるもの如く誤信致し居り家族共も亦見舞客の多寡を以て平素社交の廣狹を世間に懸露

名紳士の名を運ねたる廣背等には何等の關心も持つものに御座なく要は重より質、華麗なるより森嚴

るひも揃つて成績がよく、いつれも京甲で首席を占めてゐる」とは、お目出たい。

頼山陽のあの麗筆によつて始めて天下に知られた耶馬溪。

日本の溪谷の美を語る前に、先づ耶馬の景を見よとまでに、最近天下に、否世界的に推賞せられてゐる耶馬溪、その耶馬の近郷なる故郷に久し振りに歸る。

靜かな、そして生々とした山、森。清らかな川の流れ。昔のまゝの善屋根の質朴な人々。

何處を見ても、少しの虚飾もない、幼時そのまゝの風物、一つとしてなつかしさの増さないものはない。

こうして書き列べると、それこそ限りはない。澤山な、なつかしさが故郷には存在してゐる。

僅かな日數で、澤山な親戚と故郷とを廻らなければならぬため久潤を叙して落付いて物語りも出来なかつた。或る親戚に行つた時二時間程して次の汽車で歸ると云つたら、叔母が『もうこの次にお前の歸るまでは、自分は到底生きてもないから、今晚だけはどんなことがあつても泊つて、明日は暗い内に一番汽車で發つても不足は云はない、そうして呉れ、ば自分として何時死んでも満足だから』と涙を流して云ふので遂々一泊した。その爲め、或る特定の要件の時刻に間に合はなかつたのは遺憾であつたが、しかし老先き短い老叔母と種々な物語をして夜の更くるのを知らなかつたのは、長き思

ひ出の種子となるであらう。

十日餘の歸郷日程中、我が家に泊つたのは前後二日だつた、そんな譯で老母に充分の物語と孝養の出来なかつたのは、自分としてまことに名残り惜しい。

丁度二日目の夜であつた。『お前今度何日泊るか』と聞かれた。

『私は明日、宇佐神宮に参拜して、その晩に發ちたいと思つて居ります』

こう云つた時私付胸がつまつたその瞬間母はどんなに思つたであらう……私は心の中で母を拜み、そして詫ひた。

私のこの言葉を聞いて、母はどんなにか悲しんだらうと思つた。が母は

『お前が一日でも永く居つて呉れ、ば、それに越したことはないが、考へて見れば、それには限りないことだから、豫定の通り京城に歸りなさい。京城に行つたら、身體を大事にして暮しなさいよ』この恩愛に満ちた言葉は、私には尊く、然しまた意外でもあつた今まで心の弱い、吾子の愛に溺れる母であるとのみ思つてゐた母の心に、いつしか吾子の一時的の愛に溺れず將來に於ける吾子の事を想ふ母であつたのは嬉しかつた。そうは云ふものの、久し振りで會つた母としてあと一日一夜でも我家に泊らせ、心残りなく物語り

たかつたに違ひなからうに、母はそれについてはまた一言も口しなかつた。

久し振りに歸つて、さしたる孝養もせず、濟まないと思つたが、日程を変更することは、自分も心苦しく思つたから、その晩おそくまで母の出来るだけ満足するやうな物語をしたので、母も安心して明日の門出を祝つて呉れた。

私は今日までこの時位に母としんみりそしてさまざまの物語りをした事はなかつた

私の澤山な物語の一言半句まで母の胸に永く残つて、そして母を慰める源泉となることだらう。

今年九十一才になる伯父が私の出發の時四斗樽から酒を酌み出し門出を祝ふ慰斗くんぶ。の辭で乾盃して呉れた、長壽者であるだけ尙更嬉しかつた。

宇佐神宮の参拜も濟み、豫定通り歸途についた。靜かな森、清らかな小川、質朴な人々、等々。ふるさは、なつかしい。

**信託預金**

上以半一 儲蓄 上以百〇一

強屋一分八年 率儲蓄五

信託証券債券・信託管理業務



# 物々思ひやう

安藤 啓助

(大日本麥酒出張所)

『物は思ひ様』く、なんでも可なり古い言葉であつて、何事も新しく申上げる迄も無い事であるが、自分は『物は思ひ様』と云ふ事と所謂職業の貴賤の差(之は自分とは否定)と現在の差(之は自分び附けて聊か自分の爲めに居る事を申述べて見度い)と思ひ様と云ふ事は思ひ様を思ふ事と云ふ事にあてはめて見ると、思ひ様が未明に新聞を家庭に送る所、新聞屋、若し彼等が自分の爲めに居る爲め働くんと思ふ事と自分の配る一枚一枚の新聞を自分の爲めに居る人が智識を増すかを思ふ事ならば、彼等の足どりは、思ひ様と云ふ事は智識配給者である事と云ふ事と、其の仕事も非常な事になつて来る。此外牛乳屋、酒屋、炭取入夫にしても自分は、自分の爲にやつてるんだ、何、云はうと自分は完全に、自分の爲に働いて居るんだと思ふ事、世に働かぬも出て愉快である事、即ち労働の快樂化である事、思ひ様は、思ひまゐりかと思つて、思ひ様は一寸横道に反れるが、思ひ様は、思ひ様に事をなした事、思ひ様に愉快である。之は眞正なる思ひ様である。つて世間がやれよ、思ひ様としたか悪い奴だと云ふのは、思ひ様の事であると思ひ様は、思ひ様の前に申した意義ある事、思ひ様の幸福足とが兩々相補は、思ひ様に幸福

なる人であつて何も巨萬の富を作る事も必要でなく、高位高官に達する事のみが幸福でも無からうと思つて居る。却つて互萬の富、高位高官を得ても心に雲があつたらそれは眞の幸福でないと思つて居る。さて本道に戻つて最近一般の傾向を見ると専門學校・大學を出た、どこか官廳か銀行か會社か大商店で無いと就職に二の足を踏む。恐らく本人もそうであらうし父兄も左様考へて居る事と思ふ。一般實

業界が經費節約の一路を辿る折柄淘汰こそすれなかつた新しい人を採用しない、自然の結果として就職競争は益々異常を呈して行く事と思はれる。若しそれ職業を解する氣持を改め有意義に心の平和を得て場合によつては米屋、木炭屋、新聞配達、でもなして生存して行く丈の元氣があつたら、もう少し就職と云ふ事は緩和されはしないかと思つて居る。折角専門學校、大學を出たのに何も米屋をしながらも木炭屋をしながらも云はれるかも知れないが、そんな事を云つて居つたんではいつまでたつても果てしない、何も専門教育を受けてそれが米屋にすぐ役立たなくとも差支へないでは無いか。學問は人間を鍛へるものである事を申上げ此稿を終り度い。

## ◆府尹學の話

漢 江 漁 郎

○近ごろの話である。公用で京城へやつて来た大島平壤府尹と、前田群山府尹とが、安藤京城府尹を官舎に訪ひ、變にニヤク笑つてゐる。

○『氣味が悪いネ。御兩君どういふ譯だ?』と訊くと、『何、外ぢやアない。あんたは今度始めて府尹になつた。まあ一年生ぢや。よつて我々兩君……エツヘン……一ツ府尹學を、傳授しやうと思つて来た。』

○安藤府尹、親友の親切に感泣した。と同時に、田舎の人の、線の太いのおどろいた。

○『ヤ、大きく来たのう。』

シ、そんな譯なら府尹學を御指圖にあつからう。ぢやが、御兩君は久し振京城へ来て、三越を見たかネ。丁子屋をのぞいたかネ。それア君素破らしいもんだぞ。何、まだ見ないツて……ぢやア君等はいよ、田舎者だネ。肥料臭い府尹學一折角だが、教へてもらつても、この京城ぢやア何んにもなるまい。アーン御兩君!』

○平壤と群山……顔見合せて、『ダーツ……』

峰岸清之氏主宰

## 拓務評論

一部定價五十錢

金 塚 の 記

は約一百十七億圓なるが、其四分の三は米國と佛國に偏在し、普

申した意義ある仕事と此良心の満足とが兩々相備はる人は實に幸福

線の太いにおどろいた——  
○「ヤー、大きく来たのう。ヨ

# 金鑛のぞ記

## 廣江澤次郎

(大和町三丁目)

三月二日京城出發、友人方應誤君の經營する平北朔州郡外南面清溪洞なる橋洞金鑛を視察す。

橋洞金山事務所は山奥に稀なる立派な建築にして、私は同事務所

に二泊し、十分視察を遂げたる上南倉、龜城を得て、金山の自動車に定州驛迄二十里を送り出され、

七日午後九時發南行列車に投じた孟中里驛迄來りし時、哀愁喪服の西洋婦人を中心し西洋人及内鮮人が二十人程乗込みしが、之れは

過日逝去の大輪洞鑛山株式會社支配人ウキルコック氏の靈柩を護り墓地仁川港に送らんとする一行なりき。内外人間に最も評判よかりし英國紳士が海山萬里を距つる異郷の空にて黃泉の客となる……私は謹んで哀悼の意を表したり。

數日間自動車を飛ばすか、鑛山を跋渉するか、兎に角活動續きの私は寢臺一番に漢くり込むなり早や華奢の仙境に遊びたりき。

然るに平壤驛にて俄然十數名の男女混合西洋人寢臺車に雪崩れ込み、喧噪を極め、私共の平和の夢は全く破られ迷惑至極なりき。此の狼籍西洋人は専務車掌や附添日本人の注意も聞かばこそ、騒ぎ廻り一淑女は私の寢臺のカーテンを開き覗き込みて

『茲には誰が居るのか?』と云へり、實に無禮千萬な西洋婦人もあつたものだと思はれたり。

約半時間騒ぎ抜き、彼等は食堂

車に雪崩れ込めり。寢臺の下段に居たる私共は皆起き上り、不平滿々たり。不平組の一人に元稷山金鑛株式會社の技師たりしワールス君居たり。奇遇を喜ぶと共に私は英語で訊ねたり。

『ワールス君! この團體かね?、眞夜中に大騒ぎして僕等を起して仕舞つた。或淑女は僕のカーテンを開き、茲には誰が居るのかと怒鳴つたヨ。無教育な不都合な連中だネ』

ワールス君はウキルコック未亡人其他三四人の西洋人と鳩首何か憤慨に堪えぬ顔付でヒソヒソ話をなし居しが、私に答えて曰く

『彼等は米國から來て平壤で大工場を建築しつゝあるコインブ

ロタグト會社の奴等サ。柳屋ホテルで晝間から酒を呑み續けあの通りの喧噪振りだ。何でも一人米國に歸るので其の送別の爲らしいが丸きり苦力だヨ。狂人だヨ。此の列車にはウキルコック氏の靈柩や之れを送る悲しみの極の一行と醉態亂舞の一行が乗り合せた譯サ……』

ワールス君は同じ米國人でありながら肩を聳かして苦笑せり。

基督教國、禁酒國民たる米國人の正體暴露の如く感ぜられ不愉快限りなかりき。彼等は正義人道と世界平和を高唱し乍ら其の實弗で世界を統制せんとしつゝあり。世界各國の中央銀行と政府保有の金

は約二百十七億圓なるが、其四分の三は米國と佛國に偏在し、普遍的流通性を欲し、現在の殺人的不景氣招來の最大原因をなし居れり。

復興に悩む歐羅巴は、昨年七月一日迄に米國に對し戦時債權中二十三億九千萬弗を泣き々々支拂ひしが、猶且つ戦時債權殘額は百十六億四千萬弗の巨額に達し居れり深刻なる不景氣打開の一手段として之れ等は須らく棒引きにすべしなど、昂奮して眠られぬまゝに飛んだ處へ當りは行けり。

併し米國は物質的には實に天恵比類稀なる國なり。世界の正貨二百十七億圓の三割八分五厘、即ち八十四億圓は米國の保有する處であり、年々の産金も約九千萬圓に達す。教育の足らざる米國民がヤ、ともすれば暴君的態度にて人もなげなる振舞をなすも或程度迄無理からぬ事?

佛國は三十九億八千萬圓の正貨を保有し、猶且つ月々正貨の流入一億圓に垂んとし、却て困り居ると云ふ夢の如き贅澤な話なるが、

驕りて日本はドウ乎、世界の正貨二百十七億圓中、タツタ八億二千萬圓に過ぎず。又昨年の内地、朝鮮、臺灣の金銀輸出入統計に依れば二億八千八百萬圓の出超である

輸出 三億千五百萬圓  
輸入 二千五百萬圓

金銀出超 二億八千八百萬圓  
國家財政の將來寒心に堪えざるものあり。

轉じて日本の金銀産出は左の如き幼稚なる状態なり。

内地 二千萬圓  
朝鮮 八百萬圓  
臺灣 二百萬圓

世界産金の王座を占むる英領南阿

【三九】

トランスパールの四億三千萬圓、加奈陀の八千萬圓等、垂涎覬覦の感あり。金の年産額八億圓、銀の年産額三億圓、合計年々十一億圓の産額に對し世界五大強國の日本が僅々三千萬圓内外とは残念至極なり。

消費の節約、國産奨励も勿論結構なるが、産金奨励は刻下の最大急務なり。

朝鮮の如き到る處金銀に富む半島にては積極的産金奨励法を設けば一ヶ年三千萬圓位は易々たるものなりと斯道の權威橫堀工學博士も稱へ居らるゝ由。

朝鮮年々の生産額申鐵産額の位置を見んか

- 農産高 九億二千百萬圓
- 工産高 三億二千七百萬圓
- 畜産高 二億六百萬圓
- 水産高 一億二千三百万圓
- 林産高 七千四百萬圓
- 鐵産高 二千六百萬圓
- 合計 十六億六千萬圓

右は昭和四年の統計なるが、流石に農業國であり、又當局の積極的産米増殖計劃は徹底し九億圓に達し居れり。昨年の米産額は千九百十八萬三千石と云ふ空前の増收、而も母國亦未曾有の増收にて六千六百八十八萬石の産米高を報じ、茲許朝鮮の産米奨励も飽和點に達せし感あり。然るに鐵産は全体にて二千六百萬圓に過ぎず、此の内の金の産額は一昨年五百八十四萬圓昨年は六百五十萬圓に過ぎず。年五十萬圓以上産金の鐵山は米人の經營する雲山、佛人の經營する昌城、三井の經營する三成、方應讓君が獨力經營する橋洞、野口遵君一派の經營する光陽、降つて英人の經營する遂安則ち笏洞鐵山位なり。

### 彌生會句集 (第八回)

|                 |       |
|-----------------|-------|
| 船からの投げ縄や風光る     | 山本 姚黃 |
| 光風や足の跡ある畝頭ら     | 安達 綠童 |
| 風光る蓬萊橋を驛        | 北川 左人 |
| 裸婦の像置かれし床やヒヤシンス | 鈴木日想子 |
| 校庭のカチの巢高きボボラかな  | 大藤 渡天 |
| 本棚に素麩の鉢やヒヤシンス   | 吉利 陽村 |
| 野遊びの果てたる舟を出しにけり | 本田 白露 |
| 野遊びや松のかなたに浪の音   | 入澤 禾生 |
| 巢つくるや終日カチの啼きつれて | 西尾 無水 |
| かさゝきの古巢結ぶ大釋     | 福島 尙古 |
| 野遊や掃けるかある松の丘    | 河村 素庵 |
| 温泉の次ぎの洋間やヒヤシンス  | 古賀 鷗人 |
| かちの巢や此ボボラより練兵場  | 山内 九華 |

### 人口無駄話

それかし

東洋一と稱さるゝ雲山金礦は流石に一ヶ年二萬百萬圓の産金あり。目下三千尺の奥底迄坑道は掘進され益々盛んなり。佛人經營の昌城金礦は年産百五十萬圓に達し雲山金礦と双璧の觀をなせり。英人經營の遂安は五十萬圓弱になり、三井の三成鐵山は八十萬圓、野口の光陽金礦は五十萬圓に達す。

私の今回視察せし方君經營の橋洞金山は昨年六十萬圓産金し、目下製鍊所の擴張工事に晝夜多忙を極め居るが、四月末完成せば五月よりの産金は更に激増す可し。兎に角「金」の時代は來たやうだ。朝鮮は東洋の黄金郷だ。官民共に努力を要する。

○國勢調査の結果によると、我國の總人口は九千三十九萬五千四十二人とある。今この全國民が手をつなぐとすれば、人と人との間を平均四尺と假定して、二萬七千八百九十九里二十五町二間四尺となり、赤道の延長を一萬二百三千里とすれば、地球を二巻き半以上になる。

○又、この全國民を集めて、一人一坪宛の四角な場所立たせるとしたら、四里半四方の基盤(九四四七八四〇坪)の上に、一人残らず乗つても、尙四百萬人分の空席が残るといふから、これ亦意外である。

代をつとめてみた。

その頃武田氏の宿將馬場美濃守

石田三成は、徳川氏と一戦を思

の經營する途安即ち勿洞鑛山位なり。

共に努力を要する。

空席が残るといふから、これ亦意外である。

## ひとり言

### 永樂町人

その頃信長は、旗を京師に進め四方の經略に、餘念なかつた。家康は、はるく東海道をのぼつて、彼の起居を問ふたのであつた。

と、一鷹の挨拶が済むと、信長は、傍の一人人を指しながら、『徳川殿には、この老漢を御存知あるな……』

と訊いた。家康が『いや、まだ……』と答へると、信長は、得意になつて、『この老人は、打ち見たところ、頗る好々爺でござるが、これで中々腹は黒い男で御座る。この男は、普通の人間の、得せざることを、三つまで仕おうせ候。第一は、足利將軍を弑し奉りたる事なり。第二は、主人三好義隆を攻め殺したる事なり。第三は、京都の大佛殿に、白晝火を懸けたる事なり。姓名を松永久秀と申す。この信長とて、實は、いつ變首を搔かれむも知れず。あぶない男で御座る……』、いひ終つて信長は例の大口開いて、大笑した。

家康は、返事に困つた。久秀は、面を伏せて、流石に大汗撒いて、閉息した。後日、明智光秀信長を叛殺すとの報に接するや、家康は嘆息して『さては、右府公(信長)の舌その首を掻き切つたと見ゆる——』

○ 武田氏滅亡して後、鳥居彦右衛門元忠は、命を奉じて、甲州の郡

代をつとめてゐた。

その頃武田氏の宿將馬場美濃守氏房の娘は、國色無双といふ評判があつた。

好色漢の家康が、これを脱さう筈はない。早速人を遣つて、その娘を、探し出すやう命令した。

だが、鳥居は幾度催促されても『ハハッ、その儀せいゝ勉強仕るべく……』とのみで、少しも埒はあかない。

その中斯ういふ評判が立つた。『鳥居のやつめ、娘を差し出さない筈さ。また娘の行衛の判らう筈もないさ。彼は、ちやんと自分で妾にして、郡代屋敷に圍つてゐるんだもの——』

○ 臣下の一二は、これを家康に告げた。

と、流石の彼もボカンとして、『何、鳥居が……さては、ぬからぬ奴ぢやのう……』

戦争を商賣の世の中であつた。大名も、臣下も、女を得て、産ますことを、最上の目的と考へてゐた。

○ 小牧の戦の折、瀧川一益の旗下が、尾州壺江に潜入したといふ諜報があつた。

家康は、即刻打ち立たむとして祐筆尊通に、軍令を書くべく命じた。

と、尊通は、筆を揮うて、『御出馬可被成者也』と書いた。

家康は、顔をしかめて、『コレ尊通……その可の一字をのけよ。この場の心は、蹠を得て、時をハズさず打ち立たむの意なり。文技の作法に拘泥しては、武將の呼吸は出ぬものぞ』

○ ぢいさん時々、塗法もなき『よきこと』を、喝破したのである。

○ 石田三成は、徳川氏と一戦を思ひ立ちたる日、大谷吉隆を訪ふて同意を懇請した。

○ スルト吉隆は、『貴下と交遊二十一年、聊かその爲人を知つてゐるつもりである。貴下は、智慮人に過ぐ。しかし恨むらくは、勇足らず。今度の企謀も、いかゞやと思ひ案ぜらるゝなり。しかし我れもとより一命を惜むものにあらず。既に大事を打ち明けられたる上は我れいかで身命を君に捧げまつらざらむ……』

二人は、互に手をとりにて、感極まつて落涙した。

○ 日本の歴史に、臣節的の死は多い。しかし友誼的の死は少い。この一處の、人を動かす所以であらう。

○ 秀吉名古屋に陣の頃、一日陣中を見廻ると、小屋のおもてに『おぼろ月夜』と題する額を掲げてゐるものがある。

『コレ、此處は、誰の小屋ぢやナ』と、聲を懸けると、野間藤六なるもの、にぢり出で、『ハハッ、やつがれめ的小屋で御座ります』

○ 秀吉本營に歸ると、間もなく、白米と疊とを、藤六が許に届けさせた。

『おぼろ月夜』とは、新古今の照りもせず曇りも果ぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき私のことには、數物がない』といふのである。

○ 秀吉にしては出来過ぎたと思ふが、しかし彼の傍には、始終細川幽齋がついてゐた。

○ それにしても、無名之雜卒藤六が斯ういふ味をやるのが面白い。【四一】



# 車窓

(承前)

## 長谷井市松

(朝鮮銀行)

【四二】

がある寺がある、又林がある。満目の風景は林の黒と、野路の黄と折々田畑の間に一脈の青が流れて居るばかりです。

十時半神戸を出ました、此邊り多少の雨があつたものか、大地が濕つて黒く見られます。併し灰黒色の空の一隅に雲が切れて、今太陽が和やかな十二月末の午前の、燦々たる光を投げかけて居ます。

幾十ともなく浮んで居ます。遠く汽船が黒煙を曳ひて居ます、水と空と、天空一色です。

私の行手に幸あれと祈るものゝ如くに——けれども地平線に沿ふて諸土色の雲の一團が、丁度一昨夜吳服襟際の、鐵道省を一番めにした時の様に、焰のやうな色を見せて居ます。何れは雨になるものと思はれます。雨よふれ！車中の私を煩すものはない。明日の朝は朝鮮の土を踏むであらう。ソコには『著けは朝鮮空晴れて』、文字通りの好天を見るであらうから——

須磨、舞子の白砂青松と、明石の海と、而して淡路の島山と——斯うした光景を耽着しつゝ、様々な自由な冥想に耽り得る現在の私を幸福だと思ひます。私は斯うした一人旅の気安さを必々味ひ得ることを感謝致します。唯今下關の友に宛て、『今夜九時つきすぐ舟のる』と一電を發しました。歸りには是非知らせてくれと、云つてよこした親友Sに、無斷で海を渡るることの、不信を痛感致しましたから——、あと五分で十一時です。

寒景蕭殺又荒涼、十たび家郷を過ぎて哀感多し。現在の私の感想は正に斯の如くであります(午前十一時廿分をね附近にて)

いつしか雲に蔽ひかぶさつた、摩耶六甲の山々を送つて、私は一路西へ西へと移つて参ります。此邊空と山々とのたゞすまいが、好箇の油繪の材料であると私は思ひました。

神戸以西、姫路岡山に至る迄の間は、多く風物を見るべきものがあります。唯平遠な畑と畠との間に、所々森があり、或はそれが開けて白亜鮮明な村落が點在し、或は廣茫たる刈田の跡を 群鴉が飛び廻つて居るのが、如何にも蕭條たる冬景を思はしむる位のもです。空は相も變らず灰色の、濕めつぽい、くすんだ、陰鬱な而して或る不愉快な天候を續けて居ます。一ヶ月前に通つた時は、まだ收穫前であつた稻も、凡て刈り盡されて稻塚が、ソコにもソコにも立ち並んで居ます。折々農家の背戸のあたりから、蓬々と青い煙が立ち上つて居ます。森があれば社

今向ひの山々に日が照り渡つて参りました。併しその南方の山々は依然として曇つたまゝです。私は心淋しいうちに何とも云えぬ悠々たる旅心地を、一人で味ひ得ることに無限の興味を感じて居ます。何と云つても今次の旅は私にとつて、幸福な旅であり得ることを感じ致します。慾には心の合つた友達が一人二人あつたらとも思はぬでもないが、ソレは畢竟ムダです。東京驛から私の隣席に居た二十五六の婦人と、其愛兒(五つばかりの女兒)とが今此姫路で下車致します。出發以來小鳥の様な聲で、さまざまなか愛らしい物語を聞かせてくれた此の小さき天使の上に幾久しき神の榮光あれかしと、私は心からそう祈らずには居られませんでした。(十一時廿五分姫路著)

先づきの大旦那——いやことによると株屋のご主人位かも知れませんが——は、不相關細のまゝで、奥さんと二人で新聞に目を通して居られます。而して時折何かお話しになります。従者がコップに水をさゝぎ上げて這入つて参ります。

鐵路に沿ふて左に海が見え初めました。須磨です、舞子です。曇つては居れど、靜かな海に漁船が

の疾驅にも、十字路に手を振る交通警官の姿にも。凜々しい新興の

七洋



ました、須臾です、舞子です。曇  
つては居れど、静かな海に漁船が

戸のあたりから、蓬々と青い煙が  
立ち上つて居ます。森があれば社

られませんでした。(十一時廿五  
分姫路著)

# 北鮮とところく

山田新一

(洋 畫 家)

の疾驅にも、十字路に手を振る交  
通警官の姿にも、凛々しい新興の  
明るさが充ちてゐる。

縣龍山附近は朝鮮に稀なと云ひ  
度い、豊かな風景であつた。

楽しんで數枚のスケッチをした

## 1、元山

北鮮の港の街、

松樹の蔭の海水浴、

朝鮮に来て既に八年、いつから  
ともなく、憧憬がれてゐた、海邊  
の町へ、これは又冬まだ去りやら  
ぬ早春に來たのである。

街の背の山上高く立てられてあ  
る、戦役紀念碑のみが、冬の朝陽  
に眩しく照り返つてゐる。

要塞地帯と云ふので寫生も出來  
ず。

其夜、感興へ發つた。

## 2、夜の混合列車

元山から咸興へ、三時四十六分  
の急行に乗りはくれたので、宿の  
主人や、佐藤京日支局長等の、し  
きりに一泊をすゝめるのを振切つ  
て、其夜七時の混合列車に投じて  
しました。

勿論覺悟はしてゐた、其爲めに  
列車中で讀むべく、サンデー毎日  
其他二三の雜誌類を揃えもしたの  
であつたが。

然し實際は矢張り可成りの難行  
であつた。

第一、かぼそいたつた二つのラ  
ンプの光だけでは、どんなに苦心  
して見ても、此廣いボギー車の中  
で雜誌に讀み耽ることなど、思ひ

もよらない顔ひでしかなかつた。

名も知らぬ小驛に、乗る人も無  
く、汽車は幾度か停つて、義務的  
に汽笛を鳴らしてはのろくくと走  
り出すのであつた。

スプリングの無い、板の腰掛に  
幾人かの、旅馴れぬ、アボヂヤオ  
モニが、寒むさむとストローブを圍  
んでゐるばかりである。

唯一人、列車の隅の方に、高踏  
的に離れて腰掛けてゐた、邊土の  
モダンボーイが、突然覺束ないハ  
モニカを吹き鳴らし始めた。  
都では、誰しもが齒を浮かす『  
君戀し』である。

此無聊な夜汽車の中では、それ  
さへ腹立たしいことには思へなかつた。

## 3、咸興

此地の松月旅館の行きとよいた  
客扱振りには、旅馴れた自分であ  
るだけに一層嬉しいものであつた  
殊に旅に汚れ果てた、ワイシヤ  
ツヤハンカチの類が、翌日迄にす  
つかり純白に洗濯せられ、アイロ  
ンさへ掛けられてゐるなど、一寸  
地方旅館としては、垢抜けのした  
お勤め振りであつた。

是は實につまらない一旅館の事  
のやうであつて、實は、自分の心  
に、直接、新興都市咸興の清々し  
い姿を反映させてしまつた。

興南へ往復する意勢の良いバス

## 4、羅南

兵隊さんの町である。

當代の人氣者、先代小さん亡き  
跡の落語界を一人で背負つて立つ  
てゐる様な、柳家金語樓君の出世  
作『兵隊さん』を産んだ町である  
山々に圍まれて、わづかに朔北  
の風をさけてゐる此盆地の町は、  
兵營と、官舎とでのみ埋められて  
ゐる。

宿屋の朝、程近い兵營から聞え  
る勇ましい喇叭の音に夢を破られ  
夜は異動期の、轉出入青年將校  
等が、割れるやうな地聲でする、  
高話に睨く迄寝つかれない。

## 5、朱乙

羅南から、古めかしいフォード  
の乗合に、オムニ達と一緒に詰め  
込められて、山峽つたひに峠を越  
す時、

夕陽に照らされて遠ざかり行く  
羅南の街々を見下ろせば、

誰でもが、一寸ばかりセンチメ  
ンダルにさせられるであらう。

ホロ馬車に揺られて故郷を離れ  
た日を憶ふであらう。

旅から旅、牧水じやないが、よ  
くも今迄『淋しさの果てなわ國』  
を旅渡つた自分ではある。

山間の川沿ひに行く、朱乙温泉  
の夕景は、到底、箱根、鹽原に比  
すべくは無いとは云ふもの、北國

の温泉湧らしい旅情には充分喜ま  
れてある。

鮮仙閣に泊つて、透明な湯質と  
混々として盡きざる豊富な湯量と  
を満喫した。

又吉井勇であつたならば必ずと  
もに、鴨河のせうらぎとまがふで  
あらう、川瀬を枕に眠ることには  
またなき詩情をそゝられる。

### 清津

北へ、北へと、地圖の上の方の

それこそ北の端の港へ来てしまつ  
た。

港の真中に、白い水蒸氣を吐い  
ては鳴る、汽船の笛も、其儘浦鹽  
迄響くのではないかしら。

露西亞臭い建築物のほとりを歩  
いたり、眠つてゐるやうな起重機  
のものうい姿を眺めてゐる裡に、  
旅の疲れが、何處からともなく、  
總身にしのびよつてゐるのを覺え  
た。

## 病中小語

西山 幸男

(京城齒科醫專)

人を感動させるのは、そこに表  
はれた、行爲の形式ではなくして  
その後ろに隠された人格の反映で  
ある。

○ 本當の偉人、或は大人物と呼ば  
るべき人は、決してその人が大勢  
力家であると云ふばかりでなく、  
或は又驚ろくべき才能の所有者で  
あると云ふばかりでなくして、必  
ず美しい犠牲的精神の所有者で  
なければならぬ、と私はおもふ。

○ 十人の友人をもつよりも、一人  
の親友を持つた方がどんなに幸福  
かも知れぬ、と同時に十人の友人  
を作ることは出来ても只一人の親  
友をさへつくり得ない人はどんな  
に不幸かも知れぬ。

凡てが、自力の世の中だ、限ら  
れたる人々との交渉を除いたなら  
ば、同情も、愛惜も、信義も、要  
するに一つの妥協であり、ゴマカ  
シであるとは云ひ得ないだらうか

### 米と酒の話

それかし

○我國では酒のために、年々五  
百萬石内外の米が潰される。之を  
四斗俵にして一千二百五十萬俵、  
貨物自動車一臺に二十俵積むとし  
て、六十二萬五千臺を要し、自動  
車の長さと間隔を合せ三間として  
八百六十八里二町となり、下關か  
ら青森までより長い。

○そのお蔭で、酒造税は二億三  
千餘萬圓、全租稅收入の四分の一  
とは豪勢なものである。

○昭和二年十月から、三年九月  
に至る大藏省の課稅査定高は、清  
酒四百五十二萬石、濁酒、白酒二  
萬石、味淋十萬石、焼酎五十一萬  
石合計五百十五萬石とあるから、  
ひつくるめて一日に一萬三千餘石  
今、假りに毎週一回日曜日を禁酒  
日としたら、年に六十七萬石の節  
約が出来る。

○一體白米一石から得られる酒  
量は、清酒は約一石五斗、濁酒一  
石三斗五升、白酒、味淋六斗三升  
見當といはれるから、禁酒日に節  
約し得る六十七萬石を全部清酒と  
して換算すれば、搦減を一割一分  
と見て約五十萬石の玄米が浮んで  
来る。これだけあれば一人一年一  
石平均として十萬人の失業者を一  
ヶ年食はせることが出来る。

## 輸入したき事

(承前)

然が野に撒いた草花のやうなもの  
でもあらうか。

友をさへつくり得ない人ほとん  
に不幸かも知れぬ。

殊に遊境の境台に於て然りであ  
る。

来る。これだけあれば一人一年  
石平均として十萬人の失業者を一  
ヶ年食はせることが出来る。

# 輸入したき事

(承朗)

兼安麟太郎

(京城高商)

然が野に撒いた草花のやうなもの  
でもあらうか。  
若し人が此の草花に埋もれて、  
ながく又みじかきその生活をば終  
止し得とするならば、陽の光は一  
層今より美しくしいのではあるまい  
か。東洋人、とくに日本人に於て  
わたしはこの事を思ふ。

## 公園の椅子

歐洲の人々がいかに陽の光をた  
のしむかといふ事は、やがて彼等  
がいかに公園を利用するかといふ  
事である。マロニエの花咲き、ロ  
シニヨールの唄に夢破らるゝ朝、  
マロニエの實落ちエイフェルの尖  
塔に月影淡い夕、人は公園に行き  
人は公園より歸る。若しその公園  
がボアであるならば、君、エトラ  
ンヂエーよ、ブラス、ミュエツト  
か、ポート、マイヨーか、或はボ  
アのアプリューにたち給へ。人は  
それによつて現在の巴里が抱く凡  
ての人間をば發見するであらう。

夜間どう始末するのでせう」と尋  
ねる人ありとせば、その人の國で  
は到底かゝる公共的施設は不可能  
の三字に抹殺さるべきであらう。

## 愛嬌

何かの講談本に、女は愛嬌男は  
度胸とあつた。ところで、度胸と  
云ふ段になると、その存在形體  
が甚だ際躡たるせいか、人は空疎  
とも思はれ勝の武勇傳數頁を談る  
に止る。反對に、愛嬌に就ては口  
耳よく之になれる。

この愛嬌が、それこそ洪水の様  
に流れて居る都市、それは巴里で  
ある。人はその顔面筋肉の微妙な  
る動作に、その肩のあげ具合、手  
の開き具合、さては腰の或は足の  
無關心なる運動、更には洗練され  
たるならかな言葉のあやに、そ  
れは恰もピノオの香水にも似たる  
愛嬌の放射を感じしめる。  
人は巴里人に對し不誠實を責め  
る傾向があるかも知れぬ。だが幸  
にも私はかゝる氣持を経験する不  
愉快をもたなかつた。

愛嬌が稍もすると不誠實と隣合  
せになる事はあり得やう。だがそ  
れは、往々にして學者が悪魔と同  
居すると一般ではあるまいか。學  
者必ずしも悪魔でないが如く、愛  
嬌必ずしも不誠實ではあるまい。  
愛嬌がその相手方を安易なる氣持  
に於て、無條件に愉快ならしむる  
ものであるならば、それは恰も自

京城でも内地でも、わたしはカ  
フェーに行くのを余り好まぬ。そ  
してそれは、單にカフェーやテエ  
が不味いためばかりではない。之  
等の場所に漂ふて居る氣分が、何  
かしらわたしのそれに適はぬらし  
いからである。それは恐らく、所  
謂アルトラ、モダンであり能は  
ぬわたしだからかも知れぬ。

巴里ではカフェーに行かなかつ  
た日としては殆どなかつた。わたし  
は現在でも、あの街のカフェーを  
此上なくなつかしむ。勿論カフェ  
ーが美味いためばかりではない。  
恐くは彼地のカフェーが、日本の  
それのやうな、ウルトラ、モダー  
ンの氣分を欲いで居るせいかも知  
れぬ。

わたしは、カフェーやリキエー  
ルを飲む爲め、お菓子を食べる爲  
めと云ふ意識のもとに、カフェー  
に行くを好まぬ。むしろ、かるい  
疲勞を散する程度の心構で、ぶら  
りとはいりぶらりと出る。それで  
自分の氣持に對し何等の負擔も感  
ぜぬ、さういふ風のカフェーであ  
つて欲しいのである。

一法五十仙のカフェーと三十仙のブリーシュを命じると、禿頭に丁寧な櫛をいれた、總理大臣以上の風貌の持主なる給仕が、愛嬌百パーセントの給仕振を示すばかりでなく、言へば便箋紙も状袋もくれるし、好めばいろいろな娯樂道具もあり新聞も持参する。假睡しやうと、呆乎してそこらの別嬪娘や黒坊紳士を眺めて居やうと、或は又無限に湧き出づる様な奏樂に聞きいらうと、三十分居やうが十時間で退却しやうが、一切が自由であり無關心である。若しそれチツンの如きに至つては、かりに一法八十仙の飲食とすれば十八仙即ち邦貨一錢四厘が建前である。この場合建前通りに在いても五錢をいでも十錢をいでも、例の總理大臣の禿頭給仕君は、頓と金額の相違を發見せぬ愛嬌振り、有難うござい、の聲も頗る晴朗である。わたしはこの、こだらわぬ、暢達な自由な、無統制の統制といった風なカンエーをば、此上なく好む。

飲食をなすべき一切の人々が、各々自分に許されたる場所としての安易さを以て出入りし得る時、始めてカフェーがその眞價を發揮し得るのではあるまいか。わたしはカフェーがその内容を整へつゝ、饅頭屋や蕎麥屋と一般になる日を待たう。

◆焼場のぞ

漢江漁郎

○最近の或る日曜日に、安藤府尹は、大浦眞道師と散歩かた／＼府管機場を視に行つた。

○それは、義州街道のズーツと先きの方にあつて、一境幽寂——しかし建築といひ、設備といひ、實に立派なものであつた。

○大浦師などは、『ハテサテ……こんな理想郷なら、拙者一日も早くまらう人として、送り込まれたいもんぢや……』

○同じ死體を焼くにも、一等、二等、三等の階級別がある。御兩所『ハハーン、いよ／＼灰になるまでは、やはり現世の管轄ぢやからう……』

○ソコで、管理者に、『一體人間一人を焼くのに、實費はいくら懸る？』、管理人の曰く、『へへー、先づこのお方（大浦師）なら五十錢！、まことに申し上げ兼ねますが、府尹さんなら三圓……脂肪過多と鑑定仕りますでナ。ハイそこで、平均致しまして、人間一人先づ一圓！、さういふところで御座います。ハイ！』

○參圓と五十錢と互に顔見合せで、『ナント……ツケ／＼とよく物を申し居るのう』

婆心一片

浦田多喜人

(三巴酒造合名)

朝鮮各道で本年度は窮民救濟事業の名目で、或る費額を豫算に計上したが、其中で面白いのは砂防工事とサポタージュで砂防工事は廣漠たる山腹に草の根を植付ける工事であるが、之れに要する人夫は出勤さへすれば何十錢かの賃金を貰へるので仕事の出来榮えは問題にあらず、一日ブラ／＼やつて居ればいゝのである。故にサポタージュと砂防工事語呂の相通する點實に面白し。

救済とはならぬのである。東京でも失業救済として工事を施工する事になりしに元高等官とか判任官とかいふてネキタイでも付けて出て来る人夫があり働かなくても一日居りて賃金は一人前請求して理屈丈けは一人前云ふそうな。この救済と云ふ言葉を何とか適當な文字に改正しないと國家が幾程金を出しても何等見るべき事蹟を上げ得ずして徒らに惰民を製造するに過ぎぬ事になりはしないかと、ここに砂防工事とサポタージュとを對照し一片の婆心を表明する所以である。

一 體救済と云ふ言葉が救ふとの意味であるから困るから救はれるのである働いて賃金を貰ふなら救はれるのでなくて報酬であるから

辛未漫錄(三)

勢力が養はれ、機運が動いたことはいふまでもない。鮮初の議政府、それはやがて次



# 辛未漫錄 (三)

中村 榮 孝

(朝鮮史編修會)

## 合 議 制

朝鮮の昔、合議制がよく發達してゐたことは、注意に値することである。古く新羅の國が慶州から起る頃には、部落會議があつて大事を議決することになつてゐた。これを和臼といつた事が、支那の歴史に記されてゐるが、國王の選舉もこの會議で行はれ、特定の名族の中から推戴された。これが新羅勃興の基礎を爲したのである。これが、支那の制度を輸入するに及んで、次第に廢れ、國王の世襲も起り、貴族政治の發達となつてゆく。

然しながら、合議制の名残は、常に潜在し、高麗の中期以後から重臣の合議によつて、重要國務が決せられることは珍しくないばかりでなく、初めは都兵馬使といつて、軍務を統轄する官があつたが末になると、これが都評議使司といふ官廳に改められ、大事があれは、これに屬する上級の官吏が會議し、これを合坐と名づけてゐた蒙古に服屬して以來、國事多端で而も緊急の事件が多かつたので、諸官合坐の範圍も廣められ、國王の專政制といふやうなことは、全くの外見的な制度に過ぎない情態になつた。従つて國王の廢立といふやうなことも、さまで面倒もなく遂行され勝ちになるのである。都評議使司を中心とする合坐合

議の制を、巧みに利用して、終に王位に即くに至つたのが、李朝の太祖李成桂であつた。禪讓といふ美しい形態に於いて難なく新王朝を開いたのは、合議制發達の賜である。宗王國明に、先づ成桂の即位を報じたのは、都評議使司であつた。明はこれを認めて、聲教の自由を許すといふ寛大の態度を示した。成程自身の即位裁可奏請はこれよりも約一ヶ月後れてゐるのである。

都評議使司の合坐によつて新王朝の基礎は定められて行つた。やがて高麗の舊制度を、折に觸れ、時に隨ひ、事に當つて、漸進的に改革し、新王朝を中心として、半島に於いて全く前例のない完全な統制ある一國民を形成し、一國家を結成し、一社會を生成したものは、この都評議使司の後身を爲す議政府であつた。議政府は實に六曹を統轄するもので、立法行政裁判、一に皆なその議決によつて、王はたゞこれに決裁を與へるに過ぎない。王命といへども決して專斷に出づる事は出来ない。君主專制の形態でありながら、事實は必ずしもさうではなかつた。そうして議政府に列する人々は、歷末以來東北威鏡道方面の僻地から起つた全くの新人李成桂を圍つて勢力を占めて來た所の、新興の諸氏であつた。こゝに知らず識らずの間に、革新が行はれてゆく、基本的

勢力が衰はれ、機運が動いたことはいふまでもない。

鮮初の議政府、それはやがて次の時代には、閥族專恣の機關となることは、自然の勢である。こゝに士禍が起らねばならなかつた。彼等が、舊勢力——それは主として佛手を一中心として露骨に表現せられてゐた——を打破する武器として來た儒教の挺勵は、やがて儒生の擡頭となり、儒生は新興の一勢力として、中央に逼り、相撃つて數度の士禍となつた。その結果は、議政府の如きは形式的存在に過ぎなくなり、緊急の大事は、別途の機關の解決によらねば、紛糾する時局を超越し得なくなる。こゝに南北邊境の急變——北の野人即ち女真人、南の倭人即ち日本人——の措置を動機として、朝廷の大臣合議の機關が設けられた。備邊司これである。恰も、高麗の初めの都兵馬使が都評議使司となつたやうに、主として邊境防備警衛の目的から起つた備邊司は、次第に重要國務會議の處となつてゆく。

制度の上に於ける次々の發展を見るに、いつも合議制が基調を爲してゐることは最も興味がある。この外にも、王の御前會議ともいふべき、輪對の制度、召對の法なども國初から漸次整頓せられてゐた。これらは、臺諫の論駁と相俟つて王權の發動に對して、重要な保障となり、專制の弊を防ぐことは出来るが、一面からすれば、君主專制の妙味を殺ぎ、これらと宗室外戚との關係が、紛糾するやうな場合があれば、王室は最も慘害を被らねばならない。即ち黨争が起り、老少南北の四色が分かれて相對峙するやうな場合には、黨論

の窮まるころ、ただに朝廷ばかりでなく、王室の内部にまでも及び、論争の歸結するまゝに王位の廢立さへ、容易く決行され、その間に王權の徹底に發動する機會を與へなかつた。朝鮮に於ける合議

制の流れは、その利弊得失一朝にして論じつくすことは出来ないがまた一顧を要する民族の一特質といつて差支あるまい。

(昭和六年三月十日)

# エロ、グロ、生活難

上田 巖

(日之出商業夜學校)

こんな話がある。器量も良く氣立も良く評判の娘だったが、何邊嫁入つても直ぐ離縁になつて返される。返す先方も其理由に就いては何も發表せねば、娘も黙して語らない。傍の者がいくら詮議して見ても別に情夫が有り相にもなく生理的缺陷があらうとも思はれぬもとより夜中に這ひ出して行燈の油をなめ相にも、眠り落ちた姿が蛇身になつたとも聞かぬ。遂に疑問のまゝ過ぎた最後に、或る男が器量型みでその娘の経歴を承知の上でもらつた。

婚禮の夜更け、男はソツと眠つた振りをして、花嫁の動靜をうかがつて居た。と今迄スヤ／＼と眠つて居たと見えた女が、ソツと起上つて男の寢息をうかがふ。さてはと思つて男はジツと息を殺して居る。そのまゝ女は立上つて頻に家人の氣配をうかがふ。そして拔足差足で部屋の外へ忍び出る。流石に安からぬ念ひで男は後をつけて出た。庭を出た女は深夜の路上を人目を憚り乍らコソ／＼と向ふへ行く。見え隠れについてゆく

様に吸ひ込まれる。婦人問題では満更ら噂のない住職でもなかつたまさかとは思ひ乍ら思はず胸をおどらせ乍ら男も續いて忍び込んだ。何處へ行つたかと思はれぬにして廣い寺内を見廻はすと、夜急に急いで行く。小僧達の目を避けて墓地へ迄出張つて従順な好色の餌食を舌なめずりして待つ住職の脂切つた皮膚、弛緩した顔面筋肉、若者は憤然として後に續いた。女の姿を抱く様にかき消した或る墓所の手前迄来て、ジツと薄暗い地上を見詰ると、意外、髪ふり亂して鐵を揮つて新墓の棺を發いて居る女ではないか。余りの事に呆然として佇んで居ると、アツ、未だ赤ん坊らしい者の死体を掘り出した女はニヤリと物凄くほ／＼笑むとガブリとその腕に喰ひついた。突きのめされた様になつて飛んで出た男が女を抱きとめて制するとワツと泣き伏した女の告白が、今迄たゞ幼児の死體の腕を喰ひ度い奇癡許つかりに何邊も破れた縁たつた……

其時若者の云ふ事にや、『なあ

【四八】

に、いゝよ／＼此頃不覺氣／＼で三十近い大の男でさへ親の經を囁る者が多い中に、お前が未だ浦若い身でたか／＼赤ん坊の腕位噛つたつて何んでもないよ／＼』

今から十年余りも前、旅の一夜のつれ／＼に爐邊で宿の番頭から聞いた笑話の一つである。『野ざらし』『歸り俤』等落語の畑にかうした物も随分あるが、未だ高座では聞いた事がない。初婚の夜の寢室の懸引、深夜の墓地、屍體、若者の警句……三一年の流行を誇るエロ、グロ、生活難等の尖端的テーマを取り入れてかくも心憎い迄に氣の利いた落し話がさう易く田舎者の手で作られ想にも思はれない。出所は案外アツサリしてゐるかも知れないが、筆者は未だ知らない。同好博學の士の御示教を乞ひ度い。

## ◆醫界ノート

三木 一彦

○旭町の今本病院長、マダ年が若いので、先輩やら友人から『どうだい！あんたの頭なら博士號をとるのは、譯はないと思ふが……一つ奮發せんかナ』

○院長頭を擡いで、『どういたしまして……折角だが、もうこの年になつて、鬼を殺生する氣はさ／＼……』

○ソコで先輩連『實に困つたものだ。この上は、斷然奥さんに醫告するんぢやのう』

○ところが、その奥様は、鬼どころか、のみ一つヒネる事もお嫌ひで、『あなた！地獄に落ちるやうな事は、一切おヨシ遊ばせよ』院長『さうとも／＼』

鳴聲をするので、ハブが居ると解る。トクロを巻いて居る時、民つ

を人目を憚り乍らコソ〜と向ふへ行く。見え隠れについてゆく。と、女は近くの寺の門内へ消える

奇癖許つかりに何邊も破れた縁だつたと……  
其時若者の云ふ事にや、『なあ

ひで、『あなた一地獄に落ちるやうな事は、一切おヨシ遊ばせよ』  
院長『さうとも〜』

# 蛇穴を出る

高橋 昇  
(三菱載寧鐵山)

電車の中を蛇がのたくり廻つて大騒ぎをしたといふ話がある。こんな所に居る筈が無いので、いろいろ詮議したら、乗客の一人が蛇を好きで懐に入れて居たのが俯ひ出したのだと言ふ、日向きん子女史も蛇を愛好する一人であつたと聞く。

あつたので、今尙嫌つて居るのではあるまいか、とある人は言つて居る。

こゝいふ人は先づ稀で、一般人は蛇を嫌ふ。普通吾々の目につく蛇は殆んど人間に害を及ぼさないに拘らず、一般に嫌はれるのはどうした譯か。地質の古い時代に爬虫類が地球上に跳梁して居た事がある——長さ數十尺もある大きなトカゲの様なのを今もアフリカの湿地に於て見たと、欧州のある探險家が數年前に發表した事があつた。それ等に名残を止めて居るのかも知れぬ——それから後に人類が發生した。是丈は地質學的の事實である。さうして今では人類は萬物の靈長などと言ふ位に、すべての動物を尻目にかけて居るが、

蛇の種類は實際どれ丈あるか知らぬ、害をせぬのはまだ良いが有毒のものに至つては始末が悪い。此邊ではマムシが唯一の毒蛇である。朝鮮内地至る所に居る。朝鮮では北の方に特に多い。始めて朝鮮に來た頃北鮮の山を歩き廻つたが、マムシが多いからと注意されると傍でガサツと音がすればマムシだ。一緒に歩いて居た一人が溪流で手を洗ふとしたら、足の下が妙な感じがするから見ると、マムシを踏んで居たので飛びのいたと言ふ事もあつた。

其發生當時は、大きな爬虫類が盛に活動して居たので、それ等を征服するには、長い〜長い間此爬虫類との葛藤が續いたであらうと言ふ事は想像に難く無い。即ち爬虫類は人類發達史上の大敵であり蛇も其敵の一部であつたのであるから、今でこそ爬虫類は人間に敵し難く、見付かれば如何にして逃げ様かとして居る有様であるが、人間の方では古い先祖代々の敵で

袋、紺の脚絆なども或は其豫防の爲に常用せられたのかも知れぬ。マムシに噛まれたら紺の布を煎じた汁を飲めば良いと言はれて居る位だ。

鹿兒島縣の大島から琉球邊にはハブが居る。金ハブ銀ハブと言ひ黄色のと白いのとあり、金ハブは横腹のあたりが美しい山吹色をして居る。マムシより少し大きく、毒も強烈らしい。朝早く畑などへ行くとやられる事がある。木に上つて枝から枝へと渡り歩くのに早い。人家の近くまでやつて來る事もある。木の上にも居ると、目白が見つけ澤山集つて一種異様の

南洋等熱帯地方に大きな蛇が居る。胴周り一尺五寸、二尺といふ緑日の見せ物などに折々見るやつだ。數ヶ月前も新聞に、マレー半島のある所で、大蛇と虎との格闘があり、遂に虎の勝利に歸したと書いてあつた。こんな事は吾人の目に付かぬものが澤山あるに相違無い。

全南のある島に癩病患者を收容して居る所がある。其島にはムカデが非常に多いさうだ。ムカデの毒は酸性で、是を防ぐには重曹を撒いて置くと其中に來ない。毒蛇にもさういふ簡単な豫防法は無いだらうか。

マムシもムカデも薬用になる、マムシ酒は強壯劑にムカデ油は傷藥に。又味の素には蛇が入つて居るといふ、事實かどうか知らぬ。近江邊では蛇を捕るのを職業にして居るものがあり大阪に澤山出るさうだ。朝鮮でもある種の蛇は強壯劑として食べる。年に一二回は賣りに來る。マムシも亦賣りに來る。内地でも蛇を食べる所があり矢張強壯劑を稱して居る。味は中中美味で、食べる時には蛇とは知

鳴嚙をするので、ハブが居ると解る。ドクロを巻いて居る時は眠つて居るので人に向はぬ。又走つて居る時も無難であるが、イザとなると所謂鎌首を立て、エライ勢で飛びかゝつて來る。其鎌首を見たら用心せねばならぬ。

台灣に行くとき毒蛇の種類が多い様だ。毒蛇にやられたと言つて醫師に駆け付けても、種類により手當の方法が違ふから困る。ソコでやられたら其蛇を持つて來いと言はれて居る、山を歩くを職業とするものにとつて全く台灣は厄介である。

【四九】

らず、おいしい〜と云つて居たが、後で蛇と解り、吐いてしまつたなどは、ありさうな事である。野生の動物は文明人より生活力が強いから強壯になるのであらうと思ふ。

毒蛇は頭が平たく首が細い、毒の袋の爲に頭が横にふくれて居るのでさういふ形になるのだ。其毒袋から牙を以て毒を人体に注入する。牙の構造は管状のと溝状のとある。ハブの毒は一疋から三グラム位は出るさうだ。

蛇は首の所をつかんで下げると殆んど動かぬ。犬や猫でもさうである。頭腦の直ぐ下で神経をおさえられ運動神経が働けなくなるのではあるまいか。

今年も陽春の候となつて來た。蛇が穴を出る。いやなもの一つ地表に増す譯だ。

こんな風に書いて置いた所、最近友人の南米紀行を讀んだ中に、ブラジルの蛇研究所の話がある。其概略を拜借して見る。

サンパウロの郊外ブタンタンといふ所に有名な蛇研究所がある。小濠を廻らした芝生の中に、エスキモーの氷の家を小さくした様なコンクリートのドームを作つて蛇のねぐらとしてやり、毒蛇を捕へてはソコに入れ養つて置く、毒蛇の腮をつかむと黄色の液を兩側の牙から射出する。其一滴で一人の男が死ぬ程で、乾燥すると針状の結晶になる。一度液を吐き出した

[ 190 ]

蛇は二週間位は毒を持たぬ。こゝで蛇毒の治療液を作つて各所に配布する。例の毒液を淡くして少量づつ馬に注射し一年位も續けると馬の血液中に毒に對する抵抗力が出来る。それを精製して瓶に密封する。空気に觸れると變質するから、使用する迄密封して置かねばならぬ。過量に蛇毒を注射しても又急に注射をやめても馬は死ぬ。最後に馬は矢張其毒の爲に死ぬさうだ。

こゝに吾々に最も耳新しいのはブラジルには毒蛇を喰ふ蛙及び毒のない蛇が居る事だ。又毒蜘蛛、毒蛙も居り、ブラジル旅行は容易ぢや無い様にも思はれるが、實際はさう澤山は居らぬから、安心して可なりださうだ(六、三、三)

### 草刈り

(童謡)

土生米作

(於義洞普通)

朝草刈りはつめたいな  
露にぬれ〜  
たづなとる。

お馬のしつぽあそんでる。

朝草刈りはい〜きもち  
音はしやき〜  
よくされる。

お馬のしつぽあそんでる。

朝草刈りはうれしいな  
花をほき〜  
折つてまはる。

お馬のしつぽあそんでる。

### ◆金柑帽の話

それがし

○二月の寒い夕方であつた。  
○行き交ふ男子の大方が、皆なマントを羽織つてゐるのに、その方のみは、着流しである。

○それにそのお帽子——お帽子が問題である——といふのは、普通に店員などの、頭からスツポリ被るアノ金柑帽——それを頂いて悠々とおんせいろ歩き。

○どうやらお見受けした方だとよく見ると……これは、大學の今村(豊)先生……  
○いつもながら學者といふものは……

○といふと、法文の安倍先生なども、始めてお訪ねしたものは、『あッ……』、何たる無造作なおんいでたちなのであらう。

父の出生

母をヒドク困らせてゐた時に、姉が其の湯氣の立ち昇らざるを悲し



## 父の出征

高瀬通

(總督府殖産局)

明治三十七年の三月補充兵として勳員令を受取つた父を送つてからの母は、まだ廿六才の若さであつたが、すでに三人の母親として私共兄弟三人と女中が一人の五人暮らしてあつた。而しそういう家庭の事情などは少しも記憶に残つてゐる譯ではない。當時私は四才で漸く一人遊びが出来るやうになつたばかりであつた。その年の四月慈々父が戦地に向つて東京を發つと云ふので父方の祖父に連れられて母と五人東京に最後のお別れに行つたと云ふ、その時の記憶が今にハツキリと残るのだから不思議である。上野に下車してそれから兵營に訪ねた所が早速父は何時間かの外出が許されて、二ヶ月程離れてゐた父に抱かれて町を見物したり、歌を唄つてもらつたりしたのが餘程嬉しかつたらしい。

『軍刀を土産に買つて来るぞッ』と言はれた父の言葉と、田舎に育つた私はそれまで見た事もなかつた大きなパンを買つてもらつた事それにお池にそのパンを少さくして投げてやると黒、赤のたくさん鯉が集まつて来るその嬉しさが私の記憶の中に今に残つてゐる今でも私は思出して不思議でならない。四才の私に右の三個の出来事が何故そんなに大きな嬉しさであつたかと。そのお池もパンを食べべて喜んでゐたのも淺草であつたと云ふ事を母から後になつて聞か

された事である。祖父や母は今生の生別としてどんなにこの一日を短かく而かも悲しく過こしただらうかを思ふ時に、お池の鯉にパンを投げて喜ぶ幼かつた當時の私を偲んで涙ぐむ時が屢々ある。

五月廣島を發つて金州南山と戦ひの日を重ねて行く父の苦勞など私に分らう筈がない。父のない淋しさもすぐ忘れて至極元氣に遊び廻つてゐたとの事であつた。年も改まつて三十八年となり一月の何日かになつてその元日に旅順が陥落したと云ふ知らせが役場から出征軍人の家々に使に依つて知らされて來た。その時の事が又不思議と記憶に残る。その日は朝から雪であつた、それも覺えてゐる。母は用事で近所の親しい家に行つて留守であつた。その時小使の老人が『オー坊や旅順が落ちたぞ』と聞かされて、早速『旅順が落ちたぞ』と叫び乍ら近所の家まで母に知らせに走り出したそうである。母に連れられて家に歸つて日の丸の旗をつり乍ら萬歳を叫んだその事がこれ亦よく記憶に残つてゐる。更らに忘れ難い大きな深い記憶が一つある、父の出征以來姉は父のかげ膳をそなへる事が日課の一つになつてゐた。そして父に供へた食膳から湯氣の立ち昇るは父の無事、その然らざるは凶と云ふやうに母が私共二人にいひ付けてゐたものらしい。或時私が何事か

母をヒドク困らせてゐた時に、姉が其の湯氣の立ち昇らざるを悲しんで母に告げたのを、母はお前が母の言ふことを聞きわけないからであるといつて叱つた。その時私は父の戦死を決定的に信じたものらしい。ワツと泣き出して夕食をも食はず泣きつづけた。その時の記憶が今も深刻な絶望的な記憶として残つてゐる。

だが、幸運にも父は奉天の三月十八日夜の戦闘で軽い負傷をした外全く無事で、その年の十月再び元氣な父として私共の前に歸つて呉れた。爾來二十有六年、父の屬した砲兵十三聯隊が最も苦戦したと云ふ三十七年の八月二十九日の瀋陽の激戦と、奉天に敵の主力を掃滅したといふ日と、この二日は長き回顧の話題となつて幼き日の私をどんなに感奮させたであらうだが家郷を出て二十餘年、その父の武勇談も久しく接するの折がない。

## あゝ判つた

それかし

○殖銀の野田さんのお嬢さん――春子さんは、今度好成绩で第一高女に入學されたが、その鐘路小學校を卒業した時は、全校隨一の上出来で、知事さんから道賞をもらつた。

○御郷里のお祖父様から、『春子えらいぞ』といふ電報が舞ひ込むと、當の春子さんポカンとしながら、『アイラ、電報を打つたンテ……大袈裟だわ。あゝ判つた……お祖父様昔ヨッポド出来なかつたのネー』



# 劍橋大學生の生活

(承前)

朴 錫 胤

(毎日申報社)

【五二】

日暮れからは正服正帽を着用するにあらざれば町を歩くことを許されない。正服正帽とは何か？

曰く、キャツプとガウンである。日本でも方々でこれをまねてゐる様だが、その内でも慶應などは劍橋とそっくりだ。つまり夕食後にブラ／＼町を歩かぬものならたち

まら罰金を課せられる危険に曝される譯だ。これを誰がいかにか監視するか？、これからがナンに近しい話。

學生監として正副プロクターなるものがござる。學期中毎晩各々ブルドックなる下男を二人づゝ引具して、劍橋の町中をねり歩く。プロクターは大抵若い人ではあるが長いガウン等御召しになつてゐるから、走れそうにもないし又實際走りもしない。その代りブルドックは中々鋭とい武器である、百碼十秒台の連中であるから中々走らだからウツカリ學生が逃けると大抵のものはたちまち捕まつてしまふ。

正服正帽を着用に及んでゐない學生、或は路上喫煙してゐる學生等、プロクターにつかまると懲罰等は至極簡単に進行する。ブルドックは學院の名と本人の名を聞く。プロクターはそれを手帖に記入する、それだけでサヨナラである。その翌日そのブルドックは受取りを持參して昨夕の學生をその學院に訪問する、そして金を貰へばそ

れですべてが済む。その罰金額は學生には六志六片、學位を持つてゐるものにはその倍額を課する。私などは劍橋に往つたばかりの時まだ入學前は町を歩くと時々ブルドックに誰何されたが、その後は三年間一度もこの災厄に引つかつたことはない。

さてプロクターに見つかつて逃げると何うなるか？、勿論ブルドックが全速力で追跡する、ブルはそのための存在物であるから、奇麗に逃げてしまへば何事も無い。その代りつかまると罰金をダブられる。だから危険は五十五十である。無か倍であるから足に自信のあるものは逃げるのが當然だとも云へる。こんな事件もあつた。一生懸命に逃げつゝあつた學生がバナナの皮に足をすべらして轉んでしまつたためにとう／＼ブルドックにつかまつた。然し賢明なるプロクターはバナナの皮の存在をアンフェアなりとし、ころ／＼前の同じ距離に於て再競走をやらした結果その學生は立派に逃げをうせた。これなどは所謂英國人の誇として世界中自分たちしか持つてゐるものがないやうな顔をする。英人氣質の一つのあらはれとも見るべきか？。

男女のことは實に嚴格を極める學校町にいかゞはしい女が出来ればプロクターは何時でもその女を十哩以外に追放する權利を持つて

ゐる。その上學校と警察が協力して徹底的に女の侵入を防止する。それで若し學生が女と町を歩けばプロクターはそれを誰何する權利を有し、又學生はその女を紹介する義務を負ふ。で若し調べた結果その女がプロクターを満足せしむることが出来なければその學生は直ぐ停學を喰ふ。停學とは一學期間を意味するから中々痛い。

勿論女の學生を自分の室に招待する事は何時でも出来る。但し原則としては條件付きである。それは女一人だけを招ぶ事は許されない。だから大抵は好きな女がある。と女二人と男一人を招んで三組にする。單獨戀愛から團體戀愛のシーンが展開される譯だ。こんな場合番兵にでも招はれようものならとんだ災難である。十時頃になるとその女の友達を送つて上げるべく連れ立つて歩く。前の一組は友達同志であるから至極仲のいい處を見せつけられる。後の一組はモジ／＼して歩く場合が多い。殺身成仁もかうなると仲々つらい。

英國人は人の私事は論議しないことになつてゐる。だから所謂暗黒面はそれが社會と交渉を持つに至らざる限り新聞紙上にも表はれないのを通例とする。紳士道一名偽善道を修得するを以つてその任務とする學生がこの規定の例外を爲さないのは勿論である(完)

本町二丁目

龜屋喫茶店

(電話本四二四五)

しかしそれは得られないこの叢を拒みながら

◆名譽職の話

を持参して昨夕の學生をその學院に訪問する、そして金を貰へばそ

ばプロクターは何時でもその女を十呎以外に追放する権利を持つて

# しやぼん玉

山崎俊三

(子屋)

しかしそれは得られない  
この叢を拒みながら  
強いて眸を向けてゐる……

## ◆名譽職の話

北 漢 山人

せめて小さい白い花でもいゝ  
それをたんねんに探してゐるのである。

## 春

○廣江澤次郎氏は、お書飯は、いつも三越で召し上つてゐる。  
○それは異議なしとして……御食事中よく若い女の寫眞を出しておひとり、ニヤリ……  
○これは、實に穢やかでないといふ衆評がある。

しやぼん玉  
恍惚と  
見上げてゐる空中には

ざらりと光る玉が

ふわり ふわり

青ぞらは よほど遠い處に懸つてゐる。

こんなに澤山こしらえて

何處にも何處にもそれゝ溢杯になつたら

世界中がどんなに美しいものになるだらうと

子供は思つてゐる

だからせつせと息を吸つては拵らえてゐる

夏の朝の風が涼しい

洗物をしてゐる母親のそばで

子供はしやぼん玉を

飽かずに拵らえてゐる。

## 叢

こんなにこんもり繁つた叢を

見てゐると怖れが湧いてくるのだ

白い花でもいゝ

たつたひとつ咲いて居てくれたら

どんなにか新しい目ざしを向ける

ことが出来るであらう

むしろ私は荒野に立ちたい

そこでこの緑を想ひ起すことが出来る

来たら

冬を重ねがだんだん減つてきた  
無数の旗竿が家に突きさまつて  
香水、白粉、口紅、油の顔が  
うぢや、うぢや と發生する  
ウインドの内側で光が薄色の洋傘  
をしつこくいぢくつてゐるので  
店の番頭さんは氣が氣でないし  
犬ころなんかは實に無作法極まる  
もので  
おまわりさんは よつほど要心して  
なるべくけんくわをしないやうに見張つてゐます

それに 殺人犯が頻りに起るので  
醫者が發狂してしまつた  
それでこの世界中が病人で一ぱい  
です

○ところで、よく聞いて見ると  
廣江さん、昨年から私設結婚媒介所を始めてゐるんだ。イヤ、『本事業は、アンタの如き適才に限る』と一部の人から背中を叩かれ、餘儀なく該所長を拜命したさうな。  
○と、三方四方から、求婚願書殺到……本部は、忽ち寫眞と履歴書の山……。

○で、毎日三越に出張し、先づアノ食堂を、兩性見合ひどころと定め、昨今平均一日七八組の、紹介作業をやつてゐるんださうな。

○時々『性の神様……廣江様』などといふ手紙が舞込むので、所長茫然……『名譽職もつらいぞ』

## 本場銘仙 毛糸各種

## ち、ぶ、や

本町二丁目  
(電話五〇五番)

# 別府のぞ記

和泉健太郎

(朝鮮貯蓄銀行)

【五四】

何をいふかと思ふと、『さて皆縁龜の井は茲に謹んで皆さまの御健康を祝します』、實にサービス百パーセントです。

ヤー随分と提燈を持ちましたネではこれ失禮致します。

記者足下

相も變らず編輯に御没頭のこと

と推察致します。

只今都の煩雜な生活から逃れて泉都別府で心身を醫して居ります何んしろのんき坊の集合の事とて、奇談、滑稽百出の有様、御多分に洩れず私も其の一人なので其の一つを御紹介に入れますと……

何番かの客人が、湯上りに屹度タオルを頭に載せる。その恰好、その要領、まことに野趣横溢！、女中さん一見「アラ〜」と叫んだのは、いが、両手に捧げたお膳を廊下に放り出して、ワツ……オホツ。

今日は亦絶好の遊覧日和とでも申ませうか、連日の風も止んで珍らしい好い天気だわと、女中さん達のさ〜やきを其のま〜……すゝめらるゝがま〜に、名物の地獄巡りと出掛けます……ありのま〜を簡単に放送致します。

いゝ加減朝寝をキメ込んだその日正午近く、宿の番頭さんの案内で、同宿の人々と共に遊覧バスに乗込みました。

車は展望式になつてゐて、車室の設備と大きさに於ては日本一だと鼻高々で番頭氏威張ります。

運轉手座席の上には、『安全第一、禁酒運轉』のモットを掲げ、其の名の如く緊張した、眞面目な運轉振り、微塵の不安たも感ぜし

めませぬ。訓練の行きて届いて居る點は嬉しい……何んしろ地獄行きですからネ。

車の動きと共に、あの評判の娘車掌さんが、それは玉を轉ばすやうな素適に美しい聲で、名勝を指しつゝ

此處は名高い流川(町名)情も熱い、湯の町で、旅館商店軒ならび、夜は不夜城でございます……

等……不思議なセリフを始めます乗客は、一寸面喰らひながら、ワ〜ツと喚聲……否拍手を送りました、筆者も其の一人なのです。

雲の晴れた鶴見連峰、麗姿を別府灣に映す高崎山……四期花の絶えざる觀海寺を車窓に掠めて……ヤツとこの例の地獄巡りを終るサテ龜川からは悠々極樂道です。娘車掌のアノ御詠歌式名勝解説は尙ほも續きます。

『右は山々、左は海、ドーデスお客さま、天下廣しと雖も、これ程の好風景は、先づ御座いますまい。で、此處いらで、別荘の一つもお建てになりましたは……』、その美音をうつとりと聞いてゐますと、妙に自分は別荘持のやうな氣持になる。實に不思議千萬！中にはタラ〜漣の流れるお客様もある。

さて四哩のドライブも、無事に終つて、いよ〜車を下りる。と娘車掌さん、丁寧な頭を下げて、

## ◆日本米の話

それかし

○昭和五年我國の米の收穫高は政府の發表するところによると、六千六百八十八萬二千石である。

今この米全部を貯蔵するとなると丸の内ビルディング一棟には、百八十萬石しか格納することが出来ないといふから、丸ビル程の大倉庫を三十八棟造らなければならぬい勘定である。

○又、この米を四斗俵にすれば一億六千七百二十萬五千二十俵となり、これを富士山型に積み重ねると、最も下の列は、五萬七千八百二十九俵で、上へ〜と一俵宛つ減じて行つて、五萬七千八百二十九段となり、一俵の俵の高さを約一尺五寸とすれば、實に六里二十五町二十四間で、富士山の一里三十一町十五間五尺に比へて正にその三倍半となる。

○更に、亦一升の白米を約六萬八千粒(内務省社會局調査)として計算すれば、四五四七九七六五四四〇〇〇〇粒となり、これを數へるに一秒間に五粒の早さとし毎日十二時間宛少しの休みなしに計算しても、日本人全部老人から赤ん坊迄總動員(九〇三九五〇四一人)で三十一日間即ち一ヶ月を要するとは驚く。

# 琉球の人と自然

澤村五郎

(大坂朝日支局)

琉球にきて最も嬉しく感じたのは淡紫にいろどられた空である。が更に嬉しかったのは熱情的に繁る植物であった。

二月下旬といふに内地の五六月に匹敵する気温で角肉質であつて互生する葉を持つ瀟沈丁の花はぼつぼつ咲き初めてゐた。大空に似てやはりその花は淡紫色であつた。黒いまでに緑濃い葉が著るしく熱帯気分を見せるがジュマルは常緑を誇り顔で、球形をした黒色をしたその隠頭果は小鳥の好食餌であり琉球名物の颱風を防ぐには最も適した樹だといふ。

美人の口に似た無数の葉痕を持つ莖を所有するパイヤにはもう青い果實が垂れてゐた。島の人達はやがて黄熟すると素晴らしく美味なその果實に舌鼓をうつことだらう。パイインといふ有名な蛋白質消化酵素もこの果實からとれるといふ。

八月の盛夏になると黄色な花を圓錐状につけるといふシロップの灌木や、葉の高さ丈餘におよぶ羊歯、さてはチタと呼ぶ若い女性の乳房を聯想させる實の出来る『おほいたびかづら』、涙で育つといふ傳説を持つコハテイシの樹には龍骨状の緩のある果實がなり、それから芳烈な香をもつ薬品がとれるさうだ。

その文字からして怪奇な龍舌蘭は多皮質なその葉を孔雀の尾のや

うに垂れて南島風景を誇り顔である。

鐵分と燐を含んでゐる蘇鐵は、野に山に充滿してゐるのを發見するだらう等々、かくした豊富な熱帯性植物を背景にして朱色の薔を待つ民家が散在し密集してゐる様は最も好ましい繪畫の好取材たるを失はぬ。

以上、あまりに印象的であり貧しい筆ではあるが、美しい琉球の人情と自然とを綴り終つて、最後に附記しておきたいのは、この人情美に背馳して沖繩縣人の經濟力は非常に貧弱であることだ。

土地の大部分は殺風景な甘藷畑と蕃蔗畑であつて、それ以外の農作物はフィリッピン、カロン、マリヤナ諸群島の間にある海苔で發生する暴風の襲來でとかく滅茶苦茶に荒廢されてしまひ勝である。もし甘藷の代りに五穀を作るとしたら、沖繩縣人の需要を充たすだけにでも現在の土地の七倍を要するといはれ、土地の狭隘な沖繩は甘藷によつて救はれてゐるやうなものではあるが、『沖繩の産業の發達しないのは甘藷畑のせいだ』といった大島正滿博士の言葉は餘儀なくして甘藷を栽培し、その甘藷のために一層貧困を招來してゐる不可抗的な沖繩の經濟的苦悶を最も雄辯に表現してゐるだらう。島民の經濟の基礎をなしてゐる

蕃藷栽培に伴ふ糖業にしたところで、製糖會社の土地兼併は小作人を増加せしめると共に、瓜哇糖の出來不出來によつて騰落の激しい砂糖のことだ、糖業のみの一元的生産に基礎を置く沖繩縣民は、何時も射的的な不安におびえなければならぬ。

山林にしても人口の稠密な本島の南部は濫伐の結果ほとんど見るべきものがなく、僅かに北部のかなりの森林が残つてゐるにしか過ぎぬ。統計表によると沖繩縣の生産額は全國他府縣の平均額に比べるに僅かにその三分の一強にしか過ぎないのに、縣民の負擔する租税額は他府縣の租税平均額の二分の一を負擔してゐる。加ふるに生産額の増加率は二倍餘であるのに財政の膨脹は三倍に達してゐるので、毎年百五十萬圓の不足となりそれだけ縣外に流出し疲弊に次ぐに疲弊を餘儀なくされて來た。

幸ひ飯尾前知事の際に沖繩縣救濟資金として十年間に五百萬圓を、國庫から支出することになつたが、それとても煎じつめればまだ微温的で燒石に水を注ぐやうなものだと島の識者は語つてゐた。

言語學者チャムバレンは——「琉球人はその體質日本人に酷似しモンゴリアンのタイプを有してゐる。彼等の祖先はかつて共同の根元地に住してゐたが——」と記述し、更に言語學上から推論して「語詞論においても措辭論においても根本的一致を見出す」といつた。朝鮮總督府の桐原醫學博士は血清學上から、大和民族の一部は南洋方面から移住して來たことを立證し沖繩縣人と他府縣人との間に連繫する人種係數を明かにしてゐる。

其の名の如く緊張した、眞面目な運轉振り、微塵の不安たも感ぜし

終つて、いよ／＼車を下りる。と娘車掌さん、丁寧に頭を下げて、

一人)で三十一日間則ち一ヶ月を要するとは驚く。



琉球末期の大政治家眞彌朝保は三十餘の琉球語を古事記や萬葉集の中に出る日本の古代語に比較し似通つてゐることを指摘した。

近ごろ學者の間に靈頭してゐる南島研究の眼目の一つが、琉球に残されてゐる日本古代の姿を見出すためだといはれてゐるのを思ひ合す時に、琉球はなつかしい大和民族の郷里である。郷里の自然の美と人の幸福をこひねがはぬ者があり得ようか(元)

◆お壽司雜感

三木一彦

○三越や、丁子屋の食堂で、蕎麥を食へてゐる人は多いが、ホントの食べ方を知つてゐる人は、殆んどないらしい。  
○ソコに行くとき、昔の江戸人は實によく研究したものである。  
○お壽司は、つまみ方もあれば口へ持つて行く方式もある。しか

し食堂で食へてゐる人を見ると、殆んど減茶食ひをやつてゐる。

○私は、朝鮮へ来て、ワサビの利いた鮎を、一度も食へぬ。どういふワケかと研究すると、壽司屋も、食べる人も、關西の人が多い一體關西では、ご飯時に鮎を食へる。それと違つて、關東では、おやつの方に鮎を食へる。どうもあいつがピリツと來ぬと、ホントの味はしませんネ(大日本ビール丹羽さんの話)

歌へる

福田有造

(全南木浦)

いつ果てるともなき吾の旅なれば心おきなく君ぞゆかまし  
吾が胸は燃えにけり火の如く焔の如く兒等を戀ふるも  
なげなしに身は空蟬と云はまほし君なくとも吾は生くるも  
今一度東の都に歸らまし吾をそむくと君は思ふか  
唯生くるそれはねたまし夢の國幻の國よこしまの國  
吾はゆくともはなくとも淋しくも悲しくもなし君ある故  
君なればともに行かんと思ひ給ふを振り捨ててゆくと思ふや  
何事も宿命と云ふその氣分叛逆と云ふ母の心は  
世の中は唯うとまじきものはと吾は云ひけり君の傍にて  
何故に干渉がましきことかなと嘆くも哀

れ細りゆく身に  
假面なり黄金律にとらはるる罪に入るゝ  
を覺悟しつつも  
純情に生きるを女のならばしそそをうた  
くるも女なるかな  
凡そ世に果敢なきものは同性の愛ならなくにさげすむ心  
運命か因果か何か知らざるも苦しめる心痛める心  
年若かく千恵さん逝きぬ永久に鎌倉に眠るいとやすらかに  
うら若く逝きし人を恨みつづ病々衰ふる身上旅の空にて  
分らざる周圍は如何にあるとも唯一人あり心強くも  
なやみあり悶えもありて人の世上泣かんかああ淋し  
若人の血潮は鳴れど老繪のそのおとし穴吾は入らまし  
追はざればかくまひならざるものぞかし誰かいたづらぞ何ぞつれなき  
家を思ひ兒を思はざる人もあり汝が行末よ離れゆく心よ  
幾度か嘆きの淵に沈みつつ亦思ひ見る歡喜ある日を  
相容れず相容れざるも人の世の舊き掟にとらはるるひと(一九三一、二、一八)

# 獨身生活

小池朝光

(黃海道載寧)

田舎へ來ると都會と違つて人情

味がたつぷりで一夜の友も十年の知己を得たかのよふである。然し又天地が狭いだけに公私共頗る難澁の問題に逢着する。公の務は飯の種である以上今更苦た樂たなどと贅澤なことは毛頭言はれた義理合ではないが、扱て私事に至つては裸夫生活であるだけに随分情けない目に逢ふ。以下は其の裸夫生活體験談の二三である。

名ばかりの官舎は實に設備が不充足である、だが寒い土地柄だけあつて温突も切炬燵もプロ階級相當の設備は一通りされてある。勿論風呂もあるが是れ又非常な難物である。兎角オモニーは暇を盗みたがる爲に薪を一度にうんと放り込んで湯加減などは一向お構ひなしである。熱いからと言つて無闇矢鱈に冷水が注ぎ込まれるればいと容易すい藝當であるが、極端に水の節約を強められる當地では一滴の水も中々貴重だ。若し熱いとあらば已むを得ず蓋を取つて大氣に洒して冷すより外は途がない。で這入り頃となると何時でも夜半を過ぎた二二時頃であるが、さりとて目覺まし時計を掛けてまで這入る勇氣はない。若し不經濟だ、もつたないと言つて翌晩に廻すと今度は零下二十何度と言ふ嚴寒に遭遇して忽ち凝結する。であるから風呂は何時でも寒暖計のやうに氷點から沸騰點へと上下してゐる。

る。

オモニーを僮つたが内地語を一つも解し得ない、其當座は不便と言ふよりも寧ろ苦痛であつた。然し炊事や掃除にはどふしても同人の手を借らなければやれない範圍である。其の内朝晩の簡單な用件位は大概手眞似で間に合ふやうになつて來た。最初には肉を買はせるにも四つ這ひになつて牛の鳴き聲をしたり、コケツコーと羽バタキして卵を買はせたものであるが此頃では其の必要もなく濟んで來た。然し臺所方面の無頓着と無關心には全く弱らせられる。即ち無精不潔と言つた部類が其の主なのである。常に見て居る所では左程でもないが、一度視線外に置かれると忽ちあの手鼻をやる。それも兎角食事の所作に懸かる時にやる。たとへば漬物などを切る折には何時しか左手でチーンと來る。夫れが一寸腰の邊りを小摺つたかと思ふと再び漬物に載せられる。一たい手に附かぬのか、乃至手に附いても平氣なのか、此點誠に曖昧である。或る西洋人が言ふのに日本人は便所へ行くと必ず手を洗ふ習慣があるが、あれは糞を手に附ける爲である。吾々は便所へ行くが毛頭糞を手に附けないから洗ふ必要はないと言つたそふであるが、屁理屈であることは兎も角として見逃せない一つの眞理である。オモニーも之を眞似たかどふ

かは寡聞にして知らないが、兎角食事の過程に入ると直ぐあれをやる。食慾と手鼻とは不可分關係に置かれつゝあるよふである。ハナハダ困るなどと苦しい洒落れどころではない。

舊臘の大晦日には恒例に依つて運蕎麥を祝ふ事にした、然し當地には朝鮮蕎麥はあるが内地蕎麥がない、別段朝鮮蕎麥と言つても蕎麥には變りがあるまいと、オモニーに命じて蕎麥玉を買はして來た折しも除夜の鐘も聞へるので、急ぎ用意の七輪に鍋を掛けて味加減もよからうと朝鮮蕎麥を入れた。

## 新築落成

- 一階 食堂 撞球場
- 二階 御宴會場
- 三階 無料開放
- 本町五丁目

阿波文

電本一八三七

暫らくして蓋を取つて見れば、蕎麥は全く溶けて糊同様となつたのである。二年越に開いた處に依れば朝鮮蕎麥は冷麵と言つて冷へ汁で喰ふものだそふで夫れを知らなればかりに熱湯で煮沸した。お陰で去年は運蕎麥も喰へず淋しい遺瀕ない年越をした。

オモニーから貰つたかどふかは保證の限りでないが、痒いから肌衣を脱いで具さに検査すると玄米のよふな風が一匹居た。何にしてもし一匹居るからには同族が居るだろふと暫し精査したが他に一匹も見當らない、して見ると私の體が彼の發祥の地でもなければ又墳墓

の地とも豫定された譯ではないらしい。全く一時の宿借りに過ぎないのである。此の點から見ても確かにオモニーから貰つたに相違ないので、此の理由を詳しく説いてオモニーを詰問したが、頭として自分の移住者たることを肯定しない。己むを得ず行廳上血液検査は出来ないとしても、せめて類似検査なりすることにして私の虱とオモニーの仰山居る虱の中から一匹摘出して比較検査を始めたが、體の格好もであるが、首、手、足等頗るよく似て居る。況や兩者を接近せしめると速く抱擁する。此點から見ても血族關係たることは否めない事實であるが、體色になると著しく相違する。私のは黒くオ

モニーのは白い。夫れは申す迄もなく私の虱はメリヤスに棲息した保護色で、一寸斷つて置くが是れは土師さんから饒別に貰つた肌衣である。オモニーのは反對に晒金巾に棲息した保護色である。前者の理由ではオモニーも稍々自分の虱であることを肯定して呉れるが後者の理由は全然肯定して呉れないのみならず、あべこべ前者の理由をも併せて否定せんとする勢である。そこで不束な博物學の智識で保護色の由緒を説いて、大いに納得に努めたが不幸にして此の蒙を啓くに至らないのは残念である。然し來て呉れた虱には眞に私の孤獨生活の同情者として憎む譯には參らないのである。

### 籠 賣

佐瀬武雄

(鑄道局)

ヨボが ヨボが  
ヂゲ 脊負ひ  
山のやうに籠つんで  
賣りに行く  
京城の  
三角山より なほ高く  
籠は眞萩の 簾編み  
あらい眞萩の 簾編み  
朝日が射せば  
籠目を透し  
山のやうな蔭が  
路一杯に だんだらだら  
だんだらだら

### お百姓物語

北 漢 山 人

○方台榮さんは、この一二年市外の農場で、セッセとお百姓をやつた。

○往來で、馬の糞の轉がつてるのを見る。方台榮さん覺えずもつたいなくなつて、あら惜しやとばかり、懷中より白紙を出し、『然らば拙者難有く頂戴仕る——』、押し頂いて農場へ持ち運んだものだ。

○昨年の夏などは、茄子を作ることに熱中し、連日炎天下に働いたために、背中がクルリと脱落し、丁度あのトマトをむいたやうに、下の赤身がムクテ上つて來た。

○『方さん、そいつは痛いではう』といふと、『それが……労働の快味を知らぬ人の贅語です。一皮むくと實に涼しいですよ』、方さんホントに涼しい顔をしてゐる。○だが、斯うやつて作つた茄子が、殆んど馬の糞同然——タダと一緒になのは、流石の方さんも兵古タレた。あの碧玉のやうな茄子を、百五十顆も、市場へ持つて行く。何んぼう呉れるかと思ふと、この代金十三錢五厘也……。『オイ市場君！、それぢやア肥料代にも足らんネ』といふと、先方『さうですよ。だから方先生！背中の皮をむく目的なら百姓だけ餘計ですよ。ネ、あすから七輪の上にお乗んなさい』——こいつがく、蒲焼と間違へてゐる。○兎に角こんなことで、方さん廻れエ右！、またこれから當分本を讀むことに決めたさうです。

Kで興ふる手紙

暫し木蔭の宿りにも  
奇しき縁のありと聞く……『

# Kに與ふる手紙

古田 琢磨

(京南鐵道會社)

『三年の春はずぎ易し  
花紅のかんばせも  
今別れては何時か見ん』

K君—夕闇に簫すんだ丘に立つて夜遊の興を惜みつゝ消燈の後も尙歌ひ和した同胞が一人去り二人去り今では殆んど互に相ひ逢ふ折もなくなつて居る、けれどあの本郷時代の思出は吾等のアルト、ハイデルベルヒとして永遠に僕等の記憶の中から消え去る事はないであらう。

K君—僕も亦朝鮮に落ちて来た、いつの日に又再び接し得られるやも計り難い、なつかしい銀座街のネオン、サインとジャズの渦巻く繁華な都東京に、無限の思慕と追憶を残しつゝ無心の車に運ばれて玄海の荒浪を横ぎつて朝鮮に來た、然も既に半歳の月日は流れて居る、東京驛頭に見送つて呉れた君の元氣な顔は今に生新しく記憶に浮んで來るが……そしてあの當時の限りない淋さと心の動揺も……。

K君—君は未だ朝鮮の土地を踏んだ事がない、地理上の朝鮮と實際に住む朝鮮、そこには思つたより大きなギャップがある様に思へる、朝鮮に來て第一に目に映ずるものは禿山と曠野の朝鮮家屋だ、これが朝鮮の景色を代表するものと言つても敢て過言ではあるまい、それは何等の雅趣に乏しい、轟々と疾驅する車窓外の之等の眺めは

やがて華やかな地に住みなれた僕等には寂寥を感じさせる。

K君—だが然しこの偉大なる半島には多くの温泉、海水浴場、山紫水明と言ひつべき場所がある、そしてそれ等は慰安の一つとして僕等に映ずる。

僕が今住む天安も西方三里の彼方には涼々として湧き出で、絶えない透徹の温泉と總てに完備せる温泉場がある、それは田舎では想像も及ばぬ立派なものである、盛夏都塵に汚れた体を温泉に洗ひ清め、冷えきつたビールに一日の行樂を糧にして陶酔の境地に入り、寒氣肌に泌みる嚴冬、適温の浴槽にひたり、温泉料理に浴塵を脱した微醺を味ふも又野趣津々たる一掬の慰安劑ではないか。

K君朝鮮にも四季の花は襲ひ鳥は囀る。そして雨も降れば雪も積る、遠山が雨に煙つて腫に霞み、禿山が純白に彩られるのも亦捨て難い眺めである。

斯く觀じ來れば朝鮮もあながち住み難い地ではない、我々の力でもつと守り育て、美化して行つたなら、それは第二の郷土となし得るに困難な事ではない様な氣がする。距離に於ては遠いが觀念上で縮めていつたなら君も亦朝鮮に遊ばんとする氣分にならないとも限るまい。

されば君—  
『野路の村雨晴るゝ間を

廻れエ右！、またこれから賞分本を讀むことに決めたさうです。

暫し木蔭の宿りにも

奇しき縁のありと聞く……』  
と青春の躍る血潮に燃えながら高らかに歌ひ和した我々である、今西と東に距るとも再び共に相逢ふて懷舊の情に熱い感激に耽るのも遠い日ではないであらう。

## ◆美夫人漫話

漢江漁郎

○或る席で、京城の美人奥様—  
—といふ話題が出た。

○折柄ソコにゐられた加藤灌寛氏『……といふと、脇判事の奥さんなどは、先づ京城一ですネ』

○スルト隣席の某氏、『私は脇夫人は知らんが、これまでお目に懸つた範圍では、伊森さんの奥さんですネ。紛れもない京城一と思ふ……』

○と、その向ふのこれも某氏、『イヤ美人不美人は、もつとこの標準に依るので、絶對的とはいへぬ。とまあ斯う斷つておいて、さて僕の京城一と思ふのは、總督府の穩積さんの奥さんだ』

○しばらく甲論乙駁がつとく。

○スルト加藤さんのいはれるやう、『皆さん、このお話は、もうこの邊でよしませう。どなたが京城一と決まつても、要するにそれはよその奥様……またそのよその奥様に餘り力を入れ過ぎるといふのも、どんなものですかネ……』

○これで、一應は静まつたが、  
○突然某氏、奇聲を發して『だが、僕ア本問題が大好きでネ。イヤほんとの話……今夜中でもやりたいヨ……アーン』

○滿座の男女、ドツと爆發！。



やまと歌

國風會京城支部

【六〇】

へ鹽をめぐみし君か情は  
○ 浅井佐一郎  
今もなほ世に匂ひけり湊川なかれ  
も清き菊の下水

窓前鶯

○ 足立丈次郎  
里なれて窓の邊近く鶯のけさは來  
鳴けり聲もほかに  
○ 全 人

○ 浅井佐一郎  
今はし窓なひらきそ鶯の軒は近  
くも來てそ鳴くなる

○ 今村 雲嶺  
はらからと楽しく語る窓の前によ  
ろこひそふる鶯の鶯

○ 田中半次郎  
窓近き梅をとひきて鶯のあさいの  
夢をさましけるかな

○ 濱野鍾太郎  
庭の梅にいつやとりけむ鶯の初音  
ゆかしく窓にいり來る

○ 工藤 武城  
消え残る雪さへあるに窓近くこそ  
のとかに鶯のなく

○ 安東都天子  
朝日さす窓にうつれる梅か枝には  
るつけ鳥の初音うれしき

○ 中島 貞信  
長閑さに窓をあくれば梅か枝には  
やも來てなく春の鶯

○ 全 人  
ふく風はまた身にしめと鶯のなく  
音に窓はさしもかねつつ

○ 松寺 竹雄  
こもりあて聞くもうれしな窓の外  
の梅のたち枝に來なく鶯

○ 佐野喜平次  
朝日さす窓に繪のこと影うつしこ  
ろほからかに鶯のなく

○ 古田 龜子  
咲く梅の香もなつかしき窓のへに  
ほからかになく鶯の聲  
窓にきてなく鶯の初聲に幼子まで  
も耳すましけり

雪中行軍

○ 足立丈次郎  
ふりしきるみ雪のなかを軍人の駒  
うちつれて進み行くみゆ

○ 浅井佐一郎  
ふりしきる雪を蹴たてて進みゆく  
わか兵士の勇ましきかな

○ 今村 雲嶺  
ふる雪に列をととのへすゝめてふ  
聲につれつつ動く兵士

○ 田中半次郎  
朝またきつらをつくりて兵士らふ  
ふきの中をいつも行くらん

○ 濱野鍾太郎  
武夫のたけきころそたのもしき  
雪を蹴立てて山路越へ行く

○ 工藤 武城  
静々とつらをみたさずふる雪をふ  
みしたき行く雄々しますつら

○ 安東都天子  
軍人駒うちつらね勇ましくいさや  
すゝまむ雪の山路を

○ 中島 貞信  
をゝしくも見えにけるかなふる雪  
に列もみたさず進む兵士

○ 松寺 竹雄  
くたの音に足なみそろへ野の雪を  
蹴たてて進む軍人かな

○ 佐野喜平次  
たたかひのわざならすらし軍人の  
雪ふる中をつらなへて行く

○ 全 人  
ふりしきる雪をしのぎていさまし  
く進み行くなる兵士のわれ  
○ 古田 龜子

詠史

○ 古田 龜子  
いさをしはとはにくちせし光國の  
書き残したる大日本ふみ

○ 佐野喜平次  
湊川水は濁くとも君か名はとはに  
流れて世に残らん

○ 全 人  
櫻木に書き残したる文字を見てい  
かにうれしとおほしめしけん

○ 松寺 竹雄  
七度も生れかへりてつくさむとい  
ひし言葉そ世のかかみなる

○ 中島 貞信  
子のために三度すみ處をかへして  
ふ母のをしへそたふとかりけり

○ 全 人  
生きしにの昔にありて梅か枝を籠  
にさしますつらあはれ

○ 安東都天子  
さ夜ふかくおもふころを櫻木に  
書き残したる武士あはれ

○ 工藤 武城  
たた三人残して仇をしつめたる筑  
紫の海の伊勢の神風

○ 濱野鍾太郎  
君に身を捧げまつりて湊川かくは  
しき名を世になかしけり

○ 田中半次郎  
笠置山松のしつুকのもれ來るをふ  
せくすへなく御袖ぬれしか

○ 今村 雲嶺  
もののふのかかみなりけり仇にさ

つて、脇さんが裁判官であるとい

私は最後に法律がもつと私ども

異性風景

水井れい

協判事について何日か何か書いて見たい衝動を感じてゐた。それ程、脇さんは異色ある存在であつた。第一その風貌が野趣があると同時に掬ひつくせない温みがあるもつてゐる事である。雑筆三月號にのつた『雜想』も脇さんを知るものに於いて決して氣取りでも何でも無い眞剣さ——即ちさういふあたたかい感情の一面が（或は全面であるかもしれない）ある事を切實に感じるのである。

敏腕の譽高い豫審判事といへば事情に通じない者は厳しい、威壓的な、自分のきめた筋道に嫌でも應でも引ばつてゆく、さういふものを感じた事であらう。私も初めから裁判官といへば堅苦しいこはい者だと思つてゐた。しかし、事實はさうでない。多くの人の中から俊秀を選んだだけあつて、その常識に於いてもすぐれた人が多い。一々名前を上げるまでもあるまい。協判事などはその尤なるものである。脇さんの神経は相手の感情に浸透する。脇さんの神経は細かく動いて相手の感情と同化する。脇さんの神経は同時に相手の一つの神経の動きをさへ見のがさない。これが優れた豫審の調書となり普通の場合は慈父の如きあたたかみとなるであらう。

この境地は人間ができる事を第一の條件とする藝術家（これについては異論があると思ふが後に譲る）偉大な藝術家のもつ特質であ

つて、脇さんが裁判官であるといふより純情な詩人と等しいひらめきを對者に與へる所以であらう。名豫審判事たる事はこの高い情操を持つてをらなくてはならないこの廣い抱擁の中から正しく抽出されたものが豫審の調書でなくてはならないと思つてゐる。

脇さんとは何を語つたか。それは難しい議論でも何でも無い。愛についてであつた。愛とは、言ひ古された事であるが戀愛を意味しない事であつた。愛せられる事ではなくて愛する事であつた。脇さんは無倫愛する事により多くの意義を感じてゐられる存在であつた。愛とは果してロマンティックな空想に過ぎないものであらうか。多忙な人世にこの言葉さへ忘れがちな人世に愛を考へる脇さんはそれ程閑人なのであらうか。

厳しい豫審室でその豫審判事の胸にこの寶玉にも等しい愛が育まれてゐる事をしつかりと記憶してゐたい。

ここに一つの水死事件があつたとする。將に溺れんとする二人を見つづ僕は痔が悪いから水に入ることができないといつて傍觀してゐる學者があつたとする。學者の態度に輕蔑に價するのは勿論だが、その情死の當人が友達でありその相手が友達のリーベであり、又その學者との複雑な精神葛藤の存在した場合は、その頃、六高の學生であつてそこに合せて脇さんは、當然そこに何者かの存在する事を直感して探査の歩を進められたといふ。

脇さんの目的は終始して裁判官になる事であつた。さうして今も悔ひないといつてゐられる。

古田萬龜子  
ものふのかかみなりけり仇にさ  
窓にきてなく鶯の夜聲に幼子までも耳すましけり

私は最後に法律がもつと私どもの生活に近くなつてくれる事を望んでゐる。さういふ時にこそほんとうに生きた判決が生れ、ほんとうに脇さんが喜ばれる時だらう。脇さんの世評は好評噴々たるものがあるとはいへ、ある日脇さんはこんな事をおつしやつた。『世間の男がそんなに賞めてくれても嬉しくないんですが、女の方の評判はどうですかね』と。

私はいはう。類稀な美夫人であるあなたの奥様がほんとうにあなたに生命をなげ出してゐらつしやるやうに、世間の女も必ず脇さんが好きになるであらうと。

うれしき話

漢江漁郎

○今度京日の庶務部長として入社した上杉直三郎君……曾て京城府廳にあり。名物男として大に鳴らしたものである。

○資性磊々落落々、大に風流を解し。『杯やれば、二上り、三下り口を吐いて出づ。上杉夫人も亦伉儷相和し、夫君が『春雨や……』と唄へば、お台所で、小皿を洗ひつゝ、『チテツン〜』

○友人等羨望措かず。『上杉君……よく教育しとるのう』、

○今度元山土木出張所長に榮轉した長郷技師、夫人と共に茶、生花等を修業してゐた。

○將棋會に出席して、散々負けとゐると、お宅から電話！『またいぢめられてるんでせう。早くお歸りなさい』、長郷さん『歸りますとも……又あなたとお茶でも立てませう』、御同僚『オッホン』

# 春は都門に

萬樹悉く青く  
百花一時に繚亂  
を競はむとす

一年の好季！

野に山に春を趁  
ひ春を尋ね春を  
禮讚致しませう

しかし皆様！その  
都度銘酒「福迎」を  
お忘れなきやう

町本城京

## 難波酒造場

最も古き歴史と

最も良き品質

二十年奉  
おなごの  
最上醬油



最上醬油

香味  
佳絶  
ホシ大ソース

永登浦  
大塚醸

お上品な

料理は

淡口醬油



淡口醬油

一度御試用

のほど願上ます



皮膚泌尿  
花柳病科

# 渡邊醫院

院長 渡邊 晋

京城黃金町入口日本生命裏  
診察十二時半マデ及ビ夕刻

内科  
婦人科

# 今本醫院

院長 今本義胤

(京城旭町一丁目)

溫陽溫泉

# 神井館

設備は整頓し  
居心地最も可

溫陽溫泉

# 溫陽館

溫陽にて最も  
古き旅館です

昭和六年三月廿五日印刷  
昭和六年四月一日發行

本誌定價

一ヶ月(二部) 四十五錢

半年分 二圓六十錢

一年分 五圓

京城府和泉町一七〇

發行兼 松本武正

編輯人 石川利夫

印刷所 京城日報社

京城府和泉町一七〇

發行所 京城雜筆社

電話光化門三〇六番

誰でも直ぐ使へる

# 大谷和文タイプライター

が参りました

○和英 兩用    ○鞆 に入れて機行自由    ○字數二千四百外摺換自由

朝鮮中央總代理店

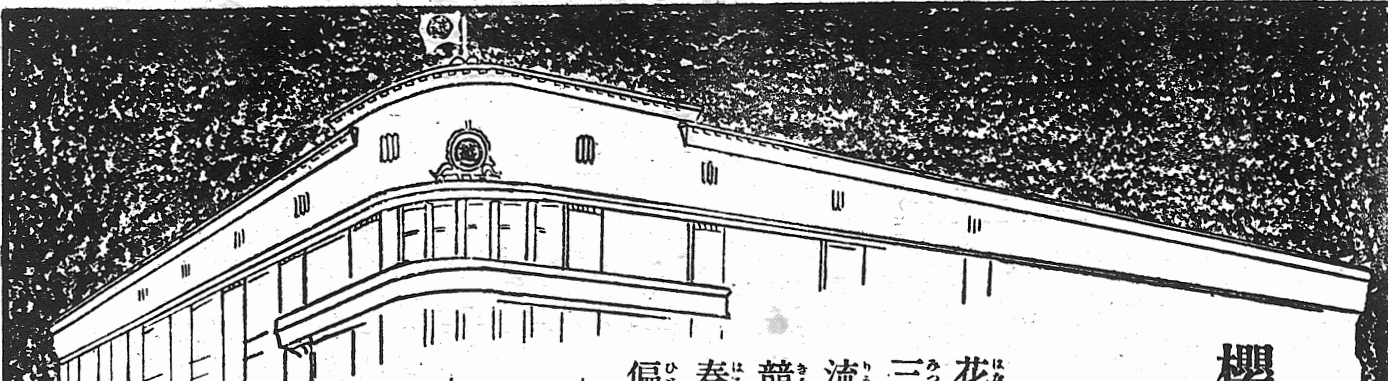
京城明治町一

櫻井秀專商店

電本園三〇〇二番

大正十三年一月二十九日  
昭和六年四月一日發行

(第三種郵便物認可)  
(毎月一回一日發行)




櫻咲く四月  
お買物は三越

流行と實用の良品揃ふ

花笑ふ長閑な春が参りました。  
三越にも清新の香にみちた春の  
流行品や實用品等が百花と艶を  
競つて陳列致して御座います。  
春の御買物は三越へ御用命の程  
偏に御願ひ申し上げます。

地方よりの御注文は通信販賣係へ御用命を賜れば  
早速御送附上げます。  
振替口座京城七七番



三越

◇ 城 京 ◇